

《論 説》

中世の大学の生成と展開

——初期の大学と危機——

小 野 秀 誠

- I はじめに
 - 1 序
 - 2 中世の大学
 - 3 ケルンの特色
- II パトロンとの関係—教会と市
 - 1 教会と理事長
 - 2 他の大学との比較
 - 3 大学の財政的基礎1—聖職祿
 - 4 大学の財政的基礎2—市負担の教授職
 - 5 シスマの時代以降の大学の地位
- III 機関と学生
 - 1 学長
 - 2 学長補佐
 - 3 学生生活
 - 4 入学と学籍簿
 - 5 学位の取得者
 - 6 その他の慣行や災害
- IV 各学部と学位
 - 1 学部構成
 - 2 法学部と学位
 - 3 法律学校と付属施設
 - 4 他の学部と財団

V むすび

- 1 改革の試み
- 2 大学の廃止

I はじめに

1 序

(1) 欧米の大学の歴史は古い。最古のものは、イタリアの大学であり、サレルノ大学は、12世紀に、シュタウフェン朝の皇帝フリードリヒ 2世 (1194-1250, 位1196-1250) の法令によって認められた。ボローニア大学も、12世紀末に遡る。同大学は、一般に、現在まで継続している最古の大学とされる。ビツェンツァ (Vicenza) 大学は、1204年に設立され、1209年まで存在した。短命な大学は他にもあったが、長く存続したのは、13世紀初めのパリ大学とオックスフォード大学、モンペリエ大学である。ケンブリッジ大学は、1209年に設立された。イタリアでは、1222年のパドヴァ大学が古い¹⁾。

(2) アルプス以北では、1347年のプラハ大学が古く、1365年のウィーン大学、1385年のハイデルベルク大学、1388年のケルン大学、1392年のエルフルト大学がこれに続く。14世紀の大学設立の時期から数えても、すでに600 年以上となる。イタリアの初期の大学の生成期からだと、800 年にもなる。

1) 大学の歴史一般については、Rüegg (hrsg.), *Geschichte der Universität in Europa*, I, Mittelalter, 1993; II, *Von der Reformation zur Französischen Revolution (1500-1800)*, 1993, S.113ff.; III, *Vom 19.Jahrhundert zum Zweiten Weltkrieg (1800-1945)*; IV, *Vom Zweiten Weltkrieg bis zum Ende des Zwanzigsten Jahrhunderts*, 2010. (以下では、Rüegg と頁数のみで引用する)。Rüegg, I, S.58ff. を参照されたい。また、ケルン、ボン大学については、Rüegg, II, S.81, S.86. 【変容】412頁 (ボン大学)。また、【歴史】189 頁 (大学の起源と最古のハイデルベルク大学)、506 頁参照。

若干の拙著は、以下のように略する。【大学】大学と法曹養成制度〔2001年〕、【法学上の発見】法学上の発見と民法〔2016年〕、【法実務家】ドイツ法学と法実務家〔2017年〕、【歴史】大学と法律家の歴史〔2020年〕、【変容】亡命法学者と法の変容〔2022年〕。

この長い期間には、大学の存在を左右する種々の事件があった。教会大分裂、宗教改革、啓蒙思想の勃興、ペストなどの感染症、費用がかかりすぎることなどである。戦争や社会の変化もあり、政治的には、18世紀末のフランスやライン左岸の大学の廃止もあった。現在の大学は、これらの事件や社会の変動に対応するために、変容をとげている。本稿は、このうち中世の大学の比較的初期の段階について検討しようとするものである。不変の存在はなく、どのような特殊性があり、どう変化したかを検討することは、過去の認識であると同時に、現在や将来の変化への参考にもなるからである。とりわけ現実の統計を使用する場合には、自然科学のような実験のできない社会科学においては、過去の検証から将来への指針の一助ともなる。

2 中世の大学

(1) 対象となる「中世」の期間は長い。大学の生成の初期と現在までの間には、800年もの間隔がある。そこで、その性質をひと言で述べることはできない。中世をどう定義するかには争いがあり、早い方では、476年の西ローマ帝国の滅亡から開始するとすれば、その後1000年、およそ1500年までとなる。12世紀末のボローニア大学を大学の原点とすれば、1517年の宗教改革までの大学は、中世の大学ということになる。ドイツでは、1502年のヴィッテンベルク大学や1527年のマールブルク大学から近代の大学となる。

中世を遅く定義すると、サラセンの進出によって西ヨーロッパが陸に閉じ込められた時代、8世紀が起点となる（トゥール・ポアティエの戦いが、732年）²⁾。このあと1000年を中世と定義するのは長すぎることから（800年程度とみる）、ヨーロッパが地中海を取り戻すきっかけとなった時、16世紀末（1571年がレバ

2) 歴史家のピレンヌは、サラセンの進出によってヨーロッパが地中海に閉じ込められた時期からの中世ととらえる。他律的なヨーロッパ中世の形成である（トゥール・ポアティエの戦いが732年。751年から、ピピンによるカロリング朝）。象徴となるのは、800年のカール大帝の即位時である。ピレンヌ「マホメットとシャルルマーニュ」古代から中世へ—ピレンヌ学説とその検討—（ピレンヌ他、佐々木克巳編訳、1975年）2頁、および解題、186頁。

ントの海戦)までとなる。オランダのライデン大学の開設が1575年である。ドイツでは、17世紀の大学改革の起点となったハレ大学が1693/94年の設立である。啓蒙の時代が境界となる。

中央ヨーロッパでは、前記の1347年のプラハ大学、1365年のウィーン大学、1385年のハイデルベルク大学などが古い。これらは、いずれの定義によっても、中世の大学となる。

宗教改革後の大学、たとえば、マールブルク大学や、1517年に宗教改革をしたヴィッテンベルク大学は、第1の定義によれば、近代の大学ということになる。しかし、伝統を重んじる大学組織の中では、長く中世以来の構造が残ったから、実質的には中世の大学に近い。過渡期の意味で、この時期からフランス革命までは、「近世」の大学とでもいうべきであろう。本稿は、14世紀末からフランス革命前、とくにハレ大学にみられる17世紀の改革前の大学を中心として検討しようとするものである。おもに第2の定義前の大学である。筆者はすでに中世の大学では、マールブルク大学を検討している³⁾。しかし、マールブルク大学は、当初からプロテスタントの大学として設立されたことから、中世の伝統から意図的に断絶している面もある。中世の伝統には、大学の起点となったカトリックの行動様式に由来するものが多いからである。

(2) 本稿では、長いカトリックの伝統をひくケルン大学を例に、中世の大学を検討する。ケルン大学は、啓蒙の精神による変革を制限したことから、学問的にも、古い時代の様式は長く残された。啓蒙の取り入れに熱心なマールブルク大学や北ドイツの大学との相違がある。それでも、ドイツの大学には、儀式の多くに、中世的なものが残り、場合によっては現在でもみられるものがある。これは、どこの大学にも共通している⁴⁾。

-
- 3) 【歴史】3頁。ただし、初期のマールブルク大学は、中世の伝統が強く残った第1期(1527-1650)と近世の第2期(1653-1733)とに大別された。18世紀以降は、近代の第3期(1733から19世紀)と位置づけられる。
- 4) ただし、19世紀に設立されたベルリン大学、再建されたボン大学などは、意図的に中世的装飾を捨象し、現代の大学のモデルとなった。歴史がないだけ、後発国のモデルとなりやすかったのである。本稿は、他の拙稿との関係では、プロイセンの

中世の記述は必ずしも一大学では明確ではないことから、1476年設立の

学を対象とした別稿（未刊）との対比で、およそ400年前の時代を対象としている。

中世の大学を対象とした著作は多いが、とくに1400年以前の大学を対象としたものとして、Denifle, H., *Die Entstehung der Universitäten des Mittelalters*, 1885, Neud. 1956（変更はない）。個別の大学史も詳しい。また、Classen, P., *Studium und Gesellschaft im Mittelalter*, 1983. (Schriften der Monumenta Germaniae Historica, Bd.29). とくに、S.170ff. (Die ältesten Universitätsreform und Universitätsgründungen des Mittelalters). 後者はもっと古く12世紀の大学を中心とする。Kaufmann, *Die Geschichte der deutschen Universitäten*, Bd.1, 1888も、タイトルに似ず、イタリアの初期の大学について詳しい。Lexis, *Die Universitäten im Deutschen Reich*, 1904は、基本的に、1900年当時現存した大学のみを対象としている。S.313ff.

Denifle, aa.O. によれば、1400年までの大学を大別すると、①特許状なしに設立されたものは、Bologna, Parisのほか、Salerno, Oxford, Orléans, Angers, Padua, Vercelli, Reggio, Modena, Vicenzaであり（S.231ff.）、②教皇の特許状によるものは、Rom, Pisa, Ferrara, Toulouse, Montpellier, Avignon, Cahors, Grenoble, Cambridge, Valladolid, Heidelberg, Köln, Erfurt, Fünfkirchen, Ofenであり（S.301ff.）、フランスの大学が多い。ドイツの大学の一部にもみられる。③皇帝やラント君主のみの特許状によるものは、Arezzo, Siena, Neapel, Treviso, Orange, Palencia, Salamanca, Sevilla, Lérida, Huescaであり（S.424ff.）、イタリア、スペインの大学に多い。④皇帝と教皇の双方の特許状によるものは、Perpignan, Lissbon-Coinbra, Perugia, Frovenz, Piacenza, Pavia, Prag, Wien, Krakauであり、広く分布している（S.515ff.）。⑤ Dublin, Genfなど設立できなかった大学もある（S.630ff.）。

Moulin Eckart, *Geschichte der deutschen Universitäten*, 1929も、大学別の記述であるが、プラハ大学から、新しいボン大学やシュトラスブルク大学までを対象とし、オーストリアとBasel, Zürich, Bernといったスイスの大学を含んでいる。Hoerber, *Das deutsche Universitäts- und Hochschulwesen*, 1912にも、個別の大学の研究がある。S.87ff.

最古の大学特許状は、皇帝法として、ローマ法大全に挿入された（勝田有恒「最古の大学特許状」一橋論叢69巻1号44頁。皇帝フリードリヒのAuthenticum Habita原文と翻訳付き）。これによって、特許状は普遍的な法規として位置づけられ、大学の特権的な地位の向上の根拠となったのである。Vgl. Hattenhauer und Buschmann, *Textbuch zur Privatrechtsgeschichte der Neuzeit*, 1967, S.30f. (Scholarenprivileg Friedrich Barbarossas AD 1158. 原文は、Monumenta Germaniae Historicaである)。

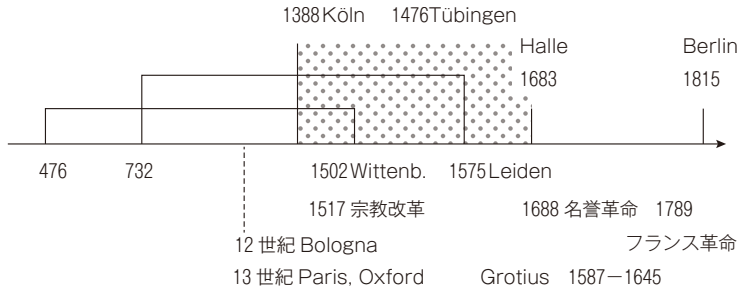
チュービンゲン大学の状況をも参考とする。もっとも、同大学は、カトリックの大学として設立されたが、すでに1534年にルター派に宗教改革をしている(ルターの宗教改革は、1517年)⁵⁾。そこで、参考とするのは、おもに1534年の宗教改革前の状況である(対比の対象としては、それ以後も参照)。

なお、初期の大学は、その性質上必然的に、中世の国家体制や宗教体制と不可分であり(カノン法は国法の一部でもある)、日本人にはわかりにくい。後述3(3)のチュービンゲン大学の組織図を参照されたい(37頁)。一面では、ラント君主の地位と関係し(最高学長)、他面では、学位を付与する司教や聖堂主事の権威と関係する(尚書や理事長)。大学の宗教改革が行われれば、後者の権威は覆される。その場合には、各ラントの教会と同様に、全面的にラント君主の権威をうけいなければならない(地域的な支配権)。近世の国家体制の変動にも似た影響をうけることになる。中世の大学は、構造上、宗教と政治の変動を直接うける体制を有していたのである。

5) チュービンゲン大学の設立と歴史については、【変容】449頁参照。また、Finke, Die Tübinger Juristenfakultät 1477-1534, Rechtslehrer und Rechtsunterricht von der Gründung der Universität bis zur Einführung der Reformation, 1972。以下、Finkeと頁数だけで引用する。チュービンゲンは南ドイツであるが、中世の大学は全ヨーロッパで標準化されていたから、地域による差異は少ない。差異は、設立形式やパトロンによるものである。

チュービンゲン大学は古い大学であることから、文献は多数にのぼる。ほかに、500 Jahre Eberhard-Karls-Universität Tübingen, 1477-1977, Reden zum Jubiläum (hrsg. im Auftrag des Universitätspräsidenten), 1977 (Tübinger Universitätsreden; Bd. 29)。もっと後代を対象とするが、Thümmel, Die Tübinger Universitätsverfassung im Zeitalter des Absolutismus, 1975 (Contubernium ; Bd. 7); Sieber, E., Stadt und Universität Tübingen in der Revolution von 1848-49, 1975 (Veröffentlichungen des Stadtarchivs Stralsund ; Bd. 6); Jens, Eine deutsche Universität, 500 Jahre Tübinger Gelehrtenrepublik, 1977。また、Haller, Die Anfänge der Universität Tübingen, 1477-1537, zur Feier des 450jährigen Bestehens der Universität im Auftrag ihres grossen Senats dargestellt, 1970。

大学と中世の区分



3 ケルンの特色

(1) ケルン市は、商業都市でハンザ都市であっただけではなく、遡れば、トリアーとともに、ローマの植民都市でもある（小アグリッピナの出生地）。ケルン関係の殉教者もいたことから、聖人にまつわる教会もある（St.Gereon, St.Ursulaにちなむ聖ゲレオン教会、聖ウルスラ教会など）。大司教座でもあることから、宗教都市でもある。ケルン大聖堂のみではなく、教会が多いことから、聖職禄も豊富である（上記の聖人教会や聖女教会は、市内12のロマネスク教会の一部に属する）。

1500年 大司教区



(Muir's Atlas of Medieval and Modern History, 1982, p.22) 中世ドイツには、選帝侯でもあるケルン、トリアー、マインツの大司教のほか、ブレーメン、マグデブルク、ザルツブルクなどの大司教がいた。外国では、カンタベリー大司教が有名である。

ケルン大学自体にも特徴がある。ドイツの大学の多くは、皇帝や諸侯によって設立された。そこで、大学のパトロンとなるのは、教会のほか、ラント君主である。ラント君主が大学を設立した場合には、教会の権能を承継した司教やその代理人の権威は、その尚書、のちには大学理事長の下に承継された。そして、ラント君主のパトロンとしての地位は、大学の最高学長として継続し、団体の中の機関として取り込まれた。大学の運営は、独立した団体内部で完結しやすかったのである⁶⁾。

6) Finke, S.45. 37頁の大学の組織図を参照。

中世都市としてのケルンについては、ビュッヒャー「現在と過去の大都市（森宜人訳）」（一橋大学社会科学古典センター Study Series, No.73）14頁以下。原題は、Bücher, Die Großstädte in Gegenwart und Vergangenheit, 1903である。ケルン、フランクフルト、シュトラスブルク、ニュルンベルクなどは、中世の大都市であるが、

これに対し、市参事会によって設立されたケルン大学では、理事長（Kanzler）の職が確立した後も、教会の大学保護者としての性格が強く残されている（保護官 Konservator）。また、パトロンとなる市からの資金支出によって、大学の財政は完全な独立性を確保することができなかった。ラント君主から独立しているという分権的な設立形態が、かえって団体としての大学の完結性を阻害していたのである⁷⁾。この独立性の不備が、のちに教育と大学を減ぼすことになった。以下のⅡでは、このケルン大学の特徴にふれ、続いて、大学の機関と学生（Ⅲ）、各学部と学位（Ⅳ）といった一般的な問題に立ち入ることにしたい。近代の大学とは異なる中世の大学としての性質が現れている。

(2) ケルン大学（旧大学Die alte Universität）は、1388年、帝国自由都市ケ

大きいと言っても、2万5000人以上の住民を有する中世ドイツ都市は1つもなかったのである。同16頁。

- 7) Keussen, Die alte Universität Köln, Grundzüge ihrer Verfassung und Geschichte, Festschrift zum Einzug in die neue Universität Köln, 1934. 以下、Keussen と頁数だけで引用する。また、ケルン大学には、Studien zur Geschichte der Universität zu Kölnのシリーズがあり、これは20冊以上にもなる。ケルン大学の設立については、後注9) 参照。ほかに、再建された新大学に関し、Die Universität Köln im ersten Jahrfünft nach ihrer Wiederaufrichtung, 1919 bis 1924, 1925もある。現在の大学も、その起源を1388年としている（講義要綱Vorlesungsverzeichnisの歴史部分）。

ほかに、ナチス期の教員や大学については、Golczewski, Kölner Universitätslehrer und der Nationalsozialismus, personengeschichtliche Ansätze, 1988 (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd. 8). Haupts, Die Universität zu Köln im Übergang vom Nationalsozialismus zur Bundesrepublik, 2007 (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd. 18). ユダヤ人学生について、Lauf, Jüdische Studierende an der Universität zu Köln : 1919-1934, 1991 (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd. 11). 各学部や専門分野の研究のほか、ライン地域のフランス法の法曹養成も扱われている。Mallmann, Französische Juristenausbildung im Rheinland 1794-1814, die Rechtsschule von Koblenz, 1987 (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd. 5). 新大学については、Becker, Die neue Kölner Rechtswissenschaftliche Fakultät von 1919 bis 1950, 2021 (Beiträge zur Rechtsgeschichte des 20. Jahrhunderts) .

ルンの市参事会の主導の下、教皇ウルバヌス6世の設立特許状をえることによって設立された。アルプス以北の神聖ローマ帝国では、4番目の大学であった。1347年のプラハ、1365年のウィーン、1386年のハイデルベルクに次ぐ大学となる。同時期に、エルフルト大学も設立の準備をしていたが、教会大分裂のため、当初、対立教皇からの設立特許状をえたために、ケルン大学に遅れたのである（これにつき、独法118号27頁）。市の主導による大学は、皇帝や諸侯による設立の多いドイツの大学では例外的な存在となっている（エルフルト大学もこれに近い）。そのため、その後も、ケルン大司教・選帝侯との関係は、あまり良好とはいえなかった。

教皇との交渉にあたったのは、神学の学士でドミニコ会の神学教授のAlexander von Kempenと、市法律顧問でSt.Georg聖堂主司祭のHermann Stakelweggeであった。後者は、大学設立後に、法学部教授となり、1392年に学長となる。大学の講義は、1389年に、教授20人の体制で開始された。この時代としては大規模である。最初の学長は、Hartlevus de Markaであり、パリ大学の例にならって、神学教授Gerhard Kikpot von Kalkarとの論争から講義を行った。4分の3の教授がパリ大学から来たことから、その例によったのである。他の教授は、ハイデルベルクでペストが発生し、そこから逃れてきた。当時は、高等教育をうけた人材の乏しい時代であったから、たとえば1365年にルドルフ4世によってウィーン大学が設立されたときには、人材が不足し、1383年に、後継のアルブレヒト3世は、パリ大学から教師を引き抜き、紛争が生じている（1384年に2回目の特許状を発給）。

ただし、法学部でも、パリ、ウィーン、ハイデルベルクの各大学には、当初は初期型の教会法の講義しかなかったが（後注85）参照）、ケルン大学は、最初からローマ法・皇帝法の講義をした。初期の大学が聖堂付属学校から生じた時に、カノン法がなお神学の一部に属していた古い構造を克服したのである（初期の教会法の講義は、基本的に初期の教令集のみを対象とした）。こうした構造改革は、当初、ケルン大学が多数の学生を集めた原因ともなっている。中世といっても、学生は、自分の勉学が世俗の社会で市場価値をもつことを知っていたのである。

最初の入学者は、763人であり、ヨーロッパでも最大規模であり、全ヨーロッパから学生を集めた。国際性が高く、中世のつねとして講義もラテン語で行われた。まだ、アルプス以北に大学が少なかったからである。もっとも、初年度の登録者はどの大学でも多いが、あまり継続せず、初期の入学者数は、まだそう多くはなかった（1390年に79人、1391年に107人など、2桁である）。後発で近隣のエルフルト大学に学生を奪われた感がある（エルフルト大学はほぼ200人台）。入学者数が200人台になるのは、1410年代からである。1470年代には300人台、1480年代には、400人台となった。しかし、宗教改革後には、他の大学と同様に激減した。1520年代には、100人から、しばしば2桁である。200人台を回復するのは、1610年代である（エルフルト大学では回復せず、ほぼ2桁のままであった）。おおむねどの時代でも、ハイデルベルク大学よりも多数の学生を有していた（後注110）のEulenburg, S.285ff.一部は129頁の図3参照）。

大学は、最初から4学部を有した（学芸学部は、7つの自由学芸、すなわち、文法、論理、雄弁術の3科Triviumと算術、天文学、幾何学、音楽の4科Quadriviusを備えていた）。4学部構造は、中世で標準の形態であるが、一部が欠けていたり、専門学部が一学部しかない事例も多い。小規模大学には、ギムナジウムを改編しただけの大学も多かったからである。ギムナジウムとの差別化のために、大学特許状が必要な理由でもある。とくに、法学部、医学部では人材が不足し、設立が遅れることが多かった（ライプツヒ大学でも遅れた）。しかし、完全な構造をもつことは、反面で、重い経済的負担となったのである。

大学は、中世から近代までの約400年間存続したが、1794年に、ケルンがフランス革命軍によって占領されたことから、大学は、1798年に廃止された。同時期には、フランスの多くの大学とともに、ライン地域のマインツ大学なども廃止されたのである。そして、廃止後は、大学の形態をとらない学校となった（Zentralschule）。Zentralschuleの名称は、今日では、スイスの軍事学校に用いられるが（ルツェルン）、当時は、Lyzeumと同様に、速成の教育を目的とした専門学校を指した。

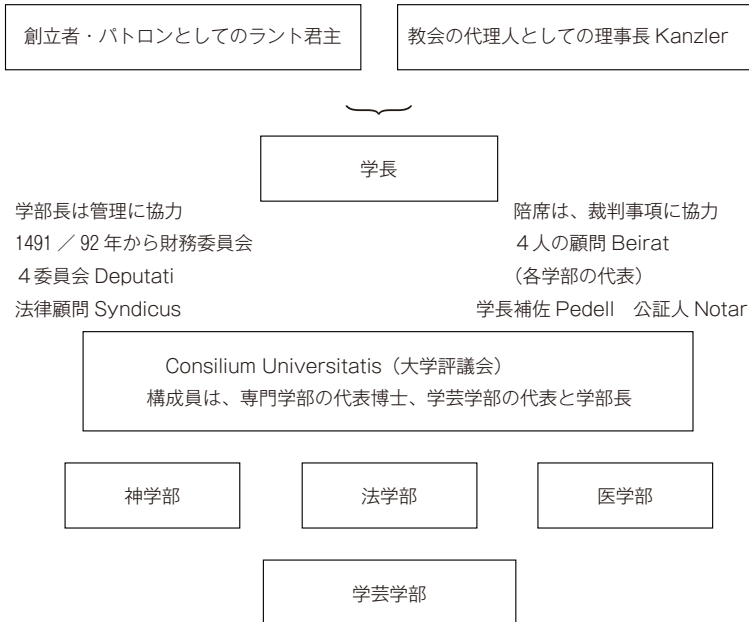
(3) 37頁は、チュービンゲン大学の組織図である⁸⁾。諸侯の設立した多くの大学は、通常このような構成になる。ドイツの大学の多くのモデルでもある。

聖俗の二元的権威の合体であり、わかりやすい例として、出発点となるであろう。初期の大学は、聖俗の権威を基盤とする点で、まさしく中世的な存在であった(宗教改革後は、ラント君主が教会の首長になるから、理事長の権威もラント君主に由来する。プロテスタント系の大学の一元的構成である)。ケルン大学は、市参事会の設立であることから、ラント君主による庇護が弱く、相対的に教会権力が強く残されている点に特徴がある。外部からの干渉を招きやすかったのである。大司教座都市であることから、ローマからの干渉もみられた。当時のケルン大司教の教区は、フランドルをも包含する大きな領域であった(選帝侯としてのドイツ内の支配領域よりも広い)。そして、ケルン大司教は選帝侯をも兼ねていたから、皇帝も強い関心を示し、しばしばその干渉をうけた。

-
- 8) Finke, S.45. Konservatorについて言及するものとして、Bornhak, Geschichte der Preussischen Universitäts- Verwaltung bis 1810, 1900, S.2. Frankfurt (Oder) 大学の場合、皇帝特許状により司教の Lebusが理事長となり、同人は、保護官の資格で大学の最古の規則(1510年)を作成した。

中世の大学は小規模であったから、大学の意思を決める評議員(Senat)は、教師のすべてであった(Frankfurt (Oder), Duisburgなど)。しかし、Königsbergでは、専門学部の大教授と哲学部の4人の最年長教授という制限があった。Bornhak, ib., S.7f. これは、大学の規模による差である。ミュンヘン大学でも、おおむね10人程度である。128頁の図2参照。

チュービンゲン大学の定款における法学部の地位、15世紀



II パトロンとの関係—教会と市

1 教会と理事長

(1) ケルン大学の設立特許状において⁹⁾、教皇ウルバヌス6世は、ケルンの聖

9) ケルン大学（旧大学 Alte Universität）の設立については、【歴史】viii.および前注7）参照。Schieffer, Kölner Wissenschaft 1388 und Jahrhunderte davor, in Speer/Berger, Wissenschaft mit Zukunft, die ‚alte‘ Kölner Universität im Kontext der europäischen Universitätsgeschichte, 2016 (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd. 19). また、600年史は、Meuthen, Kleine Kölner Universitätsgeschichte, 1998. 現在の大学のHPにも記載されている。

堂主司祭（主事, Dompropst）に、勉学と試験にもとづいて、学位（Licentia docendi）を付与する権限を付与している。聖堂主事は、この権限を代理人に委ねることができる。聖堂主事がいない場合または教皇の承認をえていない場合には、聖堂参事会（Domkapitel）が、代理人を任じることができる。聖堂主事や司教に学位の付与権があるとするのは、大学の出自が聖堂付属学校であったことの沿革にもとづくものである。もっとも、聖堂主事がみずからこの権限を行使することはなく、その尚書に委ねることが通常であったことから、聖堂主事が、尚書を選任することになる。大学との関係においては、尚書は、しだいに聖堂から独立性を強め、大学の理事長（Kanzler）となった。さらに委託された教授が副理事長となり業務を行う。これは、今日でも、伝統をひくイギリスの大学で残されている形式である。もっとも、設立特許状は、理事長のような肩書を明示していない。理事長は、聖堂主事から大学特権の保護をうけることになる。ケルン大学では、副理事長から下の職が教授の役割であった（Vize-oder Prokanzler）。初期には、神学部教授の就くことが多かった。

理事長は、しだいに職務の開始時に、学長に対し、職務上の宣誓（Amtseid）をするようになった。この慣行は忘れられることもあったが、1687年に、大学の文書庫で、これに関する報告が発見された。そして、大学との関係において、理事長は、みずから学位授与権を行使することはなく、ケルン大学の例でも、2件あるだけである。1465年に、Salentin von Jsenburgが、大学側の要求で学位を授与したにすぎないとして謝罪を述べている。理事長は、勉学や試験に責任をおう立場にはないからである。そして、この場合でも試験官は選任されたから、無資格者に学位を授与したわけではない。大学の理事長の職務は、聖堂付属学校とは異なり、勉学と乖離したのである（事務職であり、教師ではない）。もっとも、学位授与式には、聖堂主事や理事長も出席するのがつねであっ

また、Kölner Universitätsgeschichteのシリーズにも、以下がある。比較的新しいシリーズである。Pabst, Das 19. und 20. Jahrhundert, 1988 (Kölner Universitätsgeschichte; Bd.2); Meuthen, Die alte Universität, 1988 (Kölner Universitätsgeschichte; Bd.1); Meuthen, Die neue Universität: Daten und Fakten, 1988 (Kölner Universitätsgeschichte; Bd. 3) などである。

た¹⁰⁾。場合によっては、司教やラント君主も出席した。当時としては、その権威を誇示する絶好の機会だったからである。

(2) 大学やその構成員は、教会法上の法的な保護をうけており、そのための特権を有した。この権利の擁護のために、高位聖職者が保護官 (Konservator) に任命された。訴訟の時には、保護官は、教会の裁判官として関与し、教会の刑罰権を行使することができた。破門や聖務禁止を命じることもできたのである。個人を破門するだけではなく、Renen やデュッセルドルフのような都市が破門されたこともある。ケルン大学でも、教皇から 3 人の保護官の任命をうけたことがある。しかし、この初期の方式も、大学の数が増えるに従い減少し、大学が事件ごとに保護官を求める必要はなくなり、たんに行政や司法において、教会法上の救済を求めるだけとなった¹¹⁾。

(3) 初期には、保護官だけではなく、勉学のための教皇の恩寵と特権として、特別な勅書である Rotulus を求めることもあった。もっとも古い Rotulus は、パリ大学で学芸学部が求めたものにみられる。ハイデルベルク大学にもあり、選帝侯 (ファルツ) により支持をうけた。ケルンでも、大学から申請されたことがあるが、取得には多大の費用を要した。しかし、教皇権の衰退とともに、しだいに(2)や(3)による救済は、実効性を失うことになった。

Rotulus は、3 部からなる。第1 は、大学の特権についての大勅書である (caput rotuli)。第2 は、恩寵勅書 (rotulus regentium) で、第3 が本来の Rotulus である。個別の請願と希望に対するものである¹²⁾。この(2)や(3)の制度は、初期の

10) Keussen, S.1ff. (Kanzler und Vizekanzler) 聖堂主事や理事長は、いつもは代行させている自分の職務として儀式に出席するのであり、たんなる来賓ではないということである。議員や市長などが政治目的で出席するのとは異なる。

11) Keussen, S.7ff. (Konservator). 後注12) をも参照。

12) 他の大学では、Rotulus のようなものは登場しない。多くの大学では、設立後に干渉することはまれである。設立特許状は、帝国自由都市と同じく、他の封建的勢力からの自由を保障するだけで、付与者の権力と保護を前提とするものではない（実効性の担保となる実力がいないからである）。現代の国内の制度とは異なる。自律の文書ともいえる。中世的自治の形態を表現している。

大学としての特徴である。後代に設立された大学の歴史では、ほとんど登場することはない。

2 他の大学との比較

中世の大学の理事長の地位や名称、その変遷については、ロシュトック大学(1419年設立)の例が参考となる。以下は、現在までの変遷である。学長との関係についても若干ふれる¹³⁾。ロシュトック大学や近隣のグライフスヴァルト大学も、比較的市参事会の力が強い大学であった。

(1)(a) 理事長(Kanzler)の職や名称には、何百年もの間、機能や意義に変動があったことから、一言では説明しえない制度となっている。理事長の職は、大学の教員と学生の共同体の外にあって、彼らのために監督をするものである。中世の大学の理事長は、多くは、大学のある地の教会の高位の職にある者が、教皇の大学上の権威を代行し、学位の授与を監視し、教会の影響力の範囲で、大学の講義能力の有効性を保障したのである。

1419年のロシュトック大学への教皇の大学特許状は、シュヴェリンの司教を

13) Catalogus Cancellariorum Academiae Rostochiensis これは、詳細なカタログであり、教授のほか、学長や理事長なども対象とし、ロシュトック大学のHP (<http://cpr.uni-rostock.de/site/kanzler>)にある。また、グライフスヴァルト大学の理事長については、【歴史】312頁参照(Amtes Eldena)。

ケルン大学の副理事長については、Keussen, S.381f. 第14代のAdam de Bopardiaまでは、神学部出身であった。15代のHenr.Andree de Sittartが初めて医学部から副理事長の職についた。法学博士は、17代のGodesr.Gropper (1535.38)が最初である。もっとも、Petr.de Clapisは、1532年に、16代のJud.de.Erpachの代理をしている。16代のあとは、法律出身者が増加している。18代、19代、21代、22代、23代、25代、26代などである。ほぼ神学部と同じ頻度である。30代以降は、ほぼ法律出身者で占められており、例外は、37代の学芸学部、40代の神学部のみで、最後の48代Phil.de Passeraが医学部の出身である(43代は不明)。医学部は、上記のAndreeと2人だけである。ここにも、ケルン大学の法律への傾斜がみられる。学長は任期も短く、頻繁に交代するので、理事長に大学の重点がみられる。しかも、ケルンでは、学長に独身要件があった。

理事長とし、ロシュトックの主任助祭（Archidiakon）をその代行者と定めた¹⁴⁾。そこで、勉学をして学士や博士の学位をえようとする学生は、理事長にその能力を提示し、理事長から教授資格や学位をえたのである。同大学の1531年の宗教改革とウェストファリア条約の1648年後には、シュヴェリンの司教区（Bistum）がその資格をえて、ロシュトック大学の理事長職はメクレンブルクの大公家に属した。メクレンブルク大公は、1918年のドイツ革命まで理事長の権原を行使した。もっとも、多くの場合には代理がたてられるか、まったく意義を失った。ロシュトックの学位については、大公の許可権は、理事長としての権能に組み入れられ、手数料が収められた。そこで、許可の事実上の付与は、長らく形式にすぎなかった。学位授与式も、教授に選任された副理事長によった。多くの場合に、それは、学部長に委ねられた。

(b) 多くの大学では、司教の代理が、尚書、ついで理事長として大学に関与しただけではなく、ラント君主が最高学長（Rector Magnificentissimus）として、大学のトップの地位を取得した。とりわけ、宗教改革をした小邦のラント君主は、それを名誉とした。その場合には、実質的な学長は、副学長となった。この場合に、教授が選任するのは、副学長だけである。ロシュトック大学でも、1748年以降、メクレンブルク大公の Friedrich（Herzog zu Mecklenburg-Schwerin, 1717.11.9-1785.4.24）が最高学長となり、教授から選任された Franz Alert は副学長となった。ドイツの学長は、教授から選任される場合には、1年または半年が任期であったから、その場合には、副学長も1年または半年ごとに交代した。最高学長は、君主の名誉職であるから、終身の場合も、親族や側近に交代することもあった。メクレンブルクの Friedrich は、1755年まで最高学長であった。その後は、大公家では学長を出さなかったので、1756年からは、哲学部の Johann Christian が学長となった。この時期の学長は、半年任期である。1年任期になったのは、1789年の Johann Kaspar Velthusen（神学部）からである。

ロシュトック大学では、ラント君主による最高学長の時期は少なく、1470年、

14) ロシュトック大学の設立と歴史については、【変容】444頁参照。

1473年の Balthasar (Herzog von Mecklenburg, 1451-1507)、1499 年、1502年の Erich II (Herzog zu Mecklenburg, 1483-1508)、1509年の Grafen von Eberstein-Naugard、1575年の Wilhelm August (Braunschweig-Lüneburg-Harburg, 1564-1642)、1591/92 年の Wilhelm Kettler (Herzog von Kurland, 1574-1640)、1594年の August der Ältere (Herzog von Braunschweig-Lüneburg, 1568-1636)、1602年の Ulrich (Herzog von Pommern, 1589-1622) など、わずかであり、それぞれの在任期間も、1, 2年にすぎない。そして、最高学長は名目的であった。

長く最高学長をしたのは、上記の Friedrichのみであるが、トリアー大学などでは、かなり長期間、ラント君主の側近と思われる貴族や聖職者が勤めている。修道院長や聖堂主事が勤める場合には、必ずしも名目的な最高学長ではなく、実質的にも仕事をしたと思われるから副学長は存在しない。この場合には、①君主による名目的な最高学長でも、②教授から選任された学長 (Rector Magnifici) でもなく、③中間的な制度となっている。教授から選任された学長は、1年または半年任期であるが、例外的に長い場合があり、その場合には、③の場合と類似してくる。詳細は、大学の慣行によって異なる¹⁵⁾。

15) 最高学長 (Rector magnificentissimus) の制度については、【歴史】309 頁、独法118号83頁参照。

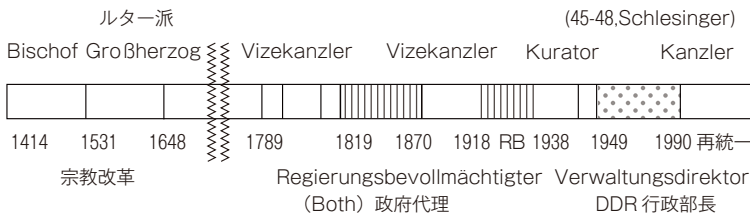
エルランゲン大学でみると、中世の大学らしく、ラント君主が名目上の学長となる。そこで、エルランゲン大学の実質的学長は、副学長である。副理事長 (Prokanzler) は、つねに法学部のメンバーであった。副学長は1804年まで半年、それ以後も、1 年任期なのに対し、副理事長は2 年である。ただし、1 年の場合や4 年の場合もあった。しかし、1934年にナチスにより廃止され、副理事長職が復興したのは、戦後の1951/52 年である。1743年から1804年の間は、副理事長は学期ごとに選任された (11月4 日からと5 月4 日から)。1804年から1920年は、任期2 学期である。いずれの場合も通常は2 年在任した (1827 年までは、5 月4 日開始で、その後は11月4 日開始)。

イエナ大学の祝賀記念誌Schwarz, Das erste Jahrzehnd der Universität Jena, Denkschrift zu ihrer dritten Säkular-Feier, 1858では、Sachsen-Weimar-Eisenachの大公 Carl Alexanderが最高学長 (Rector Magnificentissimus) として献呈をうけている。これも、ラント君主が学長である例である。小国の首長ほど、こうした肩書

(2) 学長だけでなく、理事長の職も複雑であり、近代でも、理事長職の変遷がある。

(a) 伝統的な理事長職は大学に固有なものであり、国家によって大学の監督や配慮を委託された受託者の権能とは区別される。後者は、18世紀以降、多くの大学では、Kurator として成立したものである¹⁶⁾。ロシュトックでは、メクレンブルクの大公は、1789年に初めて、副理事長（Vice-Kanzler）と Curator を任命した。Adolph Friedrich Locceniusは、1789年から93年の間、司法局の部長で、副理事長とKurator であった。しかし、その4年後の死亡時から、その職は、20年間も補充されることがなかった。

ロシュトック大学の理事長の名称の変化



1813年になってようやく、教授の Oluf Gerhard Tychsen¹⁷⁾ が副理事長

を重任したのである。

第一次世界大戦後、連邦＝ライヒだけでなく、ランツのレベルでも君主制が崩壊し、学長（Rector magnificus）がトップとなった。正教授が評議員（Senat）を選任し、それが学長を選任する体制となった。任期は、ナチスの時期を除いて、夏冬の2学期である（11月4日開始）。Wittern, Die Professoren und Dozenten der Friedrich-Alexander-Universität Erlangen 1743-1960, Teil 1: Theologische Fakultät Juristische Fakultät, 1993, S.183ff.

- 16) 理事長を Kuratorと表示する大学は、ゲッチンゲン大学である。Ebel, Catalogus professorum Göttingensium 1734-1962, 1962, S.21f. Kanzlerとの相違は、大学により（つまり沿革であり）、大きな意味での相違は乏しい。
- 17) Oluf Gerhard Tychsen (ca.1780-?) には、以下の著作がある。Die Erbfolge eines Ehemannes 1804; Gutachten nach jüdischen Gesetzen über die Frage - kann ein vor einem christlichen Gerichte von einem jüdischen Ehepaaren nach christlichen

(Vizekanzler)に任命されたが、その称号は、彼の在職50年の人的な栄誉の1つにすぎず、具体的な職に直結するものではなかった。

(b) 近代的な理事長が現れるのは、19世紀である。1815年のドイツ連邦(ウィーン体制下)の主要諸国による1819年のカールスバード決議(Karlsbader Beschlüsse)は、メッテルニヒによって主導され、自由主義的な運動であるブルシェンシャフト(Burschenschaft)を抑圧しようとするものであったから、連邦構成の諸国家に対し、大学への政治的な監督を義務づけた。そこで、各大学は、目的に適合した指導の能力をもつ、大学の土地にいるラント君主の代理人、たとえば、従来の理事長(Curator)か、政府がそれにつき適するとした者を任命したのである。ロシュトックでは、1820年に、司法局の副部長 Carl Friedrich von Both (1789.2.11-1875.5.4) が政府の代理人(Regierungsbevollmächtigter)の職を引き受けた。こうして、彼は、半世紀以上も、ロシュトック大学に決定的に影響を与えたのである。

このBothは、ポンメルンのDemminで生まれ、父は農場領地の所有者であった。1807年から、ゴータ、ハイデルベルク、ロシュトックの各大学で法律学を学び、1810年に、Schwerinの裁判官となった。1818年に、ロシュトックの裁判官、1820年に高裁裁判官。ロシュトック大学の政府代理人となった。1836年に副理事長(Vizekanzler)、理事長(Kurator)となった。1851年に、裁判官職を辞した(DBE 2 (1995), 46; Mejer, Both, Karl Friedrich von, ADB 3 (1876), S. 195f.)。Mecklenburg-Schwerinsche Verordnungen, 1802の編者である。1875年に、ロシュトックで亡くなった。

ロシュトック大学の政府代理人となった後、しだいに、Bothは、その影響力を大学に及ぼした。たとえば、1827年の、大学と都市、ラント君主との関係の新規定や、新定款の作成である。さらに、大学の財政委員会の委員長として、彼は、大学の行政上決定的な地位を占めた。1836年に、Bothは、副理事長の肩書をも取得し(上述)、新たな指導権をえて影響力を増した。法の委任にも

Gesetzen errichtetes wechselseitiges Testament vorherige bündigst stipulierte Erbfolge vernichten? 1806. 人物の詳細は不明である。

とづく擬制説的な地位に加えて、団体の機関としての伝統的な地位を獲得したといえる。副理事長は、大公の代理人として、学長と並び、事実上アカデミックな地位をも有した。しかし、それは、ラント君主と大学の間の固有の中間官庁（Zwischenbehörde）としてではなく、合意や仲介の職（Vereinigungs- und Vermittlungspunkt）であった。経済的領域とアカデミックな領域の監督を広く可能とする権能によって、Bothは、大学の重要な地位を占めた。しかし、学長との関係で、副理事長の具体的な法的な地位には、なお疑義もあった。

Bothの後も、ロシュトックの司法局の部長やラント裁判所長が、大学の副理事長職を兼職した。さらに、1837年に、Bothによる指導に関する変更もある。副理事長は、大学財政やアカデミックな機能を管理することによって、大学とラントの省の文書交換をも発展させた。この時代は、理事長が国家の機関から、しだいに大学の執行部の機関へと位置づけられた時代といえる。

(c) これに対し、理事長の名称は、また国家を中心に改められた。1918年に、ロシュトック大学の政府代理人の職の名称が変更された（Regierungsbevollmächtigter）。これは、ワイマール共和国の成立による名称の変更であり、大学の財政のための行政官庁としての国家委員であった。そこで、過渡期の Buchakaは、1902年から1918年は、Vizekanzler であるが、1918年から1929年は、Regierungsbevollmächtigterである。

しかし、名称は、その後も変転した。1934年と45年の間に、メクレンブルクの省の管轄の部門から、政府代理人が派遣され（Regierungsbevollmächtigter）、同部門は、1938年からは、Kurator の職をも引き受けたのである。ナチスの時代の政治指導の一環であった。

戦後の時期（1945-48）、Erich Schlesinger（1880.12.23-1956.12.17）は、ロシュトック大学下の理事長 Kuratorとして働いた（行政法教授、政府顧問官 Ministerialdirektorでもある。GND: 11860810X , Catalogus Professorum Rostochiensium）。しかし、これは、戦後の混乱期に限定され、1949年に、大学の Kuratorは、DDR（東ドイツ）により廃止された。学長が、最高権能をもち、その下に管理部長や計画と財政の部長がおかれ、大学の管理を指導するのである（名称としては、行政部長 Verwaltungsdirektor）。またもや国家の機関と

しての性格が強調されたのである。1949年のNeumannからは、Verwaltungsdirektorである。

1990年の再統一以降、ロシュトック大学の定款とラントの大学法では、ロシュトック大学の理事長(Kanzler)の地位が復活し、管理行政の指導者、大学管理職のメンバーで会計の代行者とされた。そこで、過渡期のBorchmannは、1985年から1990年の間は、Verwaltungsdirektorであるが、統一時の1990年から1991年は、伝統的なKanzlerである。伝統的な名称は、たびたび変更されており、しかも、伝統的名称にもKuratorとKanzlerの2種類があるという複雑な変遷をたどっている。学長が、Rektorのみであるのに対し、複雑であるのは、理事長の職が、大学の一員であることと、行政の一部門でもあるとの二重の性質を有し、そのいずれの性格が強調されたかの相違を反映するものである。しかも、それは、時代と地域により異なることから、多様性がもたらされたのである¹⁸⁾。

大学病院は、特別に包括的な範囲で、管理権を有することが必要になることから、固有の官吏や部局がおかれ、1964年以前は、医学部の管理は、大学の管理と区分されてきた。病院の管理は、その後も、固有の院長の下で独立した機関とされている。

18) Vgl. Geschichte der Universität Rostock 1419-1969. Festschrift zur Fünfhundertfünfzig-Jahr-Feier. Berlin 1969. これは、550周年記念論文である。ロシュトック大学関係の文献は多いが、詳細は、ロシュトックの判決団に関する別稿による。

A. Hofmeister, Zur Geschichte der Landesuniversität, 2. Das Kanzleramt und die Doktorpromotionen, in Beiträge zur Geschichte der Stadt Rostock 4 (1906), S.78ff.; L. Boehm, Cancellarius Universitatis. Die Universität zwischen Korporation und Staatsanstalt, in Chronik der Ludwig-Maximilians-Universität München 1964/1965, S.186ff.; B. Wandt: Kanzler, Vizekanzler und Regierungsbevollmächtigte der Universität Rostock 1419-1870, 1969. 最後の文献は、Diss. Rostockであり、前注13)冒頭の記事の基になったものである。

3 大学の財政的基礎1 ー聖職禄

(1) 教授が組織の歯車の1つにすぎない現代の大学とは異なり、中世の大学は、ほとんど講座の集合体にすぎなかったから、必要なものは、人材につきる。独立した建物が保持されることもあったが、独立である必要はなく、借家でもよく、学生が少なければ教授の家でもたりた。教材を配布するわけでもないから、事務は単純である。おおむね財政・財産と学籍簿の管理だけである。財政支出の最大のものは、教授の給与であった。授業料は、収入の1つにすぎず、大学が不動産を有する場合には、封建的公租が入ったし、大学禄を有すれば、人件費を節約することもできた。しかし、これだけでは不十分なことが多く、その場合には、設置者の負担となった。諸侯や都市が補ったのである。ロシュトック大学では、大学の教授職には、市負担の場合とラント首長の負担の場合とがあった。

大学が聖職禄をもつことは、特許状を発した教皇から期待することができた。教皇から特許状をえる利点でもあった。皇帝から特許状をえる場合には、その政治的な援助を期待することもできた。ときに複数の特許状をえたのは、そのためでもある（前注4）のDenifle参照）。しかし、大学の数が増加すると、しだいにこれらの援助は困難となった。それでも、比較的早いケルン大学では、聖職禄を取得している。そのほかは、市の負担となった。諸侯が設立する場合には、その負担であるが、諸侯の収入が都市に依存する場合には、間接的に都市の負担になるのである。

市は、当初9人、のちに12人の教授の給与を財政的に負担した。4神学、3教会法、2ローマ法、3医学である。その他の教授の給与は、固有財産や聖職禄によった。法学部では、初年度から7人の教授が皇帝法を教えた。そのうち、2人は両法を教え、総計4人が教会法を教えた（市の教授職が5人で、追加の教授職が7人程度いた。そこで、ローマ法総計7人とすると、追加の教会法は2人となる。ローマ法は8人の可能性もある）。他大学と比べ大規模である。ヨーロッパ最大規模といってもよい（兼任の可能性もある）。ケルンの10の財団教会とケルン大聖堂が、追加の教授職のために聖堂参事会員職を保持した。1437年に

もその増加があった。以下(2)は、その取得の経緯である。

法学の講座の配置と追加

	市負担		追加		総数
ローマ法	2	+	5 or 6	=	7 or 8
教会法	3	+	2 or 1	=	5 or 4

古く8世紀の教会会議は、大聖堂や修道院に訪ねてくる者に無料の教育を与えるべき義務を課した。しかし、混乱の時期であり、これに対応する施設や機関があったわけではないから、3世紀以上も教育の問題は無視され、1179年の第3回ラテラノ公会議が、すべての大聖堂教会は無償で、教会の聖職者や貧しい学生に教える教師のために職禄を設けるように勧告した。聖職禄による教育の起源は、この時代にさかのぼるものである¹⁹⁾。ヨーロッパの大学の無償性の

19) サザーン・中世の形成(1978年、森岡敬一郎・池上忠弘訳)154頁。原著は、Southern, The Meaning of the Middle Ages, 1953. 古い時代の授業料は明確ではない。ウィーン大学の創設期の講義料について、科目により3から12グロッシェンの差があった(学芸学部)。詳細は、プロイセンの大学に関する別稿による。これに対し、戦後は、大学授業料は無償化された。1990年代からは、登録料が徴収されている。【大学】180頁以下。Aschbach, Geschichte der Wiener Universität im ersten Jahrhunderte ihres Bestehens : Festschrift zu ihrer Fünfhundertjährigen Gründungsfeier von Joseph Aschbach, 1865, S.195f. 入学科について所得による区別があるように(Ⅲ 1(4)参照)、区別があったのではないと思われる。学芸学部で得業士になろうとする者は、最低2年間、最低3人の学者からラテン語文法、修辞学、数学、アリストテレスの弁証法と自然哲学の講義を聴き、公開の討論に数回参加しなければならない。こうした時間の定めは、15世紀に形成された。Ib., S.96.

比較までに、19世紀初頭の大学の授業料は、入学科が20マルク、1学期の費用が約100から120マルクである。詳細はより複雑で、週1コマの講義が1学期で4から5マルクとなるので、その合計である。試験料は高く、60マルク。これに健康保険が3.5マルク、事故保険が1マルクである。実習(Praktika)があれば、25マルクが加算される。外国人は、ほぼ倍額となる(遠隔地のケーニヒスベルクは安く、入学科が10マルク、1学期の費用が70マルクである)。Asmuth, Die Studentenschaft der Handelshochschule Köln 1901 bis 1919, 1985 (Studien zur Geschichte der Universität Köln, Bd.1), S.149, S.164, Anhang, Tabell 55 (Vergleichende Übersicht der

起源の1つともなっている。実際には、中世の大学は無償ではなかったが、奨学金の充実などの努力はみられる。それに対応して、死後の魂の救済のために、教会に財産を遺贈することはつねに信者に求められたから、ある程度の実効性はあったのである。そして、大学も救済可能な遺贈先の1つだったのである。

(2) ケルン大学には、おおむね3つの聖職禄があった。これによって、人件費を節約できたのである²⁰⁾。

(a) 第1の聖職禄(Pfründe der ersten Gnade) この重要な特権の獲得は、Johann vom Neuenstein 教授の努力によるものである。ローマへのケルン市からの使節は、教皇ボニファチウス9世から1394年の大勅書をうけた（設立

Studiengebühren der Handelshochschulen im Deutschen Reich)。

同書は、ケルン大学設立の基礎の1つとなった商科大学の研究である。学生数が少なかったことから、近代より前の大学は、授業料で大学の経費を全部まかなうことは考えていなかったのである。授業料で全部まかなうと高くなりすぎるからであり、無償という趣旨ではない。初等・中等教育との相違であり、これは、19世紀まで続いた。詳細は、プロイセンの大学に関する別稿による。これに対し、戦後は、大学授業料は無償化された。1990年代からは、登録料が徴収されている。【大学】180頁以下。

Lexis, Die Deutschen Universitäten, 1893, Bd.1, S.162によれば、授業料は、大学や個人の属性により異なるが、平均的な額として、ゲッティンゲン大学の例によると、以下ようになる。学部による相違が大きい。学期は、卒業までにかかる平均期間である。施設料(Institutsgebühren)にも、差が生じるのである。法学部で、1学期69マルク、医学部で、145マルク、化学で114マルクとなる。理工系は高い。専門大学との相違は、時代的なずれによるものであろう。

神学部	7.2学期で、432マルク
法学部	6.75学期で、466マルク
医学部	10.2学期で、1479マルク
哲学部	10学期で、580マルク
数学と自然科学	9.5学期で、627マルク
化学	9.5学期で、1083マルク

20) Keussen, S.21ff. (第1の聖職禄)

は、1388年で、ウルバヌス 6世。シスマの時の正当教皇)。そこで、ケルンの10の財団教会(Stiftskirche)のうち、大学は、1名の参事会員職を留保し、それに講義義務が結合された。聖職禄に大学の講義が結合したものは、大学禄といわれる(私的財産を原資とする大学禄もある)。そして、教授の任命は、大学の代表としての学長と都市参事会の代理の教授によって行われた。これは、大学特権に関する3人の保護官によっても確認された。選任される教授は、大学で講義をすること、市に反する法鑑定をしないこと、1か月以上、市から離れないことなどを宣誓した。

教皇の特許状をえることは、聖職禄の獲得に有利であり、教会からの財政的援助を期待することもできた。検閲を避けるために中世の著作がしばしば権力者に献呈されたのと同様に、名目だけではなく、実利的な側面も有したのである。聖界諸侯は、多数の聖職禄を有するから、聖界諸侯の大学では、聖職禄をもつ教授も多数になるのである。トリアー大学は、大司教・選帝侯の設立によることから、多くの聖職禄を有している(20ほどにもなる)²¹⁾。ケルン大学は、司教・選帝侯の設立ではないから、その恩恵は、あまり期待はできなかった。聖職禄は利権でもあったから、その任命権の個別の持ち分は、慣習的に決まっていたのである。

(b) 第2の聖職禄(Pfründe der zweiten Gnade) 大学禄の存在は、ケルンの都市参事会にとって、相当の財政負担の軽減を意味した。1430年代に、教

21) トリアー大学の聖職禄については、独法106号24頁参照。ケルン大学よりも小規模であるのにもかかわらず、聖職禄は、20も存在した。トリアー大学の教授の給与について、1600年代であるが、112から325フローリンという数字がみられる。

また、ケルンにおける書籍の検閲については、ベックマン(1739-1811)・西洋事物起源(1、特許庁内技術史研究会訳、1999年)107頁以下では、「図書の検閲」が主題となっている(111頁)。原題は、Beckmann, Beiträge zur Geschichte der Erfindungen, 1780-1805. ケルンの1479年の例がある(当時は選帝侯領。19世紀には、プロイセン領である)。ドイツの図書検閲官の最古のものとされる。オーストリア、バイエルン、プロイセンでは検閲が厳しかったが、禁制本は、検閲の緩いスイス、ハンプルク、ライプツヒヒなどで印刷され、ドイツの主要都市のほとんどの本屋で購入できたのである。

皇オイゲニウス（Eugenius）4世は、バーゼル公会議と対立関係となった。大学と都市参事会は、この機会をとらえて、再度の聖職禄を獲得したのである。教皇や皇帝にとって、有力な大学の鑑定や支持は、紛争の解決策のみならず、その地位の正当化にとっても有利だからである²²⁾。

（c）第3の聖職禄（Pfründe der dritten Gnade） 1559年にも、教皇パウルス4世は、つぎの3年間、空席となる聖職禄を期限つきで付与した。こうした貸借は、今日、大学内で行われる講座の貸借を彷彿させる。しかし、教皇がじきに死亡したことから、1560年に、ピウス4世が確認した。確認は期限つきだったために、参事会はこれを無期限とすることを望んだ。その後も、5年ごとに、期限の延長が認められ、7年の延長が認められたこともあるが、教皇との交渉は続いた。

期限付きの聖職禄の更新のためには、費用がかかり、1664年には、110 クローネが支払われた。当時の1 クローネは、3 ½グルデンであった。ローマの後援者にも40クローネを支払った。しかし、結局、無期限の獲得は、大学の終焉までできなかったようである²³⁾。中世の聖職者身分の取得や更新には、手数料（いわゆる袈裟料）がかかったから、司教職などでも、取得時は当然に、更新時でもときに年取の数年分に及ぶ手数料が必要となったのである（官職でも必要な

22) Keussen, S.31ff. (第2の聖職禄) 第1の聖職禄の時にも、シスマは、大学に有利に働いたが、逆に、エルフルト大学は、対立教皇の特許状をうけたことから、不利となり、再度の特許状をとることとなった。前述 I 3 (2)、独法118号28頁。後注36)をも参照。

23) Keussen, S.35ff. (第3の聖職禄)

ヴィッテンベルク大学の教授であったルター（Martin Luther, 1483-1546）は、宗教改革前は、アウグスチノ派の修道士であり、自分の聖職禄がおもな収入源であったが、宗教改革後は、大学からの給与を収入とした。宗教改革前の大学は、聖職禄をもつ聖職者に講義をもたせれば、給与を軽減できた。聖堂付属学校の形式である。今日だと、兼任や、年金をうける教授を雇うと、給与を軽減できるのと同様である（たとえば、64歳から給与半減など）。これに対し、大学禄は、大学自体が聖職禄の保持者であり、教授を任命することができる。人が禄をもって講義をしに来るのではなく、講座そのものに禄が付属しているのである。もっとも、宗教改革によって、多くの修道院は解散するか、その財産をラントの国庫に接収された。

場合があり、売官の契機となった)。手数料や売官は、教皇や教皇庁の重要な財源となった。そして、教会や修道院財産と同様に、宗教改革後は、多くは世俗化され、ラントの所有となった。

(3) このように、ケルン大学には、3つの聖職禄があった。聖界諸侯の設立した大学では、より多くの聖職禄が大学に付属することもあったから、この数は多いというわけではない。それというのも、ケルン大学は、ケルン大司教・選帝侯の設立によるものではなく、ハンザ都市ケルン市参事会の設立した大学だからである。ケルン大司教は、市との間に種々の問題をかかえていたから、ケルン大学の支持に必ずしも積極的ではなかった。18世紀には、ボンやミュンスターの大学の設立に熱心であった。聖職禄は、教皇や聖堂参事会との関係で取得したものである。

(a) 第1の聖職禄をうけた者の名は、今日までに判明している。一般に、こうした古い名を明らかにすることはむずかしいが、最初の100年については、都市書記による記録や公証人の取引記録などから知ることができる。それより後には、大学と大聖堂の書類から知ることができる。400年間の保持者31人とその略歴が判明しているが、若干ふれるにとどめる。最初の保持者は、神学部のJohannes de Wasiaであった。そして、1395年に、Joh.Vogel de Berkaが、その後継者となった²⁴⁾。

(b) 第2の聖職禄の最初の保持者は、1456年のLaurenz Bunimch von Kroningenである。学芸学部で、3回学部長となった。1442年に学士となり、1442/3年に、学長となった。1470年のその死亡後、Ulrich Kridwis von Eßlingenが後継となった。同人は、同年、神学博士、教会裁判所の書記(Siegler)でもあった。2回学長となり、1501年に死亡。第7代は、1596年のJakob Hutter aus Kempenである。17世紀では、Heinrich Mehringしか判明していない。18世紀でも、神学博士のAdam Hausmann aus Osterath, Joh.Thomas Ouentelしか判明していない²⁵⁾。

24) Keussen, S.39ff. 煩雑になるので、これ以降の聖職禄の承継者については省略する。

25) Keussen, S.51f.

(c) 第3の聖職禄の保持者は、1564年の Gottfried Redanus von Arnheim である。神学の学士、1558年に、神学博士となり、1558/61年に、神学部長、1559/60年に、学長となった。聖職禄をえるまでに、すでに Aposteln の聖堂参事会員となっていた。1561年には、教皇の検閲官となった（前注21）参照）。1572年に死亡。第3の講座の任命は、イエズス会の影響が強まると、その専権事項となり、イエズス会でない者は、イエズス会の廃止（1773年、クレメンス14世により禁止）後の、1785年のドミニコ会士の教授 Addam Conzen のみであった²⁶⁾。

(4) 大学の財産となるものに、奨学金を伴う財団（Meß=Stiftung Gleger）がある。これはおもに支援者の寄付によるものである。類似のものは、今日でも、欧米の大学にみられる。とくにアメリカの著名大学に多額の大学財産のあることが知られている。その起原は古い。ケルン大学では、1494年に、HildburghausenのJakob と Katharina Gleger 夫婦の設定した基金から、学芸学部は、奨学金を設けた。この財団の利息から、Hildburghausen出身の司祭は、勉学のさいに3年間給付をうけ、その代わりに大聖堂で週末のミサを執り行うものとされた。司祭や修道士の学生がいたからである。財団は改組され、1523年に、奨学金の権利は、カトリックでなければ保持できないものとされた。制限の趣旨は、1517年に開始した宗教改革に対抗するものである²⁷⁾。

26) Keussen, S.53ff. イエズス会は、学校教育に力を入れたことから、大学にもその影響の下に入るものが多数生じた。とりわけ、神学部と学芸学部に広がった。プロテスタントとの境界の地域にも、意図的に保護のシールドを置こうとした。Rüegg, II, S.75f.

イエズス会の大学と学部の一覧図は、Rüegg, II, S.96にある。おおまかにいえば、学部は、フランス全土とドイツ西部に多く、大学全体をイエズス会の支配下におくのは、ドイツとオーストリア帝国の全域である。プロテスタントとの抗争のためであるから、意外に、スペインやイタリアには多くはない（人員の供給源ではある）。逆の意味で、イギリスでも皆無である。後注37）も参照。

27) Keussen, S.55f. ドイツの大学にも、かつて多数の信託財産や財団があったが、第一次世界大戦後のハイパーインフレの結果、金銭を原資とする場合には多くの財産を失った。そのことから、戦後は、国庫や州による直接の出資が必要となった。

4 大学の財政的基礎2 一市負担の教授職

(1) 教授職には、臨時管理者の扱う市事務局 (Städtische Kuratorium der Provisoren) が負担するものがある。

大学を団体的に構成することによって、大学の維持と自由が確保された。教育と経済の活動が団体の内部で完結するからである。大学の起源たる聖堂付属学校との相違である。パリ大学が先例であり、ケルン大学は、そのモデルによって大学特権をうけた。しかし、財政的な維持が困難な場合には、大学の外的関係のルールが必要となる。大学の開設に際して、市との特別な関係が必要となった (Ausschutz調整委員会のようなもの)。臨時管理者の職であり、これによって市と大学の財政を区分するのである。市の第1位の公証人は、(大学に関する) 臨時管理者の帳簿をつける。臨時管理者は、初めから無給の名誉職であった。初期には、市長や経理課長・助役が選ばれており、それは、17世紀には、規則によることとなった。教授陣のトップには、学長も臨時管理者として位置づけられるが、臨時管理者の権能は、大学では具体的には定まっていなかった。「勉強に答え、仕事を割当て、権利の実現を助けること」である。

1559年に、大学に3つの聖職禄が与えられたから、臨時管理者は、学長や4人の学部長とともに、任命権を有する。これらの権能のほかは、臨時管理者の任務は、明確ではない。おもなものは、大学への配慮や仲裁といったものにすぎない。

学生に対する訴えは、理事会または4人の臨時管理者にしなければならない。これは、市と大学の1507年の契約で定められた²⁸⁾。

(2) 市負担の教授職 (Städtische Professuren) (a) 中世の大学は、つねに教授の人件費の捻出に苦心している。前述のように、大学の経費の大半は人件費だったからである。諸侯の設立の場合であると、設立にあたり、ラントの等

28) Ib., S.95ff. ケルン大学の最初の臨時管理者は、Everhardt vom Huntiginであり、市の役人の出身であった。歴代の臨時管理者については、ib., S.382ff. ただし、1699年のNic.v.Krufftにまである。チュービンゲン大学には、Provisorのような役職はない。Finke., aa.O.

族の負担につき協力をえておくこともある（もっとも、あまり役に立たないことが多い）。宗教改革後は、収用した教会や修道院の財産が用いられる例もある（マールブルク大学）。それでも足りずに、諸侯の政府が負担したことが多いが（マールブルク大学でも十分ではなかった。ライプチヒではザクセン政府の負担が大きい。ロシュトック大学でも、メクレンブルク公と市参事会の紛争がある）、ケルン大学の教授の件費は、当初から大半が市の負担であった²⁹⁾。もっとも、大学独自の財産や収入から、追加的な教授を雇うことも可能である。比較的古い大学は、多くの自己財産をもつことが多いが、自己比率はしだいに低下し、とりわけ19世紀以降、ラントのような公的（国庫）負担の割合が増加した。ケルン大学は、早くから公的負担の割合が高かったのである。

(b) 1407/09 年に、市が支払った教授の給料に関する一覧があり、それによると、市が聖職禄の存在の分だけ負担を免れていたことがわかる。この年、教授たちに、385 グルデンを支払った。しかし、そのうちの3 人は、同時に大学禄を有したから、市の参事会は、報酬からその分を控除することができていたのである。そうでなければ、出費額はもっと多くなっていたであろう。現在の日本でも、年長の教授に関しては、年金額を控除した額を給与額とする例がある（64歳以上は、給与額を半減するなど）。

具体的にみると、1407/09 年に、給与額は、100 から40グルデンであった。もっとも多額の支払がされたのは、ローマ法の教員の講義であった。法学の講義の報酬は、高いのが通例であった。教授の Vorburgは、100 グルデンをえて、Spulは、1440年まで同様に100 グルデン、のちには、150 グルデンとなった。他方、教会法の講義につき、市は、40から50グルデンのみを支払い、新法につ

29) Keussen, S.103f. 19世紀のライプチヒ大学に対し、ザクセン王国が多額の財政負担をしたことについては、独法116号103頁以下、とくに147頁。中世の大学では、給与の遅延や、件費不足で、教授の採用ができないことなどが生じており、ケルン大学も例外ではない。給与の遅延もあった。後述(3)(a)参照。中世のフライブルク大学の経済状態と組織については、Bley, Die Universitätskörperschaft als Vermögensträger, dargestellt am Beispiel der Universität Freiburg I.Br., 1963がある (Beiträge zur Freiburger Wissenschafts- und Universitätsgeschichte, H.28)。

いては、最初30、のちに50、ときには70グルデンとなった。民法または皇帝法(Pandekten, Codex)では、平均して80、ときに100グルデンが支払われた。ローマ法の講義は高価であるが、法学提要(Institution)では、18から26グルデンのみである。格差が大きいのも特徴である。

医学部の講義では、40グルデンである。神学部では25、ときに、40から50グルデンであった。司教座都市であっても、あまり神学の講義が重視されないことから、大司教は、ケルン大学の運営に熱心ではなかった。後代に、ボンやミュンスター大学の設立に熱心となる原因でもある。15グルデンという少額の報酬が、学芸学部 of Heiner von Neuß に支払われていた。もっとも、彼は、別の学芸学校の管理者でもあり、そこから大学と同様に給料をえていた。また、自由に使える役宅もうけていた。一般に、学芸学部は、市にあまり大きな負担を与えなかった。兼任者が多かったのである。現在の兼任や非常勤講師のようなものである。無給の教授職という形態は、20世紀前半にもみられる。教授の給与でも、大学固有の財産からの部分の大きい者と、公的負担の部分の大きい者とがいたが(マールブルク大学の例)、その区別や割合の理由はあまり明らかではない(空きの出た順に充当していたのではないかと推察されるが、講座の順位も影響していた可能性がある)。

(c) 約100年後の1500年との比較は、興味深い。支出額の増大がいちじろしい。経理課の記録では、当時、市は、3人のカノン法学者に900マルクを、2人の世俗法学者に700マルクを支払っていた。医学部の3人に、400マルク、神学部の4人に380マルクであり、12人に対し総額2380マルクである(単純平均だと1人198.33マルク)。これは、換算すると714グルデン(Pagamentsgulden)である(ここでは、1グルデン=3.3マルク)。

同年の他の記録では、世俗法の講義に500マルクが支払われている。皇帝法の主要な講義はもっとも高価で、午後の講義は、200マルクであった。医学部では、200で、他の2つは100マルクであった。神学部の3つは、100マルクずつで、1つは80マルクであった。新法の講義は200マルクであった。高い報酬をえているのは、Herb. von Bilsenであり、200グルデンであるが(ほぼ600マルク)、これには、市参事としての給与もふくまれているのである(あとの

1 人は、100 マルクということになる)³⁰⁾。

講義に登場する「新法」の意味は、明確ではない。イタリアでは、旧法はローマ法で、カノン法は新法であるが、ローマ法が継受されたドイツでは、早く継受されたカノン法が旧法であり、後に継受されたローマ法が新法となる（【変容】371頁）。ただし、比較的新しい大学は、イタリアの大学の講義をそのままモデルとしたから、イタリア式になることもある（マールブルク大学）。とくにプロテスタントの大学では、カノン法は排斥され、イタリア式にローマ法の優越を認めることもある。ケルン大学はドイツでは古い大学であるから、カノン法が優越する旧法である（初期のDekretといわれるカノン法）。しかし、ローマ法の講義は、別途設けられているから、ケルン法や慣習法がここで講義されていた可能性がある。ハイデルベルク大学でも、慣習法は早くから講義の対象となっている。ケルンでも、固有法の講義への需要はあったはずである。ケルン法は、リューベック法の母法であり、北方地域では重要な意味をもっていたからである。また、多くの慣習法は、世俗化されたカノン法を根拠とすることが多かったのである。

その後の給料との比較によれば、15世紀のライン・グルデンは、9 から3 マルクに下落した。そこで、最高の給料でも、490 ライヒ・マルクとなる³¹⁾。他の大学では、講座ごとに、以下のグラフのような差が生じる例は少なく、(d)のチュービンゲン大学との比較でもケルン大学の特殊性が顕著である。

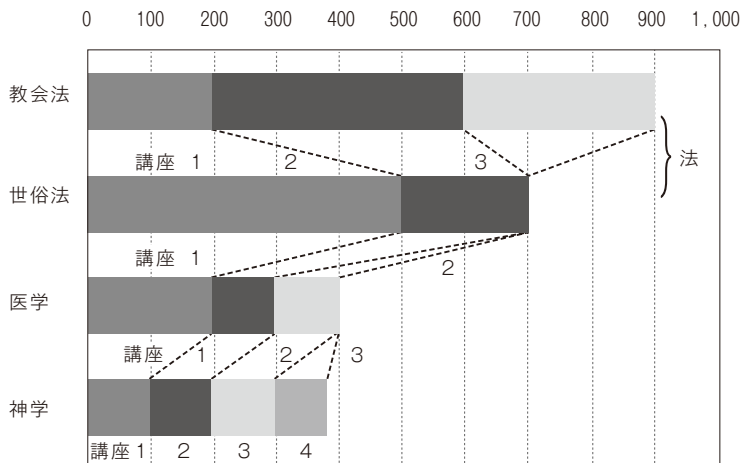
なお、銀単位のターラーと金単位のマルクの交換比率は、ドイツ統一時には、1 ターラーで約3マルク相当とされるが、それ以前は必ずしも明確ではなく、地域によって統一されてもいない。16世紀に、新大陸から大量の銀が流入した

30) Ib., S.104f. なお、本稿では、講座の承継や変遷についてはふれない。チュービンゲン大学の法学講座の変遷を巻末に図示するにとどめる。Finke, S.162, S.200, S.216. 後順位の講座から先順位の講座への昇進などは、他の大学と同様である。マールブルク大学について、【歴史】10頁以下参照。

31) Keussen, S.104 では、実質価値は、その5 倍となったから、もっとも高給の教授は、年俸2500マルクとなる。また、これは市からの給与のみで、多くの教授が結婚していないことをも考慮するべきとする。

ことから、それ以前との変動も生じた（金価値が銀に比して2.5倍にもなった）。

給与の比較、専門学部（マルク）



(d) 比較までに、以下は、初期のチュービンゲン大学の法学の講座の報酬である。講座数は少なく、報酬もケルン大学の方がかなり高価なことがわかる。商業都市ならではの額である。ライプツヒ大学など、他の大学でも、チュービンゲン大学の水準に近いであろう³²⁾。ケルン大学の報酬額の大きさと格差はいちじるしい。ケルン大学では、講座間の格差もいちじるしい。初期のチュービンゲン大学の法学講座の変遷については、126頁の図1参照。

チュービンゲン大学の講座の報酬

(単位：グルデン)

講座	カノン法			世俗法		
	1	2	3	1	2	3
1481年法	Chorherr	Chorherr	Chorherr	110	80	30
1491/92 年法	120	80~90	80~90	100	80	30~40
1520年法	100+10	80+10	90+10	100+10	80+10	60+10

32) Finke, S.32. ロシユトックやキールでも、チュービンゲンの水準に近い。

（Chorは、文字的には合唱隊であるが、合唱隊は教会に属するから、教会関係の聖職禄を指している。1482年に、チュービンゲン合唱隊財団の参事会Tübinger Chorherrnstiftが、聖職禄を提供した。ケルン大学の場合と同様、その場合には、チュービンゲン大学としての支出は不要になったのである。Finke, S.32）

(3)(a) 給与は、講義時間、科目の重要性、教授の評価と年齢に従っていた。聖職禄の有無にもよる。講義の発言や内容によるわけではない。臨時管理者を通じて行う市との契約は、年数を決めて締結された。テニユアの有無も契約交渉しだいであったと思われる。そこで、教授は、よりよい条件を求める可能性もあった。逆に給与の減少の危険もあった。給与額と同様に、教授の契約の満期時も異なっていた。支払は、3 か月ごとや半年ごとが多く、毎年あるいは、月ごとに支払われる場合もあった。しかし、大学の経理課の支払は遅延し、しばしば満期から1 年後ということも生じた。

教授には、市からの収入、学位の費用、職からの副収入のほかに、相当の副収入があった。とくに、法学部と医学部では、それが大学の給与をはるかに超えることもあった。法律家は、貴族の助言者となり鑑定もできた。中世の大学法学部は、判決団による鑑定と判決作業を行ったから、その収入も莫大であった（後述Ⅳ 3(5)参照）。医師は、私的な医療実務をし、諸侯の侍医となることもできた。学芸学部でも、貴族付きの教師、個人教授や顧問（Kommensal）としての副収入があった。神学部でも、顧問や儀式のほか、しばしば聖堂参事会の禄が加わったのである。Joh.von Ratingen博士は、700 グルデン以上を聖職禄と自己財産、教会裁判所の実務、弁護士活動などによってえていた。講座担当者がみずから聖職禄をもっている場合には、大学は負担を減免できる。著名な皇帝法の教授 Joh.vom Neuenstein は、1403年に、市との間で、生涯、年俸350 グルデンを受領する契約を締結した。それに、家賃と職務の衣装代として24グルデンが加わる。さらに、退職後は、高い年金が保証された。同年、彼は、教会禄と聖堂参事会員職もえたのである³³⁾。

33) Keussen, S.104ff. しかし、大司教や教皇大使は、しばしば法学教授に圧力を加えようとしたとされる。S.107. 後述Ⅳ 2(4)、後注79) をも参照。

(b) 市は、正教授のほか、ときに員外教授にも支払をしていた。著名な法学者の Petrus Ravennasが1506年にケルンに来たおりに、市参事会は、奨学金を設定し、家賃を支払って、彼をひきとめようとした。彼を獲得後、ケルン大学は、人文主義者のロイヒリンとも交渉をした（インゴルシュタット大学が獲得）。Ravennasは、1448年ごろRavennaで生まれた。パドアで法律学を学び学位をえた。1497年にグライフスヴァルト大学教授、学長、1504年に、ヴィッテンベルク大学教授で、1506年にケルン大学教授となった。

16世紀半ば、大学の衰退により、ケルン市参事会は、従来重視していなかった学芸学部に注意を向けた。啓蒙の時代となったからである。Gerh.Mathisをギリシア語の教授とし、ルーヴァンから、哲学と古典学のためにJustus Belsiusを招聘した。後者は、大学改革の計画を出した。参事会は、彼に、50グルデンの給与、ワインや職の衣装を与えようとした。翌年、Belsiusは、数学の講義をもすることになり、大幅な給与の増額が承認された。しかし、全体として改革は遅れ、大学の低迷を招くことになったのである³⁴⁾。

(c) 市の財政状況が悪いことから、1517年には、経理課から支払われる講義の数は、いちじるしく制限された。16世紀には、ケルンでの医学教育は、大幅に後退した。長期にわたり、正教授は1人だけとなった。他方、法学の正教授の数は増加した。世紀の後半に、6人が給与をうけ、1560年には、短期間8人にもなった。そのうち3人は、教会法学者であった。講座が空席になる場合を期待する者(Expektanz)もあり、人材に不足することはなかった。また、大司教の同意をえて法学提要の講義が別の財団(Wilpruchの財団)から支払をうけることもあった。大司教は、他の員外の講義に支払うこともあった。大学からみると、寄付講座である。しかし、短期間の成果の開花後に、法学部の凋

34) Keussen, S.112ff. 中世初期の学芸学部は、しだいに哲学部になり、専門性を強めた。最大の契機は、啓蒙思想であったから、それに乗り遅れることは、影響力の低迷を招いたのである。Schwinges, *Artisten und Philosophen, Wissenschafts- und Wirkungsgeschichte einer Fakultät vom 13. bis zum 19. Jahrhundert*. 1999 (Veröffentlichungen der Gesellschaft für Universitäts- und Wissenschaftsgeschichte, 1).

落が生じた。

18世紀にも状況はよくならなかった。1728年に、経理課は、5人の支払に教授の現況（actualis docto）を証明させなければならなかった。ボンのアカデミーへのケルン選帝侯の保護は、競争のきっかけとなった。1784年に、参事会は、新たな提案をし、教授の低い給与を改善することにした。とくに、法学部、医学部が考慮された。給与改善のために必要な要求は、3108グルデンに達した。しかし、この譲歩にもかかわらず、数人の教授は、講義義務を果たさなかった。ある者は、公の講義を違法に（合法な場合もある）自宅で行った。学術委員会は、いかにこうした「不足」を除去するか報告を求めた。1791年に、委員会は、教授にどの程度聴講者がいるかの調査をすることになった。委員会の調査ができなかったことから、学部長が、教授から聴講者との関係を調査し、報告することとされた³⁵⁾。

5 シスマの時代以降の大学の地位

(1) 大学は、宗教改革によって大きく宗派ごとに分断されたが、大学が宗教による影響をうけたのは、必ずしも宗教改革だけではない。アヴィニヨンの捕囚（1309-1377）、シスマ（教会大分裂、1378-1417）、教皇と公会議の主導権争い

35) Keussen, S.115ff. 大学特権である課税や監視からの自由（Akzife- und Wachfreiheit）について、S.119. 皇帝フリードリヒ3世は、1442年に、一般的に大学に税金や負担からの自由を宣言しているが、その範囲はつねに問題となった。1445年には、学生の食料品等への課税が問題となった。ビールやワイン、パンなどの食料品のほか、本、石炭などへの課税は、市の重要な財源でもあったから、紛争の元となったのである。1460年にも再燃した。その後も、市は年限や品目を限って、必ずしも妥協しなかった。1507年に、大学と市は契約を結び、大学の自己使用のための一定の醸造所とパン製造所の課税が免除された。S.121. 16世紀末からは、大学関係者の監視や下宿の制限からの自由が問題となった。後述の預託の慣行などで問題となる（後注66）参照。静謐を保つことは、閉鎖空間である都市にとって重要であったことから、1583年には、学生も徒弟と同様に制限をうけ、1567年には、他の者も、教授の活動時以外は制限された。1594年には、自由は、医学教授が夜間診察に行くときだけに限定された。S.122. 救急車がサイレンを鳴らすのと同義である。

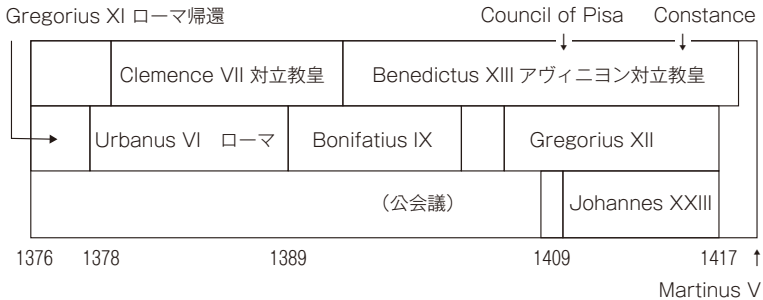
など、小さな紛争は、無数に存在した。カトリックだからといって一枚岩だったわけではない。宗教改革前のヴィッテンベルク大学は、民族主義の立場からローマには服従せず、ルターを支持した。古くは、1366年に、オックスフォード大学も、アヴィニヨンの教皇ではなく、ウィクリフを支持したのである。英仏の百年戦争(1337-1453年)の最中でもあった。しだいに、国家や民族が、グローバルな宗教への盾となったのである。

ケルン大学は、シスマの間に、ウルバヌス 6世(1378年即位)によって許可状をえて設立された。大学特権の承認につき、ウルバヌス 6世の後継のボニファチウス 9世からも、恩恵をうけた。シスマは、フランスと他国の対立から生じ、パリ大学は、対立教皇「クレメンス 7世」(1378 年即位)を支持した。パリ大学の定款と特権は、ケルン大学のモデルとなり、また、ケルン大学の最初の教員のうち15人は、パリ大学に由来した(4分の3である)。そこで、1394年当時、ケルン大学は、パリ大学の論調に親和的であった。

しかし、ケルン大学のボニファチウス支持は継続し、シスマを終了させ教会を再統一するために、双方が辞任するというフランス式の妥協案について、同年と1414年にパリ大学から送られた使節にも同調しなかったのである。対立教皇に与しなかったのは伝統的な皇帝との関係によるものである。ドイツの諸侯の大勢でもあった(反皇帝のハプスブルク家のみ対立教皇派)。その妥協案は、2 教皇から拒否され、統一は、えられなかった。その後、教会統一のために開催された1409年のピサ公会議では、双方の教皇が廃位され、新たにアレクサンデル 5世が即位した。しかし、旧 2 教皇は双方とも退位を拒否したことから、3教皇が並立することになった。1414年に開催されたコンスタンツ公会議では、3 人とも廃位され、新たに1417年に、マルティヌス 5世が即位した。これによって、ほぼ40年にわたる分裂は終了したのである³⁶⁾。

36) 教会大分裂の一般史は、Gebhardt, Handbuch der deutschen Geschichte, Bd.6 (Schisma und Konzilszeit), 7.Aufl., 1986 (Baethgen), S.12ff. また、Keussen, S.57f. また、Denzler, Andresen, dtv-Wörterbuch der Kirchengeschichte, 1982を参照。文献も詳しい。

教会大分裂と教皇の変遷



(2) 他のドイツの大学と同様に、ケルン大学も、カトリック教会の変動の影響をうけている。もっとも大きい精神上的の動きは、ルターの宗教改革である。ケルン大学も無関係ではなく、16世紀の間は、人的な個性により、しばしばプロテスタントの見解が出現した。それと同時に、対立者の活動も多数みられ、カトリックの教義を防衛した。

とくに、プロテスタントと戦う中心勢力であったイエズス会の影響は大きい。16世紀の末に、ケルン市の参事会は、宗教改革の支持者に対し、厳格な政策をとった。まず、自分の家から異端者を排除しなければならなかったのである。ケルン大学の中の、プロテスタントの運動の発生と、その反対者を若干概観することが有益である。

ケルンの神学部で最初にルターが言及されたのは、ルーヴェン大学の教授に対する手紙の中である。ローマの教皇庁では、長らくケルン大学との関係は注目されてきた。大都市で、選帝侯の所在地でもあるからである。他の中小大学と同じというわけではない。1522年に、教皇ハドリアヌス6世は、小勅書でルターの謬説と闘うことを求め、1523年に、その勅書は、ケルンにも達している。神学部教授の Balentin Engelhart von Geldersheim と Arnold Luyde von Tongern によって、ルターの異端に反対するとの回答がされている。

しかし、教授陣が一枚岩だったわけではなく、1523年に、Gerhard Mesterburgは、改革者に近く、神学部と対立した。対立は、ケルン大司教の異議を招き、ケルン市参事会も、その見解を講義で述べることを禁じた。また、

Agrippa von Nettesheim は、外部に明示しなかったが、宗教改革の理念を信奉していたし、著名な人文主義者のJohann Glandorp も、積極的であった。エラスムスやロイヒリンが逡巡したように、多くの人文主義者にとって、プロテスタントの理念そのものは、必ずしも忌むべきものではなかった（積極的に与えることはなかった）。Glandorpの70グルデンもする本は、ケルンで差し押さえられ、彼は、プロテスタントのヘッセン・ラント伯フィリップの援助を求め、マールブルクの教師となり、1534年には、マールブルク大学の歴史の教授となった。マールブルク大学は、当初から改革派の大学として設立された。

教授の Eisbert Longolius (Langenraet) は、ケルンには長く留まらずに、ロシュトック大学（ルター派）に転出し、短期的にケルンにもどった時に死亡したが、カトリック教会での埋葬は拒絶された。メランヒトンは、彼に写本を献上した。2年後に、彼の妻は、市からの退去を命じられた。

とりわけOldendorp (1488-1567.6.3) は、多数の聴講者を集めたことで著名である。彼は、1488年に、ロシュトックで生まれた。父は商人であった。1504年から、ロシュトック、ケルンで学び、1515年に、ボローニアで学位をえた。1516年にグライフスヴァルト大学で教授、2回学長となった。フランクフルト（オーダー）とロシュトック、リューベックで法律顧問をした。1538年、ケルン大学教授となったが、2年後に職を辞する通告をした。ケルン大学は高給で彼をつなぎ止め、宗教的活動を制限しようとしたが、彼は、市民的自由を望んだ。大学の要請から、全市的な講義をしたのち、1540年に、市を去り、マールブルクに移り、マールブルク大学教授。1544年に、ヘッセン・ラント伯フィリップの顧問官。マールブルクで、1567年に死亡した³⁷⁾。

37) Keussen, S.83f. オルデンドルプについては、マールブルク大学に関して、【歴史】22頁参照。Luig, Klaus, Oldendorp, Johannes, NDB 19 (1999), S.514f.; Landsberg, Ernst, Oldendorp, Johannes, ADB 24 (1887), S.265ff. 後注74)のOdendorfとは別人である。

プロテスタントの運動一般については、Gebhardt, Handbuch der deutschen Geschichte, Bd.8 (Das Zeitalter der Reformation), 8.Aufl., 1986 (Fuchs) S.11ff. イエズス会の影響については、一般的に、Drobesch/ Tropper (hrsg.), Die Jesuiten in Innerösterreich, 2006に詳しい。その中のRumpler, Die Jesuiten als Träger der

Longolius と Oldendorpの時期は、ケルンの大司教 Hermann von Wied (1477.1.14-1552.8.15. 選帝侯位は、1515-1547) が、宗教改革側につくかどうかを逡巡した時代であった。大学だけではなく、諸侯や修道会も、その帰趨を選択している時代だったのである。同大司教は、シュトラスブルクの宗教改革者 Martin Butzer (1491.11.11-1551.2.28. 教義は、Zwingli に近い) に近く、カトリックとプロテスタントとの融和にも熱心であった。

Johann Weierhagenも、改革側の支持者である。1549年には、大学は、混乱の最中であった。大司教の背教と没落が影響していた。ケルン大司教は、選帝侯でもあったから、皇帝の干渉もあり、宗教改革は成功しなかった。ケルン大司教が選帝侯として、世俗の力を有する限り、皇帝も無関心ではいられなかったからである。当時の皇帝はカール5世（ハプスブルク家）であり、名目ではなく、神聖ローマ帝国皇帝としては例外的に強力な存在であった（ケルン大司教の存在意義は大きい。中世の著名なケルン大司教に、Brun, 925-965.10.1がおり、彼はオットー大帝の弟で、ロートリンゲン公を兼任し、帝国の統一に寄与した）。ケルン選帝侯領は、ハプスブルク家領のネーデルラントと近く、地政学上重要な地域でもあった。大学では、教授のSibert Louwenberg と Dietricher Laen=Lennep は、カトリック擁護側である。後者は大司教の顧問となったが³⁸⁾、Louwenbergは、大学から追放された。

1545年に、大学は、カトリックからの離脱者が罰せられるべきことを求めた。しかし、1550年代に、Justus Belsiusなどの改革側支持者を出した。Jakob Leichius も改革側である。その後も、対立は続いたが、省略する。ここでは、こうした対立と混乱が、イエズス会登場の道を開いたことの指摘でたりる³⁸⁾。

Wissenschaft in Österreich und Kärnten, S.37f. Hartmann, Rolle und Bedeutung der Jesuiten für den Wissenstransfer von Kontinent zu Kontinent im 17. und 18. Jahrhundert, S.59ff. その影響は広範囲で、オーストリア・ハンガリー帝国の全域に及んでいる。Rüegg, II, S.110. 前注26) 参照。

38) Keussen, S.87f. ケルン大学は、イエズス会の学校 (Gymnasium Tricoronatum) を 1556 年に統合している。1798年の廃止後は、Zentralschule となった。

中世のケルン大司教の教区は、オランダを包含したから、カトリックにとどまれば、

(3) イエズス会は、1534年に設立され、1540年に、教皇パウルス3世に承認された。ケルン大学では、三王冠ギムナジウム(Dreikronengymnasium)で支配的勢力になったのが、最初である。1570年に、イエズス会士Arnold Havensisが、ルターは反キリスト的であると主張した。1564年に、教皇ピウス4世は、大学の全教授にトリエント公会議の精神(Tridentinum, 1545年から1563年、反宗教改革の精神を明確化)への宣誓を命じた。1570年に、Johann Rethiusは、大学の全構成員による宣誓の草案を作成した。しかし、イエズス会の学校TricoronatumとLaurentianumの教員のみがこれに従った。また、芸学部(Philosophische Fakultät)の学部長Johann Bremarusは、全得業士の宣誓を行った。1571年に、Rethiusは、宣誓を神学部(神学 Fakultät)の学部長の帳簿に記入した。その後、ある学生は、試験の前の信仰告白なしには、試験をうけられず、個人的に教授の下で試験を受けた。Rethiusのほか、Petrus Canisiusも正統主義に熱心であった。大学は、1550年代から正統主義の保護に傾いた。

その結果、プロテスタントの学生がケルンに来ることは、まれになった。Dwergの奨学金をえられる都市の者は、プロテスタントのことがあった。HerfordやLübeckは、プロテスタントが多かったからである。そこで、Dwergの財団が失効してからはHerfordの影響は減少した。Lübeckは、なお奨学生を送ってきた。このように、Lübeckは、近くのロシュトックだけでなく、遠隔のケルンにも学生を送っている。ケルンが、同じハンザ都市から学生を受け入れているのは、自市の出身者が少ないことの一端かもしれない。

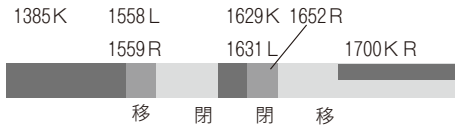
16世紀の末には、プロテスタントの禁止は、いっそう強化された。1673年に、学長のHaasは、大学の集会において、カトリックでない法学の学生が学籍簿に登録されるかとの疑問を出し、その承認を否定した。他方、1684年に、市参事会は、カトリックでない学生も、市民兵たりうるとしている³⁹⁾。

オランダの教区を失うことになり、プロテスタントに改宗しても、プロシア公国のようにみずからが主導権をとれなければ、やはりオランダを失うことになる。選帝侯としてはオランダを支配していたわけではない。ここに逡巡する原因があったのである。I3の地図参照。

39) Keussen, S.89ff. このように、社会的な少数者や弱者が権利においては否定され、

(4) こうした抑圧の結果、ケルンの学生団体は、18世紀には、プロテスタントの信条を述べることはできなくなった。もっとも、熱狂的な学生も存在した。宗旨が必ずしも統一されずに混乱が続いたのは、ハイデルベルク大学と似ている。ただし、ハイデルベルク大学では、宗旨の交代が続いた後、1700年に、カトリックとカルヴァン派の間で講座の妥協がされている。シュトラスブルク大学もやや似ており、1621年の大学はプロテスタントで、カトリックの大学は、1701年にできた。両者は、1765年に統合されたのである（1793年廃止）。18世紀には、宗教対立は、従前の先鋭さを失っている。

ハイデルベルク大学の宗旨の変遷

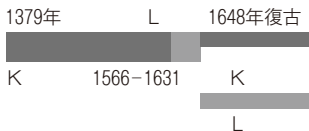


(Kカトリック、Lルター派、R改革派。1700年から、改革派の講座を認めたカトリック。大学は、ペストや戦争のうちに、他への移動や閉鎖を繰り返した) ハイデルベルク大学の閉鎖は意外に長く、1632-1652, 1669-1703にみられる。

義務においては肯定されることは多い。年少者も、しばしば権利は否定され、義務をおわされる例もある。拙稿「子どもと成年期に関する一考察」独法110号1頁、30頁参照。

ケルンと同様に、カトリックが復権した例としては、エルフルト大学がある。同大学は、1392年設立、1566年に、ルター派の講座をおき、1631年にルター派となる。しかし、1648年に、再度カトリックとなり、ルター派の講座は学外におかれた。大学は衰退し1804年に廃止された。カトリックへの復帰や、ケルン大学より4年遅れて始まり、6年遅れて終わった点では、きわめて類似している。エルフルト大学については、独法118号27頁参照。

エルフルト大学の宗旨の変遷



(Kは、カトリック、Lは、ルター派である)

1773年のイエズス会の禁止と、啓蒙の時代の到来まで、抑圧は継続した。もっと下って、1787年に、市参事会は、プロテスタントに沈黙の祈りを認め、啓蒙専制君主の皇帝ヨーゼフ 2世も、これを確認した。学長のArnold Christian Metternich は、学部長たちに、大学がどういう立場をとるべきかを問うた。教皇大使(Nuntius, 市への使節であるが、ケルンでは、中世以来、たびたび大学にも口を出している)のPacca は、市参事会に寛容の勅令の撤回を求めたが、大学は、この問題への回答をしなかった⁴⁰⁾。啓蒙の精神によって宗教対立が後退したのである。

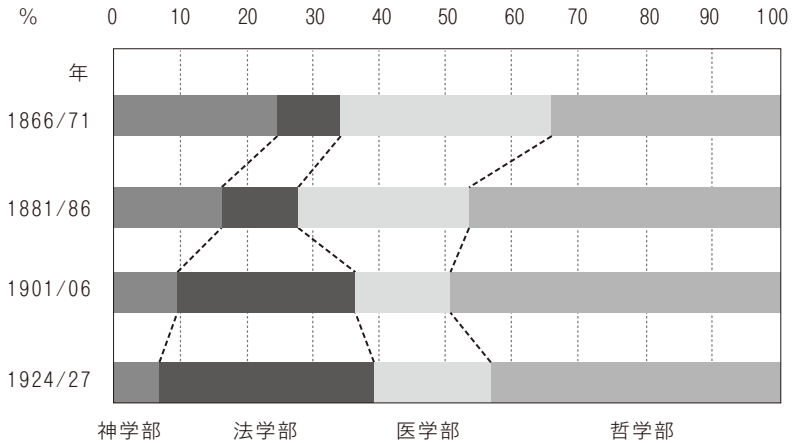
もっとも、ドイツの大学で、神学部の学生の割合が大幅に低下するのは、20世紀になってからであり、1919年のケルン大学の新大学は、その時代の状況をうけて、神学部をおかなかったのである。18世紀を通じて、まだ国家は、官吏に対する厳格な宗教管理を維持していたのである⁴¹⁾。その経過を考えると、ケルンの旧大学は、一面では時代を先取りしていたともいえる。

40) Keussen, S.93f. 回答の保留は、寛容の承認ということであろう。1773年のイエズス会の禁止と団体の解消については、Rüegg, II, S.159. マリア・テレジアとヨーゼフ 2世の文教政策については、ウィーン大学とフライブルク(ブライスガウ)大学の設立との関係でふれた。【変容】407 頁、411 頁。1760年に、教育宮廷会議(Studienhofkommission)が設置され、1771年に、ミラノで勅令が発せられた(Magistrato Generale degli Studi)。オーストリアの学校システムからイエズス会を放逐することが国家的に組織されたのである。スペインでも、1623年に、先駆的に行われたが(Junta de Colegios)、これは、あまり効果がなかった。改革のための組織の者が、イエズス会と密接に関係していたからである。

宗教的な寛容の勅令(Toleranzedikt)は、1781年から布告されているが、ウィーン大学などのカトリックの大学でプロテスタントの教員が本格的に採用されるのは、19世紀からである。Vgl. Mecenseffy, Evangelische Lehrer an der Universität Wien, 1967, S.21ff. 法律家でもっとも著名なのはイエーリングである。S.56ff. ほかに、Gustav Demelius, Ernst Demelius, Paul Jörsなどがある。S.58ff., S.70ff.

41) Hermelink, Kaehler, Die Philipps-Universität zu Marburg 1527-1927, fünf Kapitel aus ihrer Geschichte (1527-1866), 1927, Neud. 1977, S.835.

学部割合の変遷（マールブルク大学）



学部の割合は、時代により変化しており、18世紀には、専門学部の増加で、従来の学芸学部はかなり減少した。啓蒙の影響で哲学部として再生したのである（【歴史】393頁参照）。19世紀には、人文系の新領域と自然科学の増加から、哲学部の学生がいちじるしく増加した。これは、20世紀まで継続している。専門学部では、法学部と哲学部の新領域の割合が増加した。人文系の増加は、マスプロ教育の増加によるところが大きい。神学部は、マスプロ教育の対象ともならなかったのである。歴史的にもっとも小さかった医学部も増加したが、マスプロ教育とならなかったことから、その伸びは、限定的である。

(5) 以下では、ドイツの大学の学部ごとの歴史的な変遷をも概観しておこう。中世の大学は、学芸学部と専門の神学部、法学部、医学部のみである。

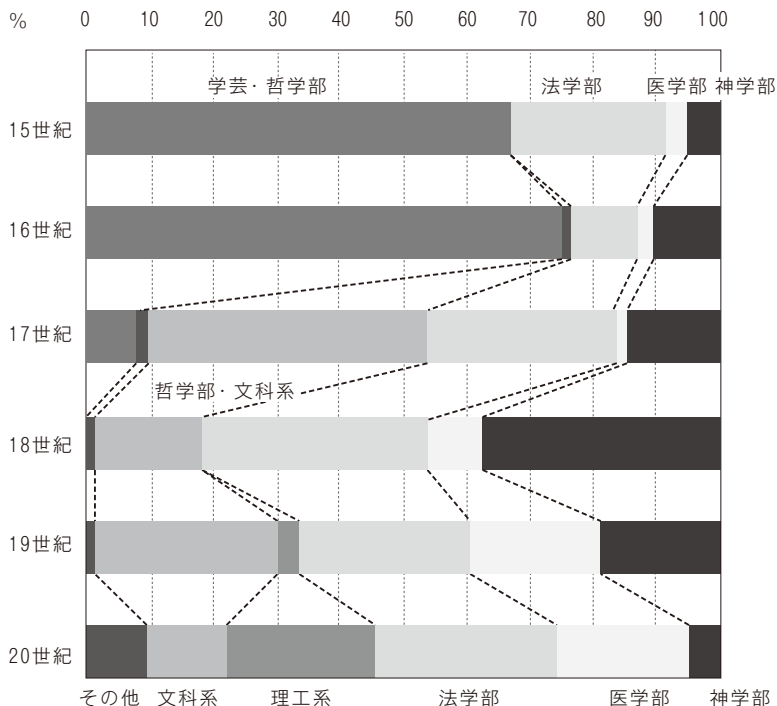
17世紀以降、従来の学芸学部は、他の3 専門学部と同様に、専門学部化し、哲学部の看板にかけ替えた。理工系の講座は、自然哲学としてその中から生じたが、増加し、独立の学部となるのは、19世紀後半からである。17世紀、18世紀には、国家による宗教管理が厳格化されたことから、中世以上に神学部の割合が増加した。法学部の学生数も、国家の官吏養成の必要から増加した。中世の医学部はごく小規模であり、増加するのは19世紀からである。他方、神学部

は19世紀まで2割ほどを占めていたが、20世紀にはごく小規模となった⁴²⁾。国家による宗教管理が不要となったからである。

20世紀後半の状況は異なり、爆発的な大学進学率の増加により、マスプロ授業と多人数の学生をかかえる文科系の割合が増加した。

学部割合の変遷（全大学）

Quetsch, S.11.



15世紀はケルン大学、16世紀はハイデルベルク大学であり、17世紀はシュトラスブルク、ヴェルツブルク、フライブルクの各大学である。18世紀は、13大

42) Quetsch, C., Die zahlenmäßige Entwicklung des Hochschulbesuchs in den letzten fünfzehn Jahren, 1960. ただし、本稿のグラフでは、学芸学部を哲学部への転換と新規の学部の関係が分かりやすいように、学部の位置を入れ替えた。他の専門学部は継続しているからである。

学の平均で、19世紀は15大学と技術専門大学の平均である。20世紀は1908年から1958年の平均である。

Ⅲ 機関と学生

1 学長

(1) 学長は、大学の長である。理事長の地位は、のちに表面上は後退した。ケルン大学は、パリ大学をモデルに設立されたことから、学長は、最初、学芸学部メンバーであり、その中からのみ選任された。最初の学長、Hartlevus de Markaもそうであった。しかし、この原則は、第5回の選挙から変わった。1390年に、法律家が選任された（第5代のHenr.Grymhart de Recklinchusen）。そして、大学のもっとも古い規則でも、学長選の候補者に学部は関係ないものとされている。1403年には、2人の法律家が續いた。カトリックの大学らしく、学長選に先だってミサが行われた。

ケルン大学では、厳格な慣習上、学長には婚姻していない必要があった。聖堂付属学校の教師が聖職者であった伝統によるものであり、他の大学にはみられない特徴となっている。大学に聖職禄があることとは関係がない。1919年設立の新大学ではこうした制限はない。たとえば、第3代学長のHeinrich Lehmannである（1876.7.20-1963.2.7、息子は、機械技術者で、DKGドイツ陶磁器会社の会長Helmut Lhemannである）。Enneccerus, *Recht der Schuldverhältnisse*の改定で著名である。新大学には神学部もないので、独身者も少ないのである。

旧大学でも、法律家と医師（つまり法学部と医学部）は、この慣習に反対した。この慣習によれば、既婚者の多い2学部は不利になろう。しかし、制約は、旧大学の廃止まで続いた。もっとも、規則として定められたことはない。1483年に、婚姻している医師が学長に選ばれようとしたが、反対にあい、元学長が再選されたこともある。1か月後に、2人の既婚の博士が、大学の集会で異議を述べたが、医学部の教授の多くは、古い慣習に従うものとした。もっとも、独身であればたりたから、男やもめの例は複数ある（1517年、1526年、1567年）。

1627年に、法律家の Gerw.Kreps は、婚姻によって学長職を失っている。そして、新しい学長を選任するか、当該任期中他の者を代理とするかにつき疑問が生じたが、神学部の Sev.Binius が後継となった。その後の大学の集会で、学芸学部長は、Kreps を停止中の学長 (Rektor ohne Titel) とするが、神学部長は、元学長 (Exrektor) と呼んでいる。

まれに、市の参事会が学長選に介入することがあった。1504年に、神学部の Andreas von Orenvort (Gereon の聖堂教会のスコラ学者) が学長に選任されたときに、市参事会は、人間的な理由から敵意を示し、その排除を求めた。対立の解消には、彼の学長職の断念が必要となり、元学長が半年、その職を継続することになったのである。

学部間の不一致から、1514年には、分裂選挙となった。神学部は、学芸学部とともに、神学部の Joh.von Benroyd を選挙し、法学部と医学部は、前学長の Christian von Conresheim を選んだ。争いは、後者が身を引いたことで解決した。1518年にも類似の事件があった⁴³⁾。

(2) 学長選は、最初は、年に4回も行われた。そして、15世紀まで、毎回新たな学長が選ばれたが、その後は、従来の学長が再選されることになり、少なくとも半年は継続することになった。さらに、1年となることもあった。1524年の神学部教授の Arn.von Tongernは、2回は学芸学部教授として、2回は神学部教授として選任された。16世紀には、1年ごとの交代が例となった。18世紀まで、名目的な任期は、3月25日、6月29日、10月9日、12月21日(などの聖人の日)からであった。

選挙後に、旧学長の下で、選挙結果の告示と新学長の職務への宣誓が行われた。また、学部長の前で、決算の検認と署名をしてもらったのである。この機会に、学長か前学長の家で、朝食がとられ、そこには、学長補佐 (Bedelle)

43) Keussen, S.123ff. ケルン大学の歴代の学長については、Ib., S.385ff. 本文の Gerwinus von Krepsは、ケルン選帝侯の法律顧問官 (iur. commissarius principis electoris Col.) である。Ib., S.403 (737). Andreas von Orenvortの代わりとなったのは、法学博士のJoh.Fastradi Bare de Buscoである。S.395 (465a, 465b). Joh.de Benroyd は、S.396 (502/03). かつこ内は、学長の代数である。

や市長、臨時管理者（Provisor）なども招待された。1720年には、この食事に26人もの参加者があった。大学は、古くから6 マルクの補助金を出し、のちには3 グルデンとなったが、これは費用をまかなうには十分ではなかった。魚に16グルデン、ワインに5 グルデンもかかったからである⁴⁴⁾。

(3) 学長職には、鎖つきの銀の印章（Siegel）があり、1485年に、学長のPet. Rinkは、銀の印章（Signet）を付加した。これらは、学長の権威の象徴となった。大学の公務や儀式では、聖ペテロや聖パウロの彫像により飾られた笏とともに、使用された。1485年には、オーストリア大公のSigismund は、彫像（Agnus Dei）を贈り、それは大学のミサのさいの和睦の接吻（Friedensküsse）に用いられた。

1681年には、学長の衣装が他の博士と区別されるべきかが問題となった。規則には、寒い時期には、毛皮のマントと頭巾をつけ、夏には、絹の衣装をつけることだけが定められていた。しだいに、細かな慣習が定まった。その一部によれば、神学部の博士と同様に裁断されたマントをつけ、学長が神学部のときには、紫の高価な衣装が、他の学部のあるときには、赤い衣装が用いられるとされた。ケルン大学は、織物生産の盛んなルーヴェンの大学の母大学であることから、マントは、毛織物ではなく、絹からつくるものとされた。絹のバレット帽（聖職者用）は、1669年に、学芸学部の学長の時から持ち込まれ、礼拝堂に保管された⁴⁵⁾。

44) Keussen, S.126ff. 学長のもつ笏については、Graepler, Zur Geschichte der Marburger Universitätsszepter, 1983がある。マールブルク大学は、1527年に設立されたドイツでは比較的新しい大学である。最初のプロテスタント大学でも、こうした伝統に従っているのである。写真もある。S.17. ケルン大学と4学部の印章の写真は、Keussen, S.128. 1459年のバーゼル大学では、Ruck, Die Universität Basel, 1930, S.11.(印章と笏の写真)。

45) Keussen, S.127ff. バレット帽は、カトリックの聖職者の帽子であり、その着用は、大学が聖堂付属学校の系譜をひくことを示している。大学人は、のちには貴族の服装をまねたが、当初は、聖職者の服装によっており、その伝統は長く続いたからである。角帽は、その変形である。学生の場合は、学位取得を意味した。現在でも、学位取得式のおりには、学生が角帽にケープを羽織って行列する姿をみることがで

(4) 学長の代理が必要なときには、学部長の同意をえて行われた。古い時代には、代理は、副学長ではなく、法律家によって行われ、のちには、神学部長がこの名誉ある地位を占めた。1518年、ペストの流行した1665/6年にも、学長が半年以上も不在となったからである。学長が代理人を定めたときには、学長補佐が笏とともに随行することになる。

学長が任期中に退任することはまれであるが、病気のときには、退任もありえた。死亡したときには、副学長が用いられる場合も、新たな選挙が行われることもある。

古い時代には、学長は、入学費用からなる小金庫 (kleine Kasse) を使用できるだけであった。そして、学長職の終了後に清算したのである。1508年に、一般的な管理権を獲得して、その権限は拡大された。たとえば、1644年に、奨学金の原資として入学費用の増額をしており、裕福な者からは、1 グルデン、貧しい者からは、4 アルブスを徴収した (1 グルデンは30アルブス)。1645年には、聖職禄の受給者 (Präbendat) の増額もされた。反対があったことや大学財政の窮迫から、1706年には、全学部 of 献金による金庫が設置された。こうした徴収に対しては、各学部の立場は、時々により多様であった⁴⁶⁾。

(5) 学長の任務は、大学特権を守り、大学の集会を招集し、主催し、その決定を実行することである。ほかに、代表行為をなし、学籍簿を管理し、入学や成績の証明などをする。聖堂参事会員に必要とされる 2年の勉学の確認することなどもある。しかし、学位の証明をするのは、学部長の任務であった。

大学の構成員相互の紛争のおりには、学長は、その判定をする。彼は、すべての人的および物的な事件において、訴訟を指揮し、判決を下すのである。管轄が不明な場合には、大学のすべての紛争で、2 グルデンを超えないものは、1445年 (1643年に更新) の規定によって、初審は、学長の管轄に属する。二審は、学部長 (会議) の管轄となり、三審は、全大学で決するのである。最初の1世

きる。教授陣のバレット帽は、もっと煩雑に各種の儀式のおりにみることができる。

1532年の学長Petrus de Clapisの肖像画が、Keussen, S.160にある。そこでは、角帽よりも、ベレー帽に近い。

46) Ib., S.130ff.

紀には、教皇庁に控訴する者もいた。のちには、ライヒ首長としての皇帝に控訴することが認められた。そこで、ライヒ宮廷顧問会議やライヒ帝室裁判所の判決を求めることもできた。控訴の方法は選択可能であった。方法が複数あるときに、選択が自由なのは、中世の一般的な方法である。

1682年の大学の集会では、学長の前に持ちだされた訴訟に、学部長が参加できるかが問題となった。彼らは、二審を構成するからである。同年、ある当事者が学長の裁断を不服として、教皇大使（Nuntius）に控訴したが、却下され、4学部長が控訴審となることが通告されている。長らく、教皇大使に管轄権のあることが原則であったが、1741年に、法学部長が大学の控訴委員（Appellationskommissar）となると定められた。これは、1754年と1790年にも確認されている。控訴期間は、1740年では、3カ月であった⁴⁷⁾。

(6) 学長の法的な相談に答えたのは、顧問（Assessor）である。1520年には、学長から、2 グルデンと赤いバレット帽をうけている。1527年には、学長の3期につき、同額をうけた。しかし、その後は、大学の金庫から報酬をうけた。額は、12ターラーとなることもあった。1576年に、学芸学部と神学部の提案により、新たな顧問は、法律家たるべきこととされた。

大学の法律顧問（Syndicus universitatis）は、ここから生じる。Hittorp 博士は、12金グルデン、のちに54ケルン・グルデンの年俸をうけている。後任のCasp.Cronenberg博士も同様であった⁴⁸⁾。時代の進展により、大学はしだいに自己の裁判権を失ったが、ドイツの大学では、大学の法律顧問や大学裁判官は、19世紀まで、大学の職として存在した。

2 学長補佐

(1) 初期の学長補佐（Bedelle）の職は、今日の事務官に学術秘書を兼ねていた。学問的基礎が必要とされ、古くは、得業士か公証人であり、17世紀と18世紀には、学芸学部の学士のタイトルが必要であった。学長の下におり、学長

47) Ib., S.133ff.

48) Ib., S.136.

と学部長、さらに18世紀には学芸学部代表によって選ばれた。賛否が同数の時には、学長が決し、学長が笏をもって任じた。その後、任じられた者は、信仰告白(Glaubensbekenntnis)をした。学部内の予備選挙では、すべての正規のメンバーに選挙権があった。1682年の学芸学部の選挙では、46人が選挙権を有した。

大学の規則では、学長補佐に、毎日少なくとも1回、学長を訪問する義務を定めていた。職務の内容は多様なので省略する。ケルン大学の最初の学長補佐は、Wilh.de Wijeであった。彼は、のちに、ユトレヒト司教の書記となった。神学部1398年の規則では、予備補助(Oberbedell)も定められていた。

(2) 法学部には、当初、特別の補助(Simon von Oudorp)がいた。彼は、のちに正式の学長補佐となった。彼は、1426年に、休暇願いが拒否され、ケルンを去り、新設のルーヴェン大学に移った。この間の事情は不明である。彼の財産が差し押さえられ、それが解除され、市議会から100グルデンが支払われたり、彼の妻が笏の損傷に対し25グルデンを支払っている。また、大学の秘密を集めたノートや、ケルン使節の手紙の一部をもちだしており、それは、4か月内に返送されなければならなかったが、その後の不明な事情で、現在パリの国立博物館にある⁴⁹⁾。人材の争奪や情報漏洩などを推測させる。

3 学生生活

(1) 中世の学生数は必ずしも明確ではない。入学者数(immatriculierte Studenten)は知りえても、多くの場合に、資料には欠損がある。また、学生がどのくらい長く大学にとどまったかは、不明である。ただし、ケルン大学では、学芸学部の学部長の記録が完全に残り、他の学部にも一部が残っている。1389年から1558年の間の学籍簿は明確であり、そこに登録された者は、3万6773人であり、さらに、2069人が登録されない者である。平均すると、年に

49) Keussen, S.137ff. Bedelleは、学長補佐であり、Botelは文字的には「使者」にすぎないが、国家レベルでは、Königsboteは、地方の伯や司教を監視する国王の巡察吏となる。大学でも、たんなる小使いではなく、相当の事務官を指していたのである(使番ともいえる)。Pedelleも、文字上は、用務員である。【変容】431頁。

230 人となる。うち1 万4000人が学位をえている。38.07%となる。特別な卒業資格がなかったことからすれば、低い、学部間には差もあり、一概に評価することはできない（大学の新規登録者の初期の時期の数は、129頁の図3）。

学位をえた者の数が限られていたように、かなり長い勉学期間を要した。単純計算で、3 分の1 の学生は、かなり長期の勉学をしていた。1500年代の初めの血なまぐさい時代でも、1000人から1500人の学生がいたことになる。年によっては正確な数がわかり（学長 Petrus Rinkの記録, Keussen, S.393 (384/386))、1485年には、1200人以上の学生がいた。

初期の学籍簿では、ケルン大学の国際性がみられる。1439年には、スコットランド、デンマーク、オランダ、ベルギー、フランス、南北と東ドイツからも学生が来ている。1440年には、半分以上が、オランダのユトレヒト教区、ベルギーの3つの教区の出身者であった。

娘大学にあたるルーヴァン大学への影響も大きい。のちには、スコットランドやデンマークからの学生の数が目立っている。16世紀初頭には、遠隔地からの者の数も増加した。ポルトガル、スペイン、ハンガリーからの修道士が多数来ている。16世紀半ばには、ロートリンゲンやフリースラントが目立っている。もっとも、ケルン大学は、カトリックの信仰を維持したから、宗教改革の時から学生の構成は変化した。オランダがスペインからの独立戦争に入ると、フリースラントからの学生はいなくなった。他方、イエズス会の影響の下で、南西部やルクセンブルクの学生が増加した⁵⁰⁾。

50) Keussen, S.147ff. エラスムス (Erasmus von Rotterdam, 1466-1536.12.11) は、1469 (?) 年、ロッテルダムにうまれたが、私生児であった。1487年に、アウグスチノ修道院 (托鉢修道会の1つ) に入ったが、ラテン語の能力が高く、Cambraiの司教の秘書となり (最初の著作antibarbariを執筆)、司教の許可をえて、神学博士となるためにパリ大学 (Collège Montaigu) で入学したのである。もっとも、オランダ旅行や詩作のため、神学の勉学はできず、1499年にイギリスにわたったのである。Gail, Erasmus von, Rotterdam mit Selbstzeugnissen und Gilddokumente, 1994, S.7ff, S.145.

このように聖職者が神学を深めるために (聖職につくためではなく) 大学に入ることは神学部では稀ではない。ただし、しばしば真の目的は、別にある。

すでに、1140年ごろ、小貴族のプロワのペトルスも、パリで神学を修め、バース

(2) 大学の規則で、学生の行為について規定するものには禁止規定が多く、中世的なものもある。9条では、不適切な衣装、戦闘的行動、飲酒癖、夜中の徘徊、売春の斡旋、盗み、飲み屋その他の禁じられた場所への立ち入り、賭博などが禁止され、さらに規則や学長・大学の命令への違反、ケルン市参事会への侮辱も、禁じられる。

初期に目立つのは、わずかな入学の費用も払えない貧しい学生である。彼らは、まれに10%以下であったが、しばしば35%にも達した。とりわけ三十年戦争後や災害の後には、いわゆる乞食学生(Bettelstudenten)が増加した。しばしば市参事会から禁令が出され、1721年には、外国人の乞食学生に、刑罰を伴った厳しい禁令が出された。乞食を削減するために、ケルン市から放逐するものとした。ビザ目当てに外国人「研修生」が利用されるのと似ている。

貧しさから、自分のベットを他の学生に貸す者もいた。故郷からもってきたチーズを売る者もいた。バターやチーズを自由市場で売ったのである。従者や料理人をする者もいた。現代の学生のアルバイトのようである。中世の学生が一握りであったからといって、豊かな者ばかりだったわけではない。貧しい神学生などが夢を求めて入学したのである。19世紀後半の遊んでいる学生像は、中世の学生にはあたらな。もっとも、快適にすごすために、ライン河でレクリエーションする者もいた⁵¹⁾。

の司教座聖堂助祭となったが、おもな活動は、カンタベリー大司教のための行政であった。サザーン・前掲書(前注19)168頁。聖職者が、大諸侯や国王の傍で、行政に仕えることは早くからみられたのである。その役割は広範で、事務や行政だけでなく、場合によっては武官にもなったのである。前述(Ⅱ 5 (2))のケルン大司教 Brunが著名であるが、彼に限られない。

- 51) Ib., S.149ff. 学生間の格差は、今日以上のものであった。中世の学生生活に関する文献は少ない。ライブチッヒ大学に関して、Herbst, Der Student in der Geschichte der Universität Leipzig, 1961, S.12ff.

住所不定の者に対する都市の規制については、不良労務者であったオイレンシュピーゲルの故事からも推定される。阿部謹也氏の研究が豊富である。阿部・中世を旅する人びと(1978年)174頁以下、200頁以下参照。ほかに、同・ヨーロッパ中世の宇宙観(1991年)84頁以下。同・中世の窓から(1981年)37頁以下。ティル・オ

(3) ドイツの大学で、女子学生が制度的に登場するのは、ようやく1900年前後からである（実際には1908/09年であった）。フライブルク大学の研究では、1873年が最古の導入時である⁵²⁾。種々の例外が試行的に行われたからである。中世にも、例外的に入学した女性の記録はある（1629年、1684年）。しかし、まれな例であり、数としてはイタリアにはおよばない。

中世初期の家庭内の教育では、比較的男女の差がなかったが、大学が成立し、入学手続きが厳格になると、かえって女性は教育制度から遠ざけられたのである。中世の大学には、暴力的で反女性的な文化もあった（後述6参照）。16世紀に、少数の女性のみが知られている（Ruperto-Carola, Olympia Grundler geb. Morata）。その後は、200年後で、イタリアのLaura Catharina Bassi (1732)

イレンシュピーゲルの愉快なはずら（1990年）など（28話にプラハ大学が登場する。100頁以下。29話はエルフルト大学である。104頁以下）。

- 52) Nauck, Das Frauenstudium an der Universität Freiburg i.Br., 1953, S.9ff. (Beiträge zur Freiburger Wissenschafts- und Universitätsgeschichte, in Verbindung mit Gerber, Hoffmann, Pfannenstiel und Ritter, hrsg. Vincke, H.3); Röckelein, Studentinnen im Mittelalter? – Diskontinuitäten europäischer Universitäten, in Wissenschaft mit Zukunft, Die ‚alte‘ Kölner Universität im Kontext der europäischen Universitätsgeschichte (hrsg. Speer/ Berger), 2016, S.137ff. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln, Bd.19). 近代以前にも、若干の例外はあったが、近代では、1871年に、ライプツヒ大学で女性の聴講生が数人認められたのが早い。ハイデルベルク大学でも同様であったが、1873年に禁止され、再開したのは、1891年であった。Nauck, S.12. 一般的に記述するのは、Hoerber, Das deutsche Universitäts- und Hochschulwesen, 1912, S.47ff.である。

上記のRöckeleinは、女性に関するものは、中世の大学では聖母に関するものしかなかったとする。しかし、男子禁制の女子修道院では、内部組織の維持が必要なために修道女の教育が行われた。これは、聖堂付属学校で教会の維持の必要から聖職者養成の教育が行われたのに対応する（男子）。これらは大学教育とは直接の関係はない。例外的に、クラカウ大学で男装して2年通学した女性がいた。拙稿でも、ライプツヒ大学の女子学院（Frauenkolleg）は、聖母学院であったことを指摘している。

【変容】372頁。大学の予算の項目に寡婦扶助基金が登場するのは、寿命の短い時代を反映している。【歴史】109頁。

である。ドイツでは、1733年のChristiane Mariane von Zieglerがヴィッテンベルク大学の哲学部から女流詩人の榮譽をうけ、1750年には、Anna Christine Ehrenfriede Balthasarがグライフスヴァルト大学から哲学得業士の学位をうけた。1754年には、ハレ大学で、Dorothea Christiane Erxlebenが医学博士の学位をうけた。そして、Dorothea von Schlözerが、1787年に、ゲッティンゲン大学で、哲学博士の学位をうけたのである⁵³⁾。

こうして、18世紀には、少なくとも3つのドイツの大学が女性に学位を与えているが、これらはいずれも講義への参加とは無関係の業績の評価であった。彼女らの教育は、もっぱら私的にのみ行われた。中世以来、貴族や上流階級の子女は、男女とも母親や家庭教師から初等の教育をうけたからである。大学での女性の勉学が自由になるには、19世紀末の到来をまつ必要があったのである。中世のケルン大学も例外ではない⁵⁴⁾。

1919年に再建された新大学においては、女性の入学が可能となり、経済・社会科学部で、学生の男女数は、1010対181人、医学部で、94対14人、1920年の法学部で、246対9人、哲学部で、217対57人であった。哲学部で女性比率が高いのは、帝政期の他の大学と同一の傾向である。ケルンの法学部の女性数は、1931年に82人で（男子1039人）戦前では最高数となったが、ナチスが政権を掌握した後、男女とも学生数は減少し、女子学生数は、1936年から1桁となった（男子426人）。ナチスは、とりわけ法曹領域への女性の進出を排除した。1942年からやや増加して13人となった（男子137人）。戦後は、大幅な増加に転じ、法学部の女子学生が3桁となったのは、1950年である（1011対102人）。1986年には、3912対2355人である（37.6%）。今日では、ほぼ同数となり、哲学部では、1970年代半ばから、男女比が逆転している⁵⁵⁾。

53) これらの歴史的な女性の勉学については、【変容】276頁以下参照。16世紀のPirckheimerの例では、「学識ある女性（virgo docta）」の名誉称号が付与された。【変容】276頁。

54) 中世のケルン大学は、18世紀の末に廃止されたから、女性の勉学は、20世紀の再建時（1919年、新大学）まで遅れることとなった。

55) Meuthen, Kölner Universitätsgeschichte, Bd.III, Die neue Universität Daten und

また、女性の正教授が登場したのは、経済・社会科学部で1972/73年に1人、法学部で1971年に1人、医学部で1968/69年に1人、哲学部で1972年に1人、数学・自然科学部で1966年に1人が最初であり、数学・自然科学部で1968年に2人となったほか、1970年代半ばに、哲学部と数学・自然科学部で4から5人となった。しかし、法学部は、1981年からはゼロとなった。1986年に、経済・社会科学部、医学部で、それぞれ1人、哲学部と数学・自然科学部で4人ずついるので、1人もいないのは、かなり奇異である⁵⁶⁾。

4 入学と学籍簿

(1) ドイツの大学には、その大学に入ったときのカードがある。学籍簿の原簿となるものである。その例として、20世紀初頭のケルン大学の届出用紙（Anmeldekarte）にその書式がある。ケルンの新大学設立の1919年のものでは、表には、名前、生年月日、年齢、出生地、国籍、宗教、父親の職業、両親の住所、大学入学資格、学歴、従前の大学と学期、ケルンにきた学期、ケルンの住所、記載日、署名などがある。

裏には、及第した学期、休学、学部のディプロム試験の証明、学位、講義を受けないことによる抹消（不払いなども）、学費の軽減（休学、勉学が9学期以上とか兵役に服して50%減免したなど）などの記載がある⁵⁷⁾。

旧大学の書式はそれほど詳細ではなかったが、基本的な部分は共通している。学生が大学を遍歴するドイツ（あるいは広くヨーロッパ）では、おそらくどの大学でも基本部分は共通しているであろう。

(2) 学籍簿は、大学のもっとも基本的な帳簿である。入学によって、学生は、大学に属する利益をえるのである。もっとも、入学が功を奏さない場合もある。

Fakten, 1988, S.293ff.

56) Meuthern, ib., S.318f. 員外教授にも、医学部と哲学部で1970年代から女性が1人いるほか、数学・自然科学部で2人となった。

57) Peter Lauf, Jüdische Studierende an der Universität zu Köln 1919-1934, 1991. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln ; Bd. 11). S.9f. 旧大学の学籍簿の写真は、Keussen, S.288. (1425年のNikolaus von Cues).

学生のみならず、卒業生でも、入学手続の不完全が宣告されることがある。学長の過失、情報カードの喪失や記入の不十分さなどによることが原因である。学籍簿は、のちに付された番号などの整理の欠陥により失われることもある。学籍簿の管理は、学長の義務であり、障害のある場合にのみ、副学長や学長補佐に委ねられる。学長の交代によって、保管のみならず、言語や署名も影響を受ける。言語や地理的に異なる学長の場合には、誤りの生じることがあった。

注目すべきは、虚偽の記載がかなりあることである。ケルン市の法律によれば、新来者は、入学前には、最高14日間しかケルン市内にはいらなかった。都市間の移動の不便な時代であり、今日のビザに似ている。しかし、多くの者は、それよりも先にきた。そこで、時間を正確に記するのではなく、とくに日曜日に関して、入学日を早く記した。これは、ほぼすべての学長職の期間で行われた。届出期間を遵守するために、かつて日本の役所が出生日を操作したのと似ている。新しい入学者の滞在日を短く書くことは、15世紀の放浪者の取締に関する法規や状況と関係している。中世都市は厳格な管理社会であるから、都市に居住するには住所を要し、住所を取得するには警察の滞在許可証を要する。さらに滞在許可のためには、雇用主の証明や学籍簿への登録が必要となる。各地を遍歴する徒弟のためには、親方による職業や居住の証明があるが、学生にはこうしたものがないからである。都市の空気は自由にする (Stadtluft macht frei) というのが中世の法諺であるが (この場合には農奴身分からの解放)、大学は、都市の規則からの緩衝地帯となっていたのである。二重の記入も、種々の理由から行われた。

15世紀には、大学が日常活動を停止し、入学が中断したのは、1回だけである。ケルンでは、ペストの流行による完全な中断はなかったが、社会生活の維持ができないときには、大学業務も停止した。

入学のさいの記載には、名前、身分 (Stand)、家柄 (Herkunft)、学部、費用の支払、宣誓などが含まれた⁵⁸⁾。名前の記載にも種々あるが、通常は、自分の

58) 宣誓については、遍歴職人が市参事会に提出するものが知られている。「市の利益を守り、損害を加えず、法律上の争いにさいしては市の裁判に服し、召喚されたときにはただちに市長のもとに出頭する」。阿部・前掲書 (前注51)「中世を旅する人

名に住所を付して行われた。出生地の記載はなかった。家柄に関する記載はあまり正確ではない。パリなど他の大学では通常求められる国籍の記載は、ケルンでは求められず、入学者の信仰と教区、まれに主任助祭の記載が求められた。初期には、ケルン大学はいちじるしく国際的であり、近隣だけではなく、遠くの外国からも入学した。

身分の記載は、あまり重視されなかった。大学のメンバーには、聖職身分の者が多かった。とくに、4つの托鉢修道会（フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスチノ修道会、カルメル会など12～13世紀に創設）の修道士は、特別な地位を占めていた。もっとも、大学の初年から修道士がおり、修道院への召請活動が行われたにもかかわらず、修道士の数はあまり増加しなかった。貴族の学生も、そう多くはなかった⁵⁹⁾。

(3) 学部の記事は、1395年ごろからあり、じきに通常となった。ケルンの学籍簿の特徴であり、これによって、勉学分野の概観が可能となっている。多くの分野が記載されることも、変更のあることもある。学部の境界は、まだあまり厳格ではなかった。そこで、学籍簿に、法学とあっても、同じ時期の学部長の記録簿では、医学と書かれる場合もある。また、短期間に、2 学部で学位をえることもある。現在の2 学位制の中世版ともいえる。学生が自分の専門を医学と書いても、「または順番に全学部」と付加されることもあった。この言葉が、また削除されたりしている。学生数が少ない時代でも、目的の明確でない学生はいたのである。専門の分化が十分でなく、基礎教育が重視されていた時代の遺物ともいえよう。

年齢も必ずしも一定ではない。入学者は、今日よりも多様であったと思われる

びと」) 188頁参照。定型的なものであり、大学に提出する宣誓書は、「市」を「大学」と読み替えたものとなろう。

59) Keussen, S.164ff. 貴族の学生が増加するのは、身分だけでは必要な地位につけなくなってからである。国家の運営者である官吏に十分な能力を求めるのは、理性的な国家を求める啓蒙の産物である。これに対し、中世の国家は、君主の家産にすぎないから、官吏の能力に対する要求は、それほど高くはなかった。豊かな市民も、多くはなかったから、学生には貧しい者が多かったのである。

る。現在のような年齢と結合した初等教育が整備されていなかったからである。一方には、経験のある年長の聖職者がおり、他方では、初等教育を家庭でうけたような若い入学者もいた。平均的な歳は、今日の学生よりも若いと推定される。寿命の短い時代だったからである。カノン法の規定に従い、学生は、一般に14歳に達していれば、宣誓可能であった。未成年者の宣誓義務からの解放は、法律には、1397年に初めて記された。1464年に、宣誓が強制されることとなった⁶⁰⁾。

(4) ケルン大学で最初の宣誓は、最初の学長Hartlevus de Markaによって行われた「最善の能力と良心に従い、大学の名誉と利益のために、誠実かつ謹厳に職務を遂行する」としたものである。入学者のする最古の宣誓の書式は、残っていないが、1392年の試験のさいのものが残されている。書式は、しだいに洗練され、3部にも及ぶものとなった。

(5) 学則上、入学費用は、6 銀ペニツヒと、学長補佐に支払う1 銀ペニツヒであった。のちには、異なった通貨と為替価値により、他の特別な支払が定められた。費用を免除される者もいた。著名な教授や博士、高い身分の者、たとえば、公、侯、伯、その隨身者、さらには、学長の知り合いや親戚も、この特権に浴した。その代わりに、学長への贈り物や学長補佐や従者へのチップも必要となったのである⁶¹⁾。

(6) 学生数には変遷があり、14世紀には、最初の年度を除き(763人)、多くの年には入学者は2桁に過ぎなかった。ハイデルベルク大学も同じ規模である。

60) Ib., S.166f. 成年年齢については、独法110号1頁以下、9頁。中世の年齢区分で、7の倍数が重視された。14歳、21歳が節目となる。キリスト教的な名数論によるものである。宣誓文の写真は、Keussen, S.304. (1400年の、Gerh.Radinc de Groninghen教授の職務宣誓・Dienstleid)。

61) Ib., S.167f. 特権は義務を伴うわけで、おそらく贈与はより高価についたであろう。大学の目的が勉学でなく、資格の獲得になると、中世の学位は高価になった。また、騰貴による弊害として学位売買が生じた。入学料や授業料も学位と結び付けられれば(学位取得に受講を要件とする)、高騰する可能性があるが、学位取得者の数は限られたから、授業料まで高騰したわけではない。前注19)をも参照。名誉であっても、今日のように資格や職種と結合したわけではないからである。

設立時のやや遅いエルフルト大学がおおむね200人前後であったのに比して少ない。在学年数が不明なため、全学生数は、明確ではない。

15世紀に入ると入学者数は増加したが、恒常的に200人を超えるのは、1450年以降である。当時、エルフルト大学は、400人を超えていた。ケルン大学も、1480年代からは、400人を超えることが多い。1496年には578人を数えた。最盛期といえる。16世紀初頭も、エルフルト大学と同様に多く、300人台のことが多い。転機となったのは、宗教改革の時代である。1520年代から激減し、また入学者2桁の年が増えた。1530年代には、ハイデルベルク、ケルン、エルフルトの各大学ともに2桁である。減少は、プロテスタント系の大学でもみられたが、カトリック系の大学でより顕著であった。エルフルト大学は、この時期の減少から回復することはなかった。ケルン大学では増加がみられ、1544年に117人となり、しばしば200人を超えた。1583年に、また93人となったが（その後10年ほど低迷）、1600年には、115人となった。1617年以降は、おおむね200人以上、1652年以降は、300人以上が多く、1660年には、420人となった。その後も、17世紀は、300人前後の学生を確保している。18世紀は、1754年まで不明であるが、1954年に190人で、その後も200人前後で、1774年からは、150人程度に減少した。この傾向は、1798年の廃止まで継続している（後注110）参照）。全体としてみると、宗教改革とフランス革命時の混乱が大幅な減少の契機となっている。

5 学位の取得者

(1) 中世の大学で、取得する学位の種類は多様で、名称も大学により異なり、上下の関係も一致していない。これらが統一されるのは遅く、17世紀以降、大学間の競争が増し、資格のインフレが生じてからである。それまでは、学問水準を比較した上で、学士、修士、博士を出したわけではない。ケルン大学では、学芸学部（Faculty of Arts）の初級の学位は、得業士（Magister）で、あとは各学部の博士だけである⁶²⁾。下位

62) 学位が、各大学の間で必ずしも統一されていないことについては、ブラール・大学制度の社会史（2015年、山本尤訳80頁）。原題は、Prah, Sozialgeschichte des Hochschulwesens, 1978である。最初に、学芸学部で、学位を1つ得て、他の専門学

の学位である得業士が多いのは、初等、中等教育が整備されていなかった時代の反映である。専門学部に入る資格を有しない者を収容し、大学教育のために準備させたのである（本科へ進む前の予備教育課程であり、明治の日本でも、大学予科や予備門があった）。

88頁のグラフにあるように、1389/90年の累積でみると、総学生数は、842人で、得業士の資格を取得したのは、114人で、13.8%となる。学芸の博士は、83人で9.9%、法学の博士は、36人で4.2%、医学の博士は、15人で1.8%、神学の博士は、19人で2.3%である。とくに、専門学部の博士の取得者数は少ない。合計しても、10%程度にすぎない。卒業しただけで学士の資格がとれるわけではない。大学には勉学にいくのであり、今日のように資格をとりに行くのではない。資格に汲々とするのは近代の特徴である。日本でも、かつての芸事で免許皆伝や目録伝授をうけたのは、一部の者だけである。

それでも、1556/58年には、学生総数は、521人に減っているが、得業士は98人で16.9%となっている。学芸学部で192人で36.9%、法学部16人で3.1%、医学部2人で0.4%、神学部20人で3.8%である。法学部と医学部のほかは、学位

部に進むことができた。最下位の学位は、得業士（Baccalarius）であり、最高の学位は、修士（Magister）であった。

博士（Doctor）は、ボローニアでは唯一の学位であったが、パリでは一般的ではなかった。13世紀から、得業士と博士の間に、学士（Lizenciat）が作られた。ほどなくして、これは、修士の直前に位置づけられた。試験と学位の段階的なシステムは、パリでできた。ボローニアのように威信を与えるだけではなく、学生の勉学段階を明らかにするためであった。大学が勉学ではなく、資格取得の場となったからである。また、修士や博士には、教授資格が結合された。これは、次には、それを付与する大学の格を決定することにもなったのである。今日でも、大学院をもつ大学ともない大学で格差を生じるのと同じである。

しかし、たとえ学位の順位を全大学で統一したとしても、論文や審査員の質までは統一できないから、同じ学位でも内容は異なる。中世の大学のように、ラテン語で共通し、教師も遍歴しなければ、同一性は保たれない。ケルン大学でも、後述のようなボン大学との競合が生じた。質の統一まで目指すのは、現代のボローニア宣言までもち越されている。

の取得者が増加している。

また、専門の分化が細くなかったから、学生が属する学部も明確なわけではなかった。よくいえば学際的であるが、事実は未分化だったのである。学生が学部を転換することはよくあり、結局は、どの講義をおもに聴いたかshだいであった。そこで、学部ごとの学生数は、そう厳格に区別できるわけではない⁶³⁾。

(2) 学位数と学部の変動は、次頁のグラフのようになる。学生数には変動があり、とくに1517年の宗教改革後は減少したが、取得した学位の割合には、あまり大きな差はみられない。医学部の学位数は、少なく、毎年ほぼ1桁にすぎない。神学部も少なく、宗教改革前は、1%に満たないことが多かったが、その後は、2～3%に増加した⁶⁴⁾。

宗教改革時には、どの大学も学生数を減らしている。早くに宗教改革をしたヴィッテンベルク大学のように学生数を増やした大学もあり、同大学は、イギリスや北欧などからも多くの学生を集めたが、全体として大学生数は減少している。これは、宗教者の需要が増え、速成の神学校が多数できたからである。こうした神学校の中には、後代しだいに大学に昇格した例もある⁶⁵⁾。

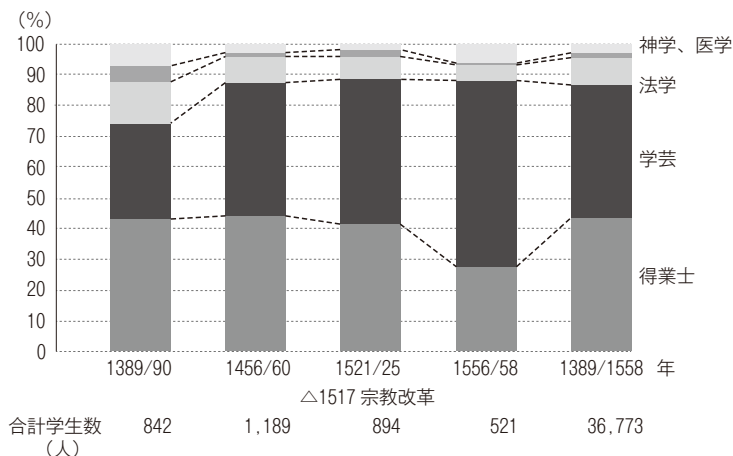
63) Keussen, S.380.

64) Ib. ドイツの大学では、イタリアの大学のように、医学部の学生は多くなかった。アルプス以北では、外科では床屋が重んじられ、内科も民間療法が重要な地位を占めていたからである。後注71)をも参照。

65) ジュネーブやチューリヒの大学が、宗教改革者の神学校を起原とすることについては、独法118号19頁、21頁参照。

フランス革命期にも、多くの大学が廃止された。一面では、時流に遅れたことによるが、他面では、産業革命による実用学校への需要からである。19世紀の初頭には、建築や技術の学校や専門大学が多数設立された。必ずしも一面的に大学進学者だけが増加したわけではない。これについては、プロイセンの大学に関する別稿による。

取得した学位の比較（5年ごとの合計）



6 その他の慣行や災害

(1) 預託 (Deposition) の慣行は、パリ大学から受け継いだ慣行であり、さらにケルンから娘大学であるルーヴアン大学にも引き継がれた。羽目を外した歓迎行為である。入学行為によって、学生は、完全な大学のメンバーとなるが、預託の儀式によって、学生社会に地位を獲得するとするものである (托身。一般社会、世間からの追放の意味もある。大学の起源が聖堂付属学校にあり、軍隊や刑務所と同じく、自由が拘束されない娑婆から転じるとの意味がある)。学生社会の慣習的行為である。中世的な共同体意識を強めるためのもので、類似の行為は徒弟社会などにもみられた。しかも、会合には騒乱や歌唱・飲酒がつきものであったことから、1392年のケルンの学則は、新来者に通常でない負担をおわせることを禁じ、その後も預託による濫用が禁じられている⁶⁶⁾。

66) Keussen, S.168. (Deposition) 本文の以下の学生の慣行は、ケルン大学が17世紀末に一度廃止されていることから、必ずしも明確ではないところがある。学生特有の慣行や儀式は、19世紀にはとくに発達し、決闘なども盛んになった。学生同士の兄貴分と弟分 (LeibburschとLeibfuchs)、博士論文の指導教授と学生の疑似親子関係

(2) 預託が、すべての大学に共通する慣行であるのに対し、新入歓迎 (Pennalisation) の慣行は、おもにプロテスタントの大学にみられる。1588年に、ロシュトックの学芸学部長が預託について述べており、17世紀の始めには、新入について述べる。北ドイツのプロテスタントの大学で流行した用語が、ケルンでもみられたのである⁶⁷⁾。

(3) 17世紀の半ばに、リエージュ教区やフランス語地域からの新来者から金を強請る事件が生じた。新来者に対し保護を理由として金銭を要求するものである。支払いを拒絶した学生のマントを新参者 (Novitiat) の担保として取り上げた。大学はこうした行為を禁止し、尋問に付したが、そのさいに犯人の学生は、3か月も学校に出てきていないことを白状した。学芸学部は、暴行に反対する決定をなした。その後のことは不明である⁶⁸⁾。

(4) 追いだし (Balete) の慣行は、しばしば大学の聴聞をうけている ((1)に対応し、娑婆に戻すという意味がある)。学生生活の終わりの会合で、音楽を演奏して歌唱・飲酒をするが、街中を徘徊し、しばしば夜警との衝突を引き起こしたのである⁶⁹⁾。

(5) 19世紀の学生に多発した決闘 (Duell) は、中世には少ない。聖職者が多かったからであろう。しかし、決闘をきっかけとして、学長とケルン市参事会の紛争が生じた例がある。Cand. jur. Fabri は、Lic. jur. Goldschmidt に決闘をそそのかされた。学長がこれを罰したのに対し、参事会は、ゴールドシュミットは、公務員であり、大学ではなく、ラント当局としての市評議会が罰するべきであると主張。学長の異議に係わらず、ゴールドシュミットは、2日後、市参事会によって、80金グルデンの罰金を課せられた⁷⁰⁾。

(Doktorvater) も大学に特有の慣行である。【発見】51頁、95頁。社会的な人間関係を親族関係に置き換えるのは、中世的である。

67) Ib., S.174. (Pennaliation)

68) Ib., S.175. (Novitiat)

69) Ib., S.175. (Balete) 現代のゼミやサークルの追いだしコンパのようなもので、飲酒や大騒ぎをすることがある。

70) Ib., S.175. (Duell)

(6) ペストによる講義への障害は、1389年から1559年の間、合計すると20年にもなり、その間講義は休止された。学生も教授も他の地へ逃げ出したからである。古くは、1451年に大きな流行がみられる。1501年にもある。その時には、精霊降臨祭から万聖節までの(約半年)で、1万6000人の市民が亡くなった。この数字は、前注6)のケルンの人口からすると、きわめて大きい。1564年には、全教授が市から逃げ出した。もっとも、イエズス会の神学校(Tricoronatum)は、講義を継続したと主張している。ペストにより、試験が早められたり、延期されたりすることもある。ペストの間、学生が他の地へ移動することもある。奨学生だと、ペストによる障害が支払いの条件に考慮されていないと、病気の終息を待たされることになる。奨学金には、ペストの間、他のカトリックの大学にいくことを許す例もあった(1577年のKempenの例)。

ペストが終息しても、それが関係者に伝わるには時間がかかる。通知はなかったからである。たとえば、1597年5月のペストでは、1598年5月になっても、全学生が帰還したわけではなかったが、この年の試験の延期はされていない。大規模なペストは、1623年、1630年、1665/7年にも生じている。原因は不明であるが、1710年から1753年の間も、入学者数は不明である(ただし、その前後の入学者数はほぼ200人を超えるから、記録の紛失の可能性もある)。

行政的措置も行われるようになり、1665年5月には、市の参事会は、大学の全講義の停止を命じている。11月には再開された。外国人の学生が退けられたり、感染したケルンの家からの外出が禁止された。この時には、医学部教授は、市に助言をし、1667年3月には、疫病の終息を証言している。そして、1668年12月には、市は、ペストがなくなったことを宣言した。証明書には、6人の医学部教授の署名がされている⁷¹⁾。

71) Ib., S.177. 中世の外科は床屋の領域であったが、内科は、医学部でも貢献できたのである。なお、人文主義の影響 Humanistische Bestrebungen については、S.183ff. 包括的な研究は、Rüegg, I, S.387ff., 395ff.; Mehl, Humanismus in Köln = Humanism in Cologne, 1991. (Studien zur Geschichte der Universität zu Köln; Bd. 10).

他の場所への大学の避難は、感染症などでしばしばみられ、ロシュトック大学のように、市と教会との対立から、1437年に、近在のグライフスヴァルトに移転する

IV 各学部と学位

1 学部構成

(1) 古いケルン大学 (Alte Universität) は、中世の標準の4学部であった（後述(2)）。これは、1798年に廃止されたから、現在のケルン大学は、第一次世界大戦後の1919年に、新たに設立された (Neue Universität)。19世紀中も設立の試みはあったが、成功しなかった。

1919年に、ケルン市議会の決定により、市立大学として設立されたのである。20世紀初めのケルンは、ハンブルクのような都市州ではないから、ラント・州立大学が通常の形態であるドイツの大学としては、やや異例である（戦後は、ノルトライン・ヴェストファーレン州立である）。当時の市長アデナウアー（戦後に首相）がプロイセン政府との間で設立契約を締結した。すでに存在した1901年の商科大学 (Handelshochschule) や1912年の地域大学、1904年の医学アカデミーを基にした。法学部や哲学部 (1920年)、数学・自然科学部 (1955年) などができたのは、その後である。

新大学は、20世紀の大学生の増加に伴って、現代的な視野の下で設立されたものである。ケルン大学の再建は、フランクフルト（マイン。1914年）、ハンブルク（1919年）とともに、第一次世界大戦後のワイマール期の3つの新しい都市型大学として位置づけられる。すなわち、商業や交通、産業の中心地におかれ、大都市の利益にもとづいていたのである。ちなみに、フランクフルト（マイン）大学も、市長のFranz Adickes（1846-1915）の強いイニシアチブで設立された。

学部構成は、現代風になっている。20世紀に設立された当時は、経済・社会

ことがあった。1487/88年にも、リューベックに移転している。【変容】444頁。他の大学でもあり、ハイデルベルク大学も、1567/83年はNeustadtに、1689/1700年には、フランクフルト（マイン）に移転した。

科学部、医学部、法学部、哲学部であり、伝統的な神学部がないのが特徴である。ドイツの大学では破格である。その後、数学・自然科学部、人文学部が設立された⁷²⁾。ドイツでも、ケルンと同時期に設立されたフランクフルト(マイン)大学やハンブルク大学には神学部がなく、社会科学部がおかれるというのは、ケルン大学と共通している。ちなみに、日本の大学は、宗教が意義を失った時代の産物であるから、神学部や哲学部はなく、ずっと小さい学科の扱いである(後注73)をも参照)。この点では、ドイツに先行している。

ケルン大学の学部は、現在でも以下のとおりである。また、近時の学生数と設立時である。

経済・社会科学部 (Wirtschafts- und Sozialwissenschaftliche Fakultät)
9070人 1919年

医学部 (Medizinische Fakultät) 3754人 1919年

法学部 (Rechtswissenschaftliche Fakultät) 5723人 1920年

哲学部 (Philosophische Fakultät) 13398人 1920年

72) ケルンの新大学(新大学 Die Neue Universität)の設立については、【歴史】xi。ケルン大学の設立は、第一次世界大戦後の進学率の高まりに答えるものであり、新しい大都市型の大学であった。大都市の利益にもとづいており、設立の主体となったのは、都市と市民であった。

また、同大学のHPをも参照。<https://www.uni-koeln.de> 学長の一覧もある。<https://portal.uni-koeln.de/universitaet/universitaet-auf-einen-blick/geschichte-archiv/rektoren-der-universitaet> 旧大学に関する前注9)をも参照。

1914年のフランクフルト(マイン)大学も、当初は信託型の大学として発足した。Hammerstein, Die Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt am Main : von der Stiftungsuniversität zur staatlichen Hochschule, 1989; Kluke, Die Stiftungsuniversität Frankfurt am Main, 1914-1932, 1972; Goethe-Universität Frankfurt am Main, 100 Jahre Rechtswissenschaft in Frankfurt, Erfahrungen, Herausforderungen, Erwartungen, 2014。ハンブルク大学の設立にあたって、学術財団が設立された。【変容】422頁。ハンブルクは、都市州であるから、ドイツの他の大学と同様に州立大学として設立が可能であった(ケルンとハンブルクは、1919年設立)。

数学・自然科学部（Mathematisch-Naturwissenschaftliche Fakultät） 9409人 1955年
 人文学部（Humanwissenschaftliche Fakultät） 9367人 2007年
 学生数総計は、50792人である。

（2）古いケルン大学は、中世の標準に従って、神学、法学、医学の3 専門学部と、学芸学部からなっていた⁷³⁾。どの学部を重視するかは、大学によって異なり、地域や設立者、設立時期によっても異なっている。中世の大学には、専門学部が1つしかない場合や1学部に教授が1人しかいない（1講座だけ）場合もあった。4学部の教授をそろえるのは、たいへんだったのである。

古いケルン大学は、法学を重視し、専門学部では、教員も学生も多かった。それに対し、医学部はいずれも少数であった。後者は、ドイツやアルプス以北の大学の特徴でもあり、イタリアの大学ほど実務家として医師は求められず、外科では床屋の方が重視されたからである。疾病にも呪術や占星術の方が重んじられた。後述のように、初期のケルン大学の医学部の学生は、ほぼ毎年一桁にすぎなかった。また、学部間の垣根が低かったことも、中世の特徴であるが、その中でも、医学部は他学部とはかなり距離がある。

学部ごとの相違や特徴はあるが、本稿では、法学部を中心に論じ、他の学部は、関係する限りでのみ言及するにとどめる。

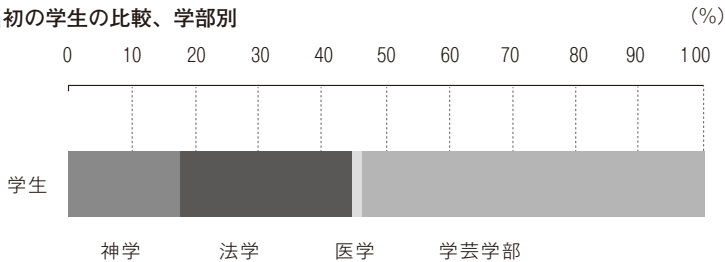
73) 前注9) 参照。日本では、人文系の雑多な科目を包含するのは、伝統的に文学部であるが、ヨーロッパでは、哲学部である。語学系の講座も哲学部におかれるが、日本では、ハーンも夏目漱石も文学部に属した。日本では、神学部とともに哲学部も凋落したのである。筒井康隆・文学部只野教授（1992年）のドイツ語訳では、哲学部となっている。S.Wundt (Übers.), Professor Tadano an der philosophischen Fakultät, 2011. フランス語訳は、意識で「特殊講義」となっている。Cotinet et Oku (trad.), Les Cours Particuliers du Professeur Tadano, 1997. 後者は「特殊なコース」としてやや別段の誤解を与える含みがある。あるいは、そうした誤解を与えた方が内容に即していると考えたのかもしれない。

2 法学部と学位

(1) 学生数からみると、ケルン大学で、法学部は、専門 3学部の中で、もっとも重要な学部であった。学芸学部を除くと、最大の学生数となる。1389年の最初の年に、神学部108人、医学部8人、学芸学部327人に対し、法学部は166人であった（この数字は、Eulenbergの合計数763人と一致しない。154人は所属不明ということである）。この状態は、15世紀の間維持された。神学部が最大となることの多い中世の初期の大学の中では、ケルンの特徴となっている。教員数も多く、学生166人に対し、11人であった。2人は、両法博士であり、4人は、カノン法、5人が世俗法であった。初期には、教員は、パリ、オルレアン⁽⁵⁾、ボローニア⁽³⁾で、学んでいたのである。そして、多くの者は、プラハ、ウィーン、ハイデルベルクの各大学で教えた経験があった。ローマ法、すなわち皇帝法を教える者が多かった。市の法律顧問の Hermann Stakelwegge von Kalkar も、ローマ法を教えた。著名なローマ法学者に、Heinrich von Odendorfがいる。彼は、オルレアンやウィーンでも教え、著述家として知られた。Heinrich Grimhart von Recklinghausenは、ボローニアで両法博士となり、法学部では最初の学長となった。法学部は、当初の輝きに対し、その後はしだいに停滞した⁷⁴⁾。

74) Keussen, S.229. 著名なOdendorfは、Odendorp (ca.1350-1400)ともいわれ、神学者であり法学者である。ケルン近郊の生まれで、両法の学士 (licentiatius utriusque juris) となった。カノン法の博士 (doctor decretorum) でもあった。その後、1383年ごろ、ウィーンにいき、学長にもなった。大学規則の作成をした。著作に、licentiatius utriusque jurisがある。1399年ごろから名前がみられなくなったことから、ペストで亡くなったものと考えられている。Schulte, von, Odendorp, Heinrich von, ADB 24 (1887), S. 146.

当初の学生の比較、学部別



(2) (a) 1398年に、法学部は、学則を定めた。中世らしく、勉学と学位のほかに、衣装と武器の携帯、詳細な行事についての規定が含まれている。得業士になろうとする者は、3年半、毎日2時間、講義を聴かなければならない。また、討論、復習、博士の祝賀行事に参加しなければならない。会食のような行事を資格の要件とするのは、近時では、イギリスの弁護士試験に残っていたもののみである。もっとも、会食時間に報告をしたり、討議等に参加することが主目的である。

カノン法では、週に2回、教令の講義を聴く義務がある。同じ規定が、パリ、オルレアン、ボローニア、パドア、モンペリエの大学にあり、ケルンはそれを受け継いだのである。得業士が他の法の資格をとろうとするときには、なお2年の勉学が必要となる。学士になるには、2年半の間、毎日2回、民法かカノン法の講義を聴かなければならない。試験の準備のためには8時間をかけなければならない。学位は、学部長や副学長から付与される。学部長に授与権がある場合も、近時の大学のように数が多いことによる場合もある。

こうした時間の設定の歴史は古い。かつて修道院では、1日4時間が勉学の時間であった。写字は、勤行の1つであり、読書についても定めがあった。本は全巻、読み飛ばさずに続けて読む必要があった。読書は、戒律の一部だったからである。聖堂付属学校でも規律の精神は続いた。これに対し、大学では、写字は、書物が希少な時代には、知識の集約にすぎず（抜き書きでよい）、読書でも読み飛ばすことに問題はなかった⁷⁵⁾。

75) サザーン・前掲書（注19）、150頁。ベネディクト会修道院の規則による。読書は、

(b) 法学部の学位の費用は、きわめて高価であり、16世紀には、祝賀の食事と衣装で60から70ターラーが必要であった。もっとも、他大学や他学部と大差があったわけではない。さらに、学部や学長補佐への支払や贈与もあった。博士の費用は、Hermann von Weinsberg によれば、総額300 から400 ターラーに達した。時代によっては、総額1000ターラーもかかる時があった。法学部第1位の教授(Primarius)へのマント、赤いバレット帽、指輪や鎖などの贈り物も必要であった⁷⁶⁾。中世には、学部の役職のほか、こうした肩書による利益があったのである。

(3) 学位の取得に多額の費用のかかるのは、他の大学でも同様である。以下は、チュービンゲン大学の例である。費用の詳細がわかるからである⁷⁷⁾。もっ

筋肉労働と同じく、骨が折れるように意図されていたのである。写字も同様で、それ自体に意味があったことから、手書本は、しばしば豪華に装飾され芸術品の域に達したのである(たとえば、ザンクト・ガーレン修道院図書館の手書本である)。これに反し、在俗聖職者の共同体、とくに大聖堂教会(参事会員)の学問活動は異なり、宗教的意図はずっと希薄であった。大聖堂付属学院の学問は、現世の実務に適合しなければならなかった。そして、修道院においてすら、貸し出された本は、神学よりも法学(おそらくカノン法)の方が多かったのである。ただし、クリュニー修道会などでは、礼拝や会合などの典礼の方がずっと忙しく、労働と学習を重んじるシトー会や托鉢修道会から批判された。

印刷術の発明によって、本の価格は写字本よりも安価となったが、モデルは写字本にあったから、なお美術的であり(たとえば、ゲーテンベルクの42行聖書)、Azoなどのテキストも依然として高価であった。現在でも、リプリント版はしばしば古書並みに高い。また、古い洋書がアメリカで網羅的に電子化されていても、オンデマンド版は、古書並みに高価である。中世の大学の授業が筆写を中心とすることは永く続いた。本が完全に消耗品となるのは、ペーパーバック化のときからである。

76) Ib., S.230. Primariusについては、後注80) 参照。

77) Finke, S.74f.

以下の一覧で登場するPedelle は辞書的には用務員、事務員であるが、むしろ事務をするBedelle に近いと思われる。この場合には、学長補佐である。フライブルク大学の研究であるが、Nauck, Das Pedellenamt und die Pedelle der Universität Freiburg i.Br. bis zum Anfang des 19.Jahrhunderts, in (hrsg. Bauer, Eckstein, Meier,

とも、これは大学に支払う正式な費用のみの計算であり、上記の祝賀用の衣装、祝賀会や会食、種々の贈り物などの費用は含まれていない。祝賀の儀式は、大学、ひいては大学を設置した諸侯の権威を高める効果を有したから、簡素化されることはなく、むしろしだいに増加するばかりであった。大学のメンバーも、初期には聖職者の服装をまねたが、しだいに貴族の服装をまねたのである。博士の場合であれば、以下の2法は、ローマ法とカノン法の両法博士（Iur.utr. Dr.）、を指し、1法は、そのいずれかである（Iur.civ.Dr.; Decr.Dr.）。

① 得業士（Bakkalaureat）の学位を得るには、学生は以下の費用を必要とした。得業士の肩書をえるには、法学部と神学部の聴講する講義にはあまり差がなかったようである。そこで、神学部教授には、カノン法の肩書をもつ例も多い（1437/38年のライプツヒ大学のJohannes Wünschelburgは、Theol.Prof. Iur.canon.Lic.で、神学部教授・カノン法学士。カノン法得業士の場合も多い）。大学の起源が神学にあったことの反映である。得業士には、Decr.Bacc.のほか、Leget Decr.Bacc.の肩書をもつ者もあり（1485年のHeinrich Greffeや1486年のJohannes Fabri）、これは、法学部の講座を余分に聴講していたことの反映で

Nauck, Rest) Aufsätze zur Freiburger Wissenschafts, und Universitätsgeschichte (Beiträge zur Freiburger Wissenschafts- und Universitätsgeschichte H.22), S.183. ただし、その地位は、大学によって必ずしも同じではない。フライブルク大学では、大学のPedellと学部(Pedell)があり、1460年から1840年の間に、合計で71人になり、36人は、大学のPedellである。1487年から1517年と1517年から1547年の間には、学部の補佐はいない（資料不足の可能性もある。Ib., S.193.）。

副補佐（Vizepedell）は、1487年に初めて出て（Gervasius Keller）、その後7人の副補佐がいる。これは、大学の祝賀行事で副笏を捧げるだけの補助職（学生）であった。学部の補佐も任期は、1年か2年である。他方、大学の補佐の任期はしだいに長くなり、最後のFriedrich Göringでは、1814年から1840年の26年間にもなった。30年前後の者もあり、6人は、終身であった（最長で51年）。任期の短い学長を実質的に代替していたとも考えられる。Grainus (1591-1637), Wackermann (1646-1675), Voggentantz (1686-1733), Praeg (1724-1775), Schauer (1782-1814), Göring (上述) は、個別に検討されている。Ib., S.193ff.

あろう（あるいは、学位をとった大学による肩書の表示方法の相違とも考えられる）。

	1法	2法 (Iur.utr.Bacc.)
学長に	5 シリング	5 シリング
大学金庫に	14 シリング	14 シリング
学部金庫に	2 グルデン	2 グルデン
司教座大聖堂に	2 グルデン	2 グルデン
試験官に	4 グルデン	8 グルデン
学長補佐に (Pedelle)	7 シリング	7 シリング
合計	8 フローリン 26 シリング	12 フローリン 26 シリング

司教座大聖堂 (kathedralia) このkathedraliaは、本来、学位の授与権をもつ聖堂主事ということである。

② 学士 (Lizenz) の学位には、以下の対価を必要とした。初等の資格である得業士に比してかなり高額である。

	1法	2 法 (Iur.utr.Lic.)
学長に	14 シリング	14 シリング
理事長に	1 グルデン	1 グルデン
大学金庫に	1 グルデン	1 グルデン
学部金庫に	2 グルデン	4 グルデン
試験官に	7 グルデン	14 グルデン (後代の公法では12グルデンとなった)
Promotorに	3 グルデン	4 グルデン
司教座大聖堂に	2 グルデン	4 グルデン
学長補佐に	14 シリング	1 グルデン
合計	17 フローリン	29 フローリン 14 シリング

さらに、学部規則により、菓子とワインを提供する。Promotorは学位を授与する教授である。19世紀以降の学位指導者（Doktorvater）に近いであろう。

③ Lizenz を有する場合の、博士の付与では、以下が追加される。また、ローマ法とカノン法の肩書は対等である必要はなかった。そこで、1436年のライプチヒ大学のArnold Westphalは、Decr.Dr. et Iur.civ.Lic.であった（カノン法博士・ローマ法学士）。学部が同一である必要もなく、1435年のMartin Sprembergは、Decr.Lic. et Theol.Bacc.（カノン法学士・神学得業士）である。

	1法	2 法 (Iur.utr.Dr.)
学部金庫に	1 グルデン	2 グルデン
司教座大聖堂に	2 グルデン	4 グルデン
学部の博士に	—	4 グルデン
学長補佐に	2 グルデン	2 グルデン
合計	5 フローリン	12 フローリン

さらに、祝賀会（Festmahl, prandium）を催し、そこで、ラント君主に仕える博士には、バレット帽（Barett）、他の博士にも手袋、修士には、よきもの（gute Qualität）など、学部規則による贈り物が必要であった。

④ Lizenzとともに、同時に博士を付与される場合には、もっと多額の費用が必要であった。また、こういう肩書が同時に付与されることは、当時のチュービンゲン大学では、学士と博士が必ずしも学習の段階を反映したものではなかったことを意味している。学習段階を反映するなら、大は小（高は低）を兼ねるからである。

学長に	14 シリング	14 シリング
理事長に	1 グルデン	1 グルデン
大学金庫に	1 グルデン	1 グルデン
学部金庫に	3 グルデン	6 グルデン

試験官に	7 グルデン	14 グルデン
司教座大聖堂に	4 グルデン	4 グルデン
Promotorに	2 グルデン	4 グルデン
学長補佐に	2 グルデン	3 グルデン
合計	20 フローリン 14 シリング	33 フローリン 14 シリング

この場合も、祝賀会、バレット帽、手袋などの記念品が必要となる⁷⁸⁾。

(4) 学部長の選挙は、毎年5月19日に行われた。これは、法律家のパトロンである聖イボの日である⁷⁹⁾。1479年に亡くなった Loppo von Zieriksee博士は、祝賀のための財団を遺言で残した。学長選のときと同様に、音楽つきのミサが行われる。そして、旧学部長の家で選挙がされる。聖イボの銀の彫像が、ろうそくに囲まれて置かれる。続いて、学長と学長補佐、学芸学部長が食事に呼ば

78) 名誉博士は、こうした出費の必要がないだけ有利なわけである。もっとも、その場合に、前注61)のような間接的な出費をも免れたかどうかは明らかではない。公費への出費は免れても、贈物の負担は免れなかったのではないと思われる。中世は贈与の社会だったからである。今日では、こうした目にみえない出費はないから、純粹に名誉だけとなる。

なお、中世の貨幣の単位は、一般的には、2/3Reichstaler=1 Gulden=15 Batzen=20 Groschen=30 Albus=60 Kreuzer=240 Pfennige=256 Heller となる。また、1グルデンは、30アルプスであるが、地域によって異なる単位が存在した。グルデンでもライン・グルデン、オランダ・ギルダーなど地域により異なる。シリングも時代と場所により内容は異なるが、ここでは、28シリングで1グルデンと思われる（1シリングで12ペニツヒ相当のkurzer Schilling。ほかに30ペニツヒ相当のlanger Schillingもあった）。フローリンは、イタリア（フィレンツェ）由来の金貨の名称で、グルデンの別称である。

79) 聖イボについては、教会法に関する独法106号20頁。イボには、ほかに、シャルトルのイボほかがあり、シャルトルのイボは、聖職者の叙任につき、俗権と教権を妥協させる理論を提唱した。その理論は、1122年、ウォルムス協約に採用され、叙任権闘争を終了させた。独法106号14頁。

ケルン大学の歴代の法学部長については、Keussen, S.445ff. 教授については、S.449ff.

れる。最後の者が、食前の祈りをする。選挙後に、前任者は、新学部長に、自分の任期中の計算書を提出する。古い儀式と新しい監査が並列されているところが、この時代の大学の特徴を示している。

1637年には、学部長の職をめぐって対立があった。1人は、Wischiус教授で、もう1人は、都市法律顧問の Theod.Sierstorfであった。決着がつかないことから、会議は、Gerw.Krepsを選出した。1710年にも争いがあった。学部の6人の聖職の博士は、Joh.Math.Stuirを学部長に選んだが、6人の世俗の教授は、Casp.Jos.Huigenを選んだ。学長と学部長たちは、後者に賛同したが、大学が聖職の影響下におかれることを望む教皇大使は、Stuirを支持した。教皇大使の影響によって、Huigenは、破門され、職権を行使できなくされた。しかし、皇帝の勅命で、争いはHuigenの有利に解決し、彼は、その後4年職務を継続した。しかし、この争いの間に、聖職の博士の所有物は破壊され、教皇大使の代理人は、市から追い出された。

学部長のほかに、法学部第1位の教授（Primarius）は、1549年から、学部で特殊な地位を有している。彼は、他の教授よりも高い給与をもらい、学位授与式では、大きな臨時収入をえることができる。この肩書は、19世紀まで存続し、意味を有した⁸⁰⁾。

80) Keussen, S.231f. 法学部第1位の講座、その担当者である第1位の教授については、【歴史】5頁。マールブルク大学では、7頁、104頁。マールブルク大学の137 Heistermann (1538-1568) は、1567年に、122 Oldendorp (1487-1567) が亡くなった後、法学部第1位の教授（Professor Primarius）となったが、1568年に亡くなった。(122) Oldendorp は、1540年からマールブルク大学に在るが、先任の121 Brechterが、1540年までしか在籍しなかったため、20年以上も法学部第1位の教授の地位にあったのである。人名前の数字は、Gundlach, Franz (bearb.), Catalogus Professorum Academiae Marburgensis, Bd. 1: 1527-1910, 1927による整理番号である。

マールブルク大学の法学部「第1位の教授」の最後のタイトル保持者は、国法学者の(189) ローベルト（Robert）であり、彼は、1833年に死亡する時まで、このタイトルを保持した。他大学でも、1840年代まで、このタイトルは意味をもっている。また、エルランゲン大学の著名なローマ法学者グリュックは、1786年に、第4位の教授、1787年に、第3位、1792年に第2位となり、1809年に第1位の教授となっている。

(5) ケルン大学では、必要な法学の講座の財政的基礎は、最初から都市に依存していた。1517年に、節約の観点から都市の教授職の削減が行われた。聖職禄の教授職を期待してのものであった。しかし、前述したように、新たな聖職禄は、獲得できなかった。

ケルン大学におけるカノン法の軽視は、16世紀中ばにみられる。Adolph Eichholz が教令の講義をしたときに、聴講者がいなかったのである。そこで、理事会は、彼に、かつてしたことのある法学提要の講義を再度行わせた。その結果、1611年には、教皇大使は、講座の改革を主張し、ケルン大学でカノン法が教えられていない、との不満を述べている。ケルンでは、世俗的な実学に人気があったのである。

中世初期には、教会法は、裁判の源泉であり、教会裁判は絶対的な権威を有した。中世の素朴な社会には、自給自足の農業社会のための教会法で足りたのである。教会法は、産業の発展に必要な金融と利息を暴利として否定していた。しかし、都市社会が発展すると、教会法では足りない。古い教会法は、都市の職業組織や商業取引、契約を規律する基準をもたなかった。そこで、古代の法典が修道院の書庫から発掘され、ローマ法に基礎をおく法律が意味をもったのである。聖職者の立法者や裁判官としての地位も失われた。さらに、都市の形成は、文化と思想に携わる者を生み出し、聖職者の文化独占も打ち破られた。法学も哲学も、神学と対等に競合するものとなった。ローマ法の優越は、時代の趨勢にすぎない。もっとも、カノン法自体が、しだいにローマ法の領域に進出してこれを包摂し拡大した。ケルン大学のカノン法の対象は、古い伝統に忠実に狭かったのであろう（後注85）、(6)(b)をも参照）。

特殊な講義が、時に行われている。1587年には、聴講者の多いパンデクテンの講義を、イタリア人のSalicetus がしている。改宗者のHelfrich Ulrich

Wittern, aa.O.(前注15)), S.118. 第1位の教授になるまで、23年もかかっているのである。この制度は、高名な教授が短期で他の大学に移転するのを防止する機能を有した。他方、第1位の者がいる限り、第2位の者の昇進は望めないから、他大学への若手の移転を促進することになる。ミュンヘン大学でも、1847年に、第1位の教授の肩書がみられる。128頁の図2の文献Huber, S.592ff.

Hunnius (1583.3.27-1636.3.27) は、1632年から36年の間、カノン法の講義をしている。彼は、1583年に、マールブルクで生まれ、改宗前に、ヴィッテンベルクとギーセンで教えていた。Hermann Hermes (1605-1680) は、1605年にケルンで生まれ、1620年からケルン大学で法律学を学んだ（学位も取得）。設立されたザルツブルク大学に、1652年に招聘された。そこで、彼は、第1位の教授となり、勅法集を教えた。彼は、1680年に死亡するまで、ザルツブルクにとどまったが、一生ケルンの市民権を保持した⁸¹⁾。

上記のHunniusは、1583年に、マールブルクで生まれ、ヴィッテンベルク大学で法律学を学び、1609年に学位をえた。1613年にギーセン大学の教授。ヘッセン・ダルムシュタットの顧問官。1625年に、マールブルク大学の副理事長。1630年に、カトリックに改宗。1630年に、トリアー選帝侯国の大臣、1632年にケルン大学教授となった。専門は、教会法である。父Aegidius Hunnius, 兄弟 Nikolaus Hunniusとも、著名な神学者である。

(6) (a) 17世紀から、私講師が学部でみられるようになった。これは、科目の多様化をうけてのものである。1637年に、学長は、授業資格を認めた学士を任じた (Douai)。その者が戦争のために祖国をあてにできなくなったからである。1660年には、法律の資格者が復習講義をするときに、学芸学部が部屋を貸している。部屋を貸して賃料をとった別の例もある。

1711 年にも、教皇大使Bussi は、4 学部に対し、法学の勉学の改革を提案したが、実現されなかった。おもな原因は、教授職の配置が明確でなかったから

81) Keussen, S.232f. Hunniusについては、Stintzing/Landsberg, Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, Abt. 1, 1880, 700; Stintzing, Roderich von, Hunnius, Helfrich Ulrich, ADB 13 (1881), S. 418f. 著作は多い。Collegii Institutionum..., 1609; De interpretatione et auctoritate iuris, 1615; Resolutionen, 1617; Collegium criminale, 1621; Collegii iuris canonici..., 1628; Resolutio iuridica trium quaestionum praeiudicialium, 1631; Duodecim proeiudicia et responsa Lutheranorum et Calvinistarum de bonorum ecclesiasticorum restitution, 1633などがある。

Hermesについて、vgl.Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 1, Reichspublizistik und Policeywissenschaft 1600-1800, 1988, 249.

である。医学部では、外部の医師を呼ぶことが認められていた。法学部では、ケルンで学位をえた博士を優先していた。しかし、学位に伴う費用が高かったことから、適合した者は、必ずしもみつからなかった。正教授がいないことはしばしばであったから、費用のかかる資格を短期間に学士に与えることが必要になったのである。

(b) 教皇大使がたびたび大学改革を示唆するのは、神学教育への誘導の意図からである。学生が実利に流れるのは、現在と同じである。そのために、教会は、法学教育の縮小をも意図していた。著名なスペル・スペクトラムは、教皇ホノリウス3世が、パリにおけるローマ法教育を禁止したものである(1220年)。神学の維持のために、ローマ法教育を禁止したものである⁸²⁾。

しかし、16世紀、17世紀には、制限は、ローマ法教育のみならず、カノン法教育にも広がった⁸³⁾(カノン法は、神学ではなく法学の一分野である)。実利志向や、神学の衰退を目の当たりにしたときには、法学全体への反感が聖職者の間に強まったからである。学生が法曹の倫理教育よりも実利教育に流れる問題は、今日にも共通している。また、プロテスタントの大学では、当初、カノン法とは排斥されるべき教皇の法を意味した。ラントの官吏の宗教管理のための科目として復権するには時間がかかった。逆に、イエズス会系の大学でも、世俗法、とくに民法の教授を招聘しないことが生じたのである。ケルン大学では宗教による対立が顕著であった。

法学の禁止の実効性は疑問であり、教皇の中にも、神学よりもカノン法の方に詳しい者が多かったのである。カネヘムによれば、多数の教皇は、大学卒業生であり、とくに大立法者たる教皇は、法学の学位をえて、カノン法に精通していた。法学の資格者は、国王に対してはその補助者にしかなくとも、教会では、みずからが長となれたのである⁸⁴⁾。教皇は、近代国家では国王に近い。

82) スペル・スペクトラムの意図を、教皇の皇帝に対する対立を軸とするか、フランス王権のドイツ皇帝権に対する対立を軸とするかについては、解釈が分かれる。淵倫彦「教勅スペル・スペクトラム」久保正幡先生還暦記念・西洋法制史料選(1978年)128頁。

83) Rüegg, II, S.479.

広義のカノン法は神学ではなく、教会の実務を支えるものであった。教会法の中身も、時代により変動している。中世初期の素朴な教会法とは異なり、ローマ法を吸収し、ローマ法に準じるものとなった。大学の講義でも、当初は教令集の講義に過ぎなかったが⁸⁵⁾、教会の実務を支えるものに拡大した。もともと、教会や修道院は、中世の社会では重要な営造物であり、多面的な経済的機能を有した。ビールやチーズの製造、聖遺物や巡礼による観光、封建領主としての土地支配、病院、養育院や養老院、墓地の運営、遺言の管理。遺贈・寄贈物の管理。利息の徴収や定期金売買による安全な財産の逃避所の提供などである。教会は、世俗の者には禁じた利息の徴収をみずからは行ったからである（日本の封建法でも、寺社の行う祠堂金貸付には、特別の高利と回収の保護が与えられた）。

目にみえないところに大きな活動があった。贖宥状や官職・聖職禄の売買は、元手のいらぬ利得の方法であった。魂の救済が商品になる点では、中世は、近代以上に資本主義的である。また、教会のネットワークは、ヨーロッパをカバーする情報機能を有した。出生簿（死亡も含む）や婚姻簿は、教会によって管理されていたし、フランス革命時まで民事婚は存在しなかったから、宗教婚を管理する教会は、実質的に、国家の機能の一部も担っていたのである⁸⁶⁾。そ

84) カネヘム・裁判官・立法者・大学教授（1990年、小山貞夫訳）116頁。原題は *Caenehem, Judges, Legislators and Professors: Chapters in European Legal History, 1987*。法学では、カノン法のみを教えたことから、独立した法学部のない場合には、カノン法学者は神学部や学芸学部にも属することもあった（ライプツヒヒ大学）。ウィーン大学でも、初期の学長は、圧倒的にカノン法学者と神学者で占められている。法律では、カノン法のみともいえる。まれに医学部の出身者がおり、学芸学部の者はいない。当初法学部は、カノン法の学部と呼ばれていた（*Facultät des canonischen Rechts*）。世俗のローマ法は、独立した法学校で教えられていたのである。Vgl. Aschbach, *Geschichte der Wiener Universität im ersten Jahrhunderte ihres Bestehens: Festschrift zu ihrer Fünfhundertjährigen Gründungsfeier* von Joseph Aschbach, 1865, S.302ff.

85) 狭義のものは、GratianあるいはDekretと称された。ハイデルベルク大学について、【歴史】191頁、223頁参照。

れに応じて、中世後期のカノン法は、世俗法をも包含する体系であり、教会裁判所の裁判管轄も広大であった（カノン法の世俗化）。12世紀のローマ法の再発見まで、カノン法は、それ自体で、社会を運営することもできる体系であった（イタリアとアルプス以北では教会の経済的活動に差異があり、それにに応じてカノン法の対象にも差が生じたであろう）が、それ以降は、ローマ法の成果を取り入れたのである。ローマ法とカノン法が接近した結果、両者を修めることが容易になり、両法博士（Iur.utr.Dr.）が誕生しやすくなったのである。

社会がさらに進展すると、教会以外にも、官僚国家や巨大な組織、会社、学校などが登場する。その場合には、教会の運営を離れた組織運営の技術が必要となり、ローマ法にはそれが求められたのである。ローマ法は、民商法のほか、経済や社会学の揺籃地であったからである。今日の大学で、「法学部はつぶしがきく」といわれるのと似ている。しかも、当時の学生は、自分の勉学が市場価値をもつことを知っていたのである（前述）。主たる関心が、神学からカノン法、ついでローマ法に移動することは避けられない。

(7) 1728年に、近在のアーヘンの Maeß が、民法と教会法を教え、博士の学位を与えることのできる学校を開校しようとしているとのうわさで、ケルン大学は揺れた。ブリュッセルの教皇大使は、ケルンの教皇大使に、ルーヴァン大学がこの競合に反対し、ケルン大学も同調するように望んでいる旨を通知した。アーヘンは、ルーヴァンとケルンの中間に位置するからである。ケルンも同様の決定をし、ブリュッセルの教皇大使は、ウィーンにも働きかけた。Maeßが、皇帝Leopold の古い卒業資格の縁に頼っていたからである。しかし、同年、Maeßが死亡したことによって、事は沙汰止みとなった。この事件は、学校間の競争が激しかったことを意味している。

1673年には、大学は、カトリックの法学生は、信仰告白なしに入学を認められるか、学籍簿に登録できるかという問題に揺れた。そして、信仰あるカトリッ

86) 民事婚の許容や、出生簿、婚姻簿などの国家への回収は、フランス革命時にまでもち越された。独法118号54頁。【変容】v頁。中世の大学もかなり多様な機能を果たしていたが（前注29）、教会はその比ではない。

ク教徒に危険を与えないように、いずれも否定するべきものとされた。この問題は、他の宗教に対するカトリックの特権を放棄することにも、認めることにも関係しないとされた。大学は、宗教問題に立ち入りたくなかったのであろう。

本質的な対立は、1788年に新設のボン大学との間で生じた。ケルンの Laurenz 修道院の Froitzheim は、博士論文をケルン大学の法学部に提出した。法学部の教授は、試験 (inconvenientiae、不適合) をして、学位を認定しなかった。これに対し、Froitzheim は、ボン大学から博士の学位をうけた。その後、彼は、ケルンの特別法に関する講義を、ケルンで行うことを予告した。ケルン大学の法学部は、彼に資格がないとして、これに異議を唱えた。ケルン選帝侯の顧問官 de Meex は、Froitzheim の講義の許可を要求した。対抗措置の威嚇があったが、Froitzheim に反対する決議がされ、要求に答えることはなかった。

1789 年に、Froitzheim が大司教の宮廷のアセソールとして、枢機卿会議の訴訟実務に関する私的講義をすることに関し、ボンとの手紙のやりとりがあった。大司教に対するメモで、ケルン大学は、反対を表明し、Froitzheim は教えることができないのではないかと質問をした。反対の意思は、ケルン大学のボン大学に対する優越を新聞に述べたことにとどめられた。大司教を刺激しないようにとの考慮から、それ以上のこと（回答）は放置されたのである⁸⁷⁾。

(8) 欠陥のある者もいたが、学部には、特色があり、学問的に有能で名誉のある人材も豊富であったとされる。若干の名前をあげれば、15世紀のカノニスト Loppo von Zieriksee、および、盲目の文筆家 Nikasius von Voerda、16世紀には、カノニストの Adolf Eicholtz、エラスムスの友人で著名な法学者 Johann von Oldendorp などである。もっとも、後者は、そのプロテスタントの信条で、ケルン大学にとどまることはできなかった。また、イタリアで学位をえて、その鑑定が著名であった Andreas Gail もいる。17世紀には、古代研究の Stefan Broelman、少しあとには、Friedrich Wischius がいた。18世紀には、文筆家の法律顧問 Ernst Hamm がおり、彼は、学部長となり、1761年には、選帝侯の Max Friedrich にも仕えた。聖堂参事会員の Franz Karl Josef von

87) Keussen, S.234ff. 大司教は、自分の創設したボン大学に力を入れるのである。

Hillesheimは、外交に貢献した。18世紀末の講義要綱は、ケルンで教育をうけようとする法学生には、豊富な可能性が開かれていたことを物語っている⁸⁸⁾。

前記のAndreas Gail (1526.11.12-1587.12.11) は、1526年に、ケルンで名門市民の家に生まれた。ケルン、オルレアン、ルーヴェンの各大学で法律学を学び、1555年に、ポローニア大学で学位。ケルンで弁護士になった。1558年、シュバイヤーのライヒ帝室裁判所の陪席。1566年に、アウグスブルクのライヒ議会に出席。トリアーの大司教Johann von der Leydenの顧問であった。1569年に、ライヒ宮廷顧問会議の顧問、1583年に、ケルンの大聖堂参事会主事(Kanzler Erzstift)。1587年に、ケルンで亡くなった。官房学者であった。著作に、Practicarum observationum libri duo, 1578がある。

3 法律学校(Juristenschule)と付属施設

(1) 法律学校は、最初 Waidmarktに設立された。それは、他領域の勉学活動と別に建てられたわけではない。おそらく、市が一時的に貸したのと同じ建物にあったのであろう。いずれにせよ、すでに1401年に、学校は、のちに存在した場所で確認されている。それは、Vogelstrasseの市の建物 Frechenの中にあった。法学校(Rechtsschule)とも呼ばれた。法律の講義の一部がここで行われていたからである。

DwergとVorburgの大きな財団の施設は、1430年より後の時期に、市に帰属し、15人の奨学生と学長の宿泊を可能とした。法律学校に改築の機会も与えた⁸⁹⁾。両財団が結合された効果である。

88) Keussen, S.237. つまり、大学の中味がだめで廃止になったのではないということである。しかし、全体として、ケルン大学は啓蒙の精神による刷新に失敗し衰退したのである(エルフルト大学も同様)。

Gailについては、Vgl. DBE 3 (1996), 558; Kleinheyder/Schröder, Deutsche und Europäische Juristen aus neun Jahrhunderten, 1996, S.477; Döhring, Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, 395; Stintzing/Landsberg Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, Abt. 1, 1880, 495; Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, 1. Bd., Reichspublizistik und Policeywissenschaft 1600-1800, 1988, 128.

89) Keussen, S.237f.

(2) 法律学校の前の表の建物は、王冠寮（Kronenburse）と呼ばれ、2つの財団の奨学生の利用に用いられていた。その名前は、破風に付された3つの王冠に由来する。王冠は、市の財産を象徴している（ケルン大聖堂には、キリスト誕生時の東方3博士の聖遺物があり、3王冠は大学の紋章にも残されている。マタイ2章1-12。講義要綱Vorlesungsverzeichnisにもある）。寮は、下の階に、広間、キッチン、学長の住居となる小部屋を有する。教員が学寮に住み込むことは、イギリスのカレッジの寮と同じである。他の教員がどの程度同居していたのかは不明である。上の階には、大広間、図書室がある。図書室は、1449年に言及されており、1580年には、寄付によって、より豊富にされた。1592年には、Laurentia ギムナジウムの重複本の移管によって、増加されている。1594年にも、大聖堂首席判事、宮廷裁判官のLic.Konr.Gerkingの本の遺贈が加わった。

図書室の内部施設は、1598年の財産目録から知ることができる。東壁には、二重の台架があり、そこに33冊の本がおかれている。広間にも、二重の台架が3つあり、それぞれ37冊、38冊、37冊の本がある。通路の後ろの壁にも、台架があり、23冊がおかれている。この先に、机があり、その上には、本と冊子がある。一部の本は、中世の方法に従い、鎖でつないであった。

図書室の上の部屋が奨学生の部屋である。後代には、教会禄の受給者のほばすべてが、ストーブをもち、食堂にも、大きなストーブがおかれていた。理事会は、建物の修理の義務をおった。そこで、1507年には、ガラス窓の修理が行われた。道路から直接キッチンに入ることができた。しかし、この通路は、学長とその使用人によって阻まれていた。学生は、他の入口を利用したのである。建物の経済は、他の大学の寄宿舎やギムナジウムと同様に営まれていた。建物には、1492年に、麦芽を挽くために挽き臼があり、自己使用に用いられていた⁹⁰⁾。

(3) そのほかに、以下の財団があり、奨学生の援助をしていた。

(a) まず、Herm.Dwerglは、コンスタンツ公会議の時に、皇帝のプロクラトル（法廷の皇帝代理）であった。新たに選出された教皇マルチネス5世に信

90) Ib., S.239. (Kronenburse) 中世では、挽き臼の所有は市町村によって規制されたから、その設置と使用は大学の特権でもあった。

頼され、多くの教会禄と富を与えられた。若年期にケルンと関係が深く、1409年に、St. Severin 教会禄をえて、不入権のある教会の住居に住んだ。のちには、ケルン市と関係があり、大司教の代理として、教皇庁に出仕した。1430年の遺言で、彼は、出身地のHerford とケルンに遺贈したのである。いずれの町にも、教育の財団を作った。遺言によると、ケルンの財団には、6000グルデンが残された。その利息で、12人の学生と施設長が生活できた。学生は、Herford, Deventer、ケルン、リエージュ、リユーベック、プレスラウの6市の出身とされた。候補者が不足するときだけ、他の場所の出身者が認められた⁹¹⁾。

(b) また、Dwerg は、ケルン大学とそう密接な関係があるわけではないが、Joh. von Vorburg は、密接に関係している。彼は、1392年に、教会法の博士としてケルン大学に来了。そして、正教授となり、1431年に亡くなるまで教えた。3回学長となり、副学長を1回、学部長を数回している。教会裁判所の弁護士もした。大学の代表として、コンスタンツ公会議にも出席した。のちには、教皇マルチネス5世への使節ともなっている。死亡する年に、法律の貧しい学生3人に、奨学金を残した。候補者は、15歳から25歳の間で、十分な基礎教育を終えていて、自分の収入が、年額25ライン・グルデンを超えてはならないとの要件がある。財団の基金は、ケルンの家々からの賃料であり、それぞれ20グルデンとなった。候補者の選定は、学部長と大学の臨時管理者に委ねられた。図書なども遺贈された⁹²⁾。

(c) さらに、15世紀のケルン大学の法学部でもっとも代表的な者として、Loppo Walingi von Zieriksee がいる。彼は、貧しいオランダの家庭の出身で、名声ある身分に上ったのである。1437年には、Burssa Corneli Ⅱの従者となり、1441年に、学芸の学士となり、王冠寮の学禄をえて、勉学を継続できた。1456

91) Ib., S.241f. (Stiftung Dwerg)

92) Ib., S.261f. (Stiftung Vorburg), S.450 (13Joh. de Vorburg, dr. decr. その給与は市の支払いであった)。なお、Johann Philipp von Vorburg (1600-1660) は、マインツ選帝侯の枢密顧問官であった。著作に、Encyclopaedia juris publici privatique civilis criminalis feudalis 1640がある。Vgl. Stolleis, Geschichte des öffentlichen Rechts in Deutschland, Bd. 1, 1988, 153. 関係は、不明である。

年に、両法の博士となった。学究肌の学者で、学部において名誉職にはつかなかった。妥協しない性質を有した。法学部とケルン市参事会との教授職をめぐる争いでは、学部の代弁者となった。

彼は、ローマ通りの東端の市壁のところに家をもっていた（Spanheim）。彼は、これを1458年に、6年間の約束の下、毎年18ライン・グルデンで借りた。1467年に、彼は、家の一部を取得し、ここで、知人や学生と住んだ。彼の死亡後、家に残りたい者のために、彼は、1466年に、遺贈をした。彼は、1472年に、法学部にその家の権利を遺贈した。2人の学生が1部屋を用い、他の者は、部屋や教育のために支払う必要があった。学長は、講義に使用しない時間、討議や演習に使うこともできた。1549年の記録では、ローマ法提要の講義に割り当てられている⁹³⁾。

(4) Hermanns von Weinsbergによれば、法律同業団（Collegium juridicum）は、もともと学生の自由な主導によって生じた。日曜日の夕方に集まり、前の日曜日に提示されたテーマについて、議論したり答えたりするものであった。司会役は、団長（Diktator）がする。団長は、ケルン大学に入学し、学位をえた者でなければならない。財政は、市の国庫によった。団長と国庫の職は恒常的なものではなく、法的な素材と封建法の最後のテーゼが議論されたときには、消滅した。

18世紀の初めに法学の勉強が衰えたことから、法律同業団でも、公開の討論（Defensiones publicae）は行われなくなった。行われるのは、市長、臨時管理者、議決団長（Stimmeister）、法律顧問などの官職にある者が呼ばれる月2回の会合だけとなった。当時は、団長や国庫の役を帯びた教授が出るだけであった。それは、学部の正式な組織となったのである。1721年には、法学部の講堂で開催された⁹⁴⁾。この法律同業団が、中世の大学のもつ判決団とどのような関係に立っていたのかは、明確ではない。

(5) (a) 中世の大学には、判決団（Spruchkollegium）が備わっているが、ケ

93) Ib., S.264f. (Haus Spanheim, Stiftung Loppo von Zieriksee)

94) Ib., S.266f. (Collegium juridicum)

ルンについては、あまり明確ではない。判決団は、裁判所や都市の諮問をうけて、事件の鑑定をしたり、判決を出す機能を有し、大学の法学部がこれに携わった。かねてグライフスヴァルト大学のそれを検討したことがあるが⁹⁵⁾、大学による相違もある。以下では、他の例として、キール大学のそれによると、そこでも19世紀まで行われていた⁹⁶⁾。とくに大北方戦争の間(1700-1721)、軍の移動に遭遇した都市からキールに送付された事件に関する書類送付(Aktenversendung)が多いとされる。1714年夏から1716年夏までの2年間に、96以上のものがある。しかし、記録の欠けている年代もあり、全体を見通すことはむずかしい。

作業に係わった者の数は、変動しており、多くの場合には、3人であるが、2人の時期も長い。キール大学は、小規模大学だったからである。1714年から7年間は、講義にも判決作業にも教授は1人しかいなかった(Vogt)。1724/25年も、Harpprechtが1人だけであった。もっと多数の教授がいても、病気や老衰で、1人しか活動できないこともあった。複数の者によって作成された限り、その場合には共通の審議によったものとされた。作成の具体的プロセスも明らかではない。上記(4)の法律同業団は、公開の団体であるが、類似の団体で非公開のものもあったはずであり、それが補助をしていたことも推察できる。アメリカの弁護士事務所のアソシエートが最初に与えられる検索や調査案件のようなものは、法律の基礎教養に属するものであり、実務にとりかかるきっかけとなるからである。ローマ法継受の時期に、ローマ法法文の検索や、キール法や周辺法の調査は、重要な第一歩となる。法律家の経歴には、しばしば若年時に判決団に属したことが記載されている。

判決は、キールのあるシュレスヴィッヒ・ホルシュタインのみでなく、北ドイツ地域からも依頼された。ハンザ都市やフリースラント、メクレンブルク、リューネブルクやザクセンに及ぶこともあった。しかし、南ドイツやラインラ

95) 【歴史】252頁。Keussenには、ほとんど言及しない。判決団については、ロシュトック大学の判決団について、その対象に即して実証的な検討を予定している。

96) Döhring, Geschichte der juristischen Fakultät 1665-1965, (Geschichte der Christian-Albrechts-Universität Kiel 1665-1965, Bd.3, Teil 1), 1965, S.49ff.

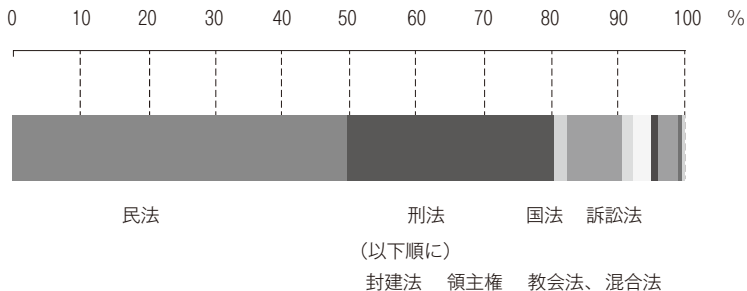
ントには及ばなかった。ラント君主の裁判権の範囲よりもはるかに広がったのである。依頼者の範囲は、通常は狭く、たとえば、Preetzの修道院裁判所（Klostergericht）が、つねにキールに事件を送付していた。こうした場合は、密接な関係から、それに関する学部活動も持続的に行われた⁹⁷⁾。費用などは不明であるが、上得意先であったということであろう。

判決団には、鑑定を行うべき厳密な義務はなかった。キールでは、こうした拒絶は、あまりみられないが、その場合には、送付された書類を未決のまま

97) Ib., S.50f. 教授の数が限定されている中で、かなりの数と思われる判決を作成することはかなり困難であったであろう。講義との関連付けや実務家、補助者との関連などが残された問題である。

ロシュトック大学の判決団については、組織的な検討が行われていることから、その実証的な研究は別稿で扱う予定である。Vgl. Mischok, Die Spruchstätigkeit der Juristischen Fakultät Rostock zwischen Sommersemester 1722 und Wintersemester 1759/60, 2018. 事件処理の方法（判決か意見の説示か）、どこから要請されたか、要請された裁判所の種別、要請のあった地域、どの法領域の事件か、判決の作成者、作成の手続き、作成の期間などの検討が必要である。以下では、対象領域にのみふれる。Mischok, S.127., S.129. 18世紀の前半では、まだ刑法の割合が比較的高い。

事件の対象領域

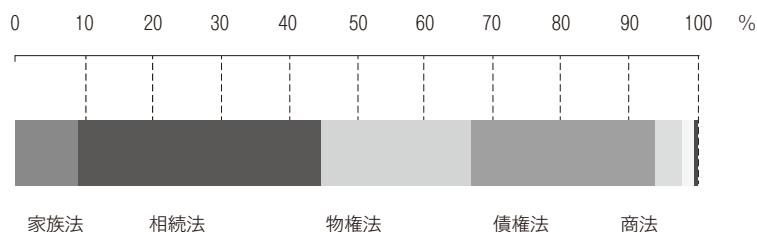


さらに、民法の内訳である。家族法と相続法で、45%である。物権法が多いのは、中世的である。この3つで、ほぼ7割となる。リューベックやハンブルクといったハンザ都市からの事件が含まれているが、商法は4%にすぎない。債権法をあわせても30%にとどまる。

(übersandte Akten unerledigt) 返還するのである。短い理由が付される。また、キール公や宮廷の人間関係に関することで、拒絶することもできた。1687年には、ハンブルクの商人の相続人が前理事長の息子との争いの鑑定を求めた事件の送付がある。理事長は、1665年からキール公の名前(代理)で、大学の最高学長(Rektor magnificensissimus)だったからである。こうした拒絶は、除斥や忌避という趣旨であろう。もっとも、判決団の判決には、直接の強制力はなかった(作成された原文のままの状態で判決を下すのは、委託した裁判所である)。また、裁判所の要請で鑑定が行われたときに、判決団が判決理由を当事者に知らせることもなかった⁹⁸⁾。判決理由を示さないのは、中世では通常であり、ライヒ帝室裁判所でも同様であった。判決団の関与件数が多く、書類の作成が困難だったこともあろう(日本の最高裁の1行判決と似ている)。

古くは、刑事事件の鑑定が大きな部分を占めた。しかし、しだいに、民事の紛争が増加し、18世紀の後半には、刑事事件の割合はいちじるしく減少した。キールの民事事件では、債権法の訴えがもっとも多く、相続と家族事件も多数を占めた。しかし、現在の公法的分野の事件もよくみられた。キールの判決団は、17、18世紀には、社会的な変動にも関与したのである⁹⁹⁾。

(b) キールでは、18世紀になっても、判決団の活動にあまり変化はなかった。事件は、従来と変わらず、シュレスヴィッヒ・ホルシュタイン内だけでは



98) Döhring, aa.O. (前注96)), S.51f. 判決団の具体的な活動についても、前注97)の別稿による。

99) Ib., S.59f. 刑事事件には、魔女裁判のような迷信事件も含まれた。判決団と魔女裁判については、判決団に関する別稿による。

なく、他の地域（とくにハンブルク、ブレーメン、フリースラント、リューネブルクである。さらに、メクレンブルク、ベルギー、ポメラニア、一部は、ブランデンブルクやチューリンゲン）からも依頼は来た。もっとも、その数は、19世紀には、いちじるしく減少し、1800年から1810年には、年に平均して25件程度になり、その後は、もっと減少した。とくに、刑事事件は、18世紀にはかなりあったのが、しだいに稀になった。

判決団の構成も変わり、1777年の規則では、会長は、毎年交代する学部長ではなく、終身権のある正教授となった。これによって適性のある者が就任し、責任をもつようになった。そして、学部長が組織から離れることから、会長は、その後、他の学部のメンバーの下で陪席となることはなく、他の陪席に強い指導力を発揮することができた。ただし、会長の力が強すぎる危険（Alleinherrschaft）から、従来の構成をとった他の法学部とは異なり、会長には他のメンバーの書いた判決を修正する権利（Revision）は、認められなかった¹⁰⁰⁾。

審議録（Berathungsprotokolle）は、おおむね定型的であるが、そこからは、報告者（Referent）が自分の見解を判決団で賛同をえられず、反対投票をうけることもあり、団体の一致がおおむね重視されていることが読み取られる。多数のメンバーで判決団が構成されるときには、共同の審議が行われている。とくに、陪席の全員の署名が必要であった。判決団のアセソールの用いられることが明らかにされ、調査官のような位置を占めていたと考えられる。他方で、Cramer, Falck, Planckといった実力者は、手堅い協力をして、判決団が表面的なルーティンの作業に陥ることを防止していた¹⁰¹⁾。彼らは、かなり遅い時期の法律家であり、判決団の作業が長く続いたことを示している。

(c) 以下では、キール大学の著名な教授を若干検討する。判決団に係わっていたものと推測できるからである。

100) Döhring, a.a.O. (前注96)), S.149ff. グライフスヴァルトでは、判決団の記録は学部長の管理となっているから、必ずしもこうした分離は行われなかったのであろう。

どのくらいの法学部で判決団の独自性が発揮されたのかは不明である。

101) Döhring, a.a.O., S.151f.

(i) クラマー (Andreas Wilhelm Cramer, 1760.12.24-1833.1.23) は、1760年にコペンハーゲンで生まれた。キール、ライプツヒの両大学で法学を学び、1785年に、キール大学で学位。1792年に、キール大学の員外教授、1792年に正教授となった。1833年に、キールで亡くなった。専門は、ローマ法と法史である。業績は、Vespasianus, 1785; Disputationum iuris civilis liber singularis, 1792ほか多数あるが、省略する¹⁰²⁾。

(ii) ファルク (Niels Nikolaus Falck, 1784.11.25-1850.5.11) は、1784年、シュレスヴィッヒのEmmerlei で生まれた。キール大学で法学を学び、1809年に、コペンハーゲンで公務員。1815年に、キール大学の正教授となった。1835年に、シュレスヴィッヒ・ホルシュタインの身分制議会の議員、1836年に、キール上級控訴裁判所判事、1838年に、上記議会の議長。1848年に、制憲議会の議員。1850年に、キールで亡くなった。著作は、Das Herzogtum Schleswig in seinem gegenwärtigen Verhältnisse zu dem Königreich Dänemark und dem Herzogtum Holstein, 1816; Über das Wesen und die Geschichte der preußischen Provinzialstände (hrsg.), 1831; Gutachten über die Staatserbfolge im Herzogtum Schleswig, 1864など多数あるが、省略¹⁰³⁾。

1846年に、シュタイン (Lorenz von Stein, 1815-1890) がキール大学で員外教授となっており、彼は、デンマークからの独立運動で追放されている (ウィーン大学教授)。彼は、ウィーンで日本のお雇い外国人にもなっている (高齢のため日本には来ずに、ウィーンの日本公使館付法律顧問として、年俸2000円。梅謙次郎の年俸が1200円の時代である)。次のプランクは、シュタインとほぼ同時代人である。

(iii) プランク (Johann Julius Wilhelm von Planck, 1817.4.22-1900.9.14) は、1817年、ゲッチンゲンで生まれた。父は、神学教授であった。1834年から、

102) Bülow, Cramer, Andreas Wilhelm, ADB 4 (1876), S.546; Stintzing/Landsberg, Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft, Abt. 3, Halbband 2 Noten 1910, 19.

103) Döhring, aa.O., S.108ff.; ders., Geschichte der deutschen Rechtspflege, 1953, S.391; DBE 3 (1996), S.222; Michelsen, A. L. J., Falck, Niels Nikolaus, ADB 6 (1877), S. 539; Kleinheyer/Schröder, aa.O. (注88), S.476.

イエナ、ゲッティンゲンの両大学で法律学を学んだ。1837年に、イエナ大学で学位（*De legitimatione ad causam*, 1837）。1839年に、ハビリタチオンを取得（*Continentia causae*, 1839）。論文は、訴訟物の結合に関するものであった。1841年に、判決団のアセソール。1842年に、バーゼル大学で正教授。1845年に、グライフスヴァルト大学教授。1848年に、グライフスヴァルト上級控訴裁判所判事。1850年に、キール大学教授。リユーベックの上級控訴裁判所判事。1856/58年、1861年にキール大学学長、1867年に、ミュンヘン大学に転じ、1900年に、ミュンヘンで亡くなった（心臓病）。訴訟法、法史が専門である。サヴィニー財団の委員長をした（*Nachruf ZRG 22 (1901) XVII (Ernst Mayer)*）¹⁰⁴⁾。著作に、*Die Mehrheit der Rechtsstreitigkeiten im Prozessrecht*, 1844, *Die Lehre vom Beweisurteil*, 1848, *Das deutsche Gerichtsverfahren des Mittelalters*, 1879; *Lehrbuch des deutschen Zivilprozessrechts*, 1887などがある。

このプランクは、ドイツ民法制定の第一委員会で著名なGottlieb Planck（1824-1910）とは別人である。今日では、プランク・コンメンタールの創始者として著名である。

(d) ケルンの判決団が、キールやグライフスヴァルトと異なる点は、ハンザ都市関係の鑑定が稀なことである。ケルンは、重要都市ではあったが、ハンザ同盟には必ずしも熱心ではなかったから、かつての同盟都市からの依頼は多くなく、むしろ大司教座や選帝侯の都市として、ローマ法に軸足を置いていた。その点では、ライヒ帝室裁判所やライヒ宮廷顧問会議に近く、みずからも上訴審として選択していたからである（前述Ⅲ 1 (5)）¹⁰⁵⁾。必然的に、ローマ法教育

104) Stintzing/Landsberg, *Geschichte der deutschen Rechtswissenschaft*, Abt. 3, Halbband 2 *Noten* 1910, 247; *Catalogus professorum Göttingensium* 1962, 68 (144); *Niedersächsische Juristen* 2003, 399.

105) Döhring, a.a.O. (前注96)), S.51. ハンザ同盟については、高橋理・ハンザ同盟（1980年）。ケルンは、もともと同盟に消極的であったが（145頁、152頁以下）、15世紀には同盟の拠出金の増額に反対し、イギリスとの抗争時には、同盟に敵対した（1474年のユトレヒト条約）。225頁以下。

を重視しており、それは講座の配置にも影響を与えている。

4 他の学部と財団

神学部、医学部、学芸学部と大学の有する財団については、本稿では立ち入らない¹⁰⁶⁾。

また、ライヒ皇室裁判所やライヒ宮廷顧問会議が介入する場合に、多くの大学の判決団は、事件の判決を放棄した。これらの裁判所は、神聖ローマ帝国の最上級審だからである。ただし、これらの機関は、1495年にマクシミリアン1世の帝国改造計画の一部として創設されたものであり、中世では比較的新しい。ランケ・宗教改革時代のドイツ史(林林太郎訳・ランケ、1980年)108頁、112頁、155頁ほか。Gebhardt, Handbuch der deutschen Geschichte, Bd.7 (Bosl: Staat. Gesellschaft, Wirtschaft im deutschen Mittelalter, 8.Aufl., 1985), S.235ff.

それ以前に、ケルンは、中世都市法の中では、北ドイツに影響を与えた主要都市であり、リューベック、キール、グライフスヴァルトなどと共通する。南ドイツや東方、東ヨーロッパに影響を与えたマグデブルク法とは別系統である。【歴史】288頁。しかし、事件の送付が、バルト海岸の諸都市を超えて、北海側のケルンまでいったかどうかは不明である。独法102号61頁。Kinder/Hilgemann, Atlas zur Weltgeschichte, I, 1964, S.170. Döhringの研究では、キール大学では、かなり広範囲の事件の送付を受けている。S.50f.

- 106) 神学部については、Keussen, S.21ff. 医学部については、S.288ff. 学芸学部については、S.303ff. また、付属施設である Wesebeder財団のArmenhaus については、S.355ff. Collegium Hieronymi Roemondsche Haus は、S.360ff. Joh.von Hueven von Arnheim 財団は、S.36ff. Collegium Phrisonicum は、S.368ff.

若干、神学部長にふれると、Jac.Sprenger o.praed. (80 代部長、1480年)は、教授になったのは、1472-95 年である(127, Jac.Sprenger de Basilea,o.pred. - 1467)。Keussen, S.417, S.426. Heinrich Kramer (?-1505)とともに、魔女狩りに関する著作で有名であり、いずれもドミニコ会士であった。

V むすび

1 改革の試み

(1) 初期のケルン大学は、名声を博し、その教授や卒業生から他の大学へ招聘される者が多数いた。1426年のルーヴァン大学が典型である（同大学は、オランダ・ベルギー地域で最古の大学である。独法118号31頁）。1455年のトリアー大学や1476年のマインツ大学の最初の学長もケルン大学の出身である。バイエルン公（Herzog Ludwig von Baiern）は、その設立にかかるインゴルシュタット大学の最初の副学長を招聘した。この大学は、ミュンヘン大学の起源となっている¹⁰⁷⁾。1475年のコペンハーゲン大学の設立には、ケルン大学は4学部とも係わっている。1456年のグライフスヴァルト大学でも、2人が学芸学部の改革に寄与し、1516年にもその改革に係わった。

しかし、宗教改革後の1520年代から衰退が始まっている。改革は、大学の廃止の時期まで行われたが、必ずしも成功していない。改革は、最大学部は学芸学部では、1457年から始まっている。1522年には、学則の全面改正にいたっている。1530年代には、神学部の学生数の減少が問題となり、1540年代には、大

107) インゴルシュタット大学は、ナポレオン戦争中の1800年に移転し、ランズフート大学となり、さらに1826年にも移転し、ミュンヘン大学となった。【変容】408頁参照。文献は多い。Ludwig-Maximilians-Universität : Ingolstadt, Landshut, München; 1472-1972. 1972; Prantl, Geschichte der Ludwig-Maximilians-Universität in Ingolstadt, Landshut, München : Zur Festfeier ihres vierhundertjährigen Bestehens im Auftrage des akademischen Senats verfasst, 1968; Obermeier, Die Universität Ingolstadt : Köpfe ; Begebenheiten, 1959; Max Haushofer, Auf deutschen Hochschulen 1: die Ludwig-Maximilians-Universität zu Ingolstadt, Landshut und München in Vergangenheit und Gegenwart, 1890; Seibert, Jakob, 100 Jahre Alte Geschichte an der Ludwig-Maximilians-Universität München (1901-2001), 2002; Buzas, Bibliographie zur Geschichte der Universität Ingolstadt-Landshut-München, 1472-1982, 1984.

学のアキレス腱となった。社会変革である宗教改革に対応できなかったからである。

そこで、大学改革は、大司教アドルフの開催した1549年のケルン地域の公会議の検討の対象ともなった。大学の学長、4学部長、第1の聖職禄の保持者も招かれた。神学部の人件費のための市や聖職禄の分担金などが合意されたが、あまり実行されなかった。1550年に、ルーヴァンに倣って3言語団 (Collegium trilingue, 多言語の民族団ということである。プラハ大学の同郷団が著名である) を建設することも失敗した。その代わりに、3博士ギムナジウム (Tricoronatum) ができた (1556年。1582年に、イエズス会の支配下に入った)。現代の入学者確保のための付属高校の新設のようである¹⁰⁸⁾。イエズス会の活動はこのころ盛んになり、ウィーン大学でも、1551年に神学校ができた (Universitätskolleg)、これは、1623年に大学と統合された。

(2) 1584年から、ケルンは、教皇大使の常設地となった。この時から恒常的に、大学は、その監視下におかれることになったのである。強力なパトロンのない弱点が露呈した。教皇大使から、ケルン大学にはカノン法の講義が乏しいと、たびたび指摘されている。しかし、それは聴講者の少ないことに起因するのであって、講義の少ないのは結果にすぎない。根本的な問題は別にあった。大学も、第3の聖職禄の獲得ばかりに熱心であった。1620年には、また、法学部の改革が問題となった。

1678年に、教皇イノセンス11世が、大学の改革を急務としたのに対し、教皇大使のOpizio Pallavinciの強欲は、改革を挫折させた。彼は、自分のために3つの学位を大学に求めた。17世紀の終わりにも、教皇大使の聖職禄に対する変更(回収)の試みをみることができる。大学も財政問題にのみ熱心である。そこで、講義の補充が、イエズス会の神学校で行われるというイエズス会の助力によることになった。しかし、イエズス会は、教皇のための教科を提供したの

108) Keussen, S.369ff. また、このギムナジウムがイエズス会の影響の下で設立されたために、その後の改革を妨げる結果ともなったのである。1556年に、大学と統合。ギムナジウムといっても、中世の大学は、ギムナジウムを改組しただけのものが多くことから、大学との相違はあまりないのである。

みであり、対立が残っただけである。こうした中世的な争いのうちに、啓蒙の成果を取り入れることに残り残されたのである。

1733年に、Hamm教授の公法の講義が行われ、法学部で新しい試みが行われたが、長くは続かなかった。長らく放置されていた医学部では、解剖学の建物と植物園が建設された。これには影響力があり、医学部は、多数の有能な教授を集めた。しかし、1788年に、ケルンでは400年祭を祝う時期に、ボンでは新しい大学が設立されていた。それは、選帝侯の支持をうけ、ケルン大学では、最後まで反対にあった啓蒙の精神を基礎とするものであった¹⁰⁹⁾。

2 大学の廃止

(1) ケルン大学の凋落は、近在のボン大学の設立にもよっている。ケルン選帝侯は、市参事会によって設立されたケルン大学に好意をもたなかった。大学への情熱は、むしろボンやミュンスターの新大学の設立に向けられたのである。また、ボン大学は、設立の当初から啓蒙の精神による。ケルン大学は、長くイエズス会の影響が大きかったことから、改革の機会を失ったのである。

18世紀末の転換期に、ケルンは、フランス革命軍による占領をうけ、ライン左岸の多数の大学は廃止された。長い伝統を誇るケルン大学も1798年に廃止された。

もっとも、その廃止時の状況は、必ずしも学生数の減少だけが理由ではない。エルフルト大学が廃止された時に、1800年の入学者は、21人のみであったが、ケルン大学では、1788年の最後の入学者は、160人であった。同年のハイデルベルク大学の入学者は、131人で、ロシュトック大学は、55人、グライフスヴァルト大学は、34人であった。ライプチヒ大学の371人やイエナ大学の354人、ゲッティンゲン大学の396人に比して少ないが、キール大学でも76人、エルランゲン大学でも79人に過ぎなかったのである¹¹⁰⁾。ケルン大学は、人口も学生数も

109) Keussen, S. 372ff.

110) Franz Eulenburg(1867.6.29-1943.12.28), Die Frequenz der deutschen Universitäten von ihrer Gründung bis zur Gegenwart, 1904 (Neud.1992), S.296ff. (Des XXIV. Bandes, Der Abhandlungen der Philologisch-Historischen Klasse der Königl.

少ない中世の盛時に400人を超える入学者を数えたこともある(1484年に493人、1496年に578人、1498年に505人)。大学の維持や再建は、ラント首長の意向しだいであったともいえる(大学の初期の状況は、129頁の図3参照)。

1781年から1788年の学生数の比較(入学者)

	1781	1782	1783	1784	1785	1786	1787	1788年
ケルン	160	152	129	135	150	132	139	160
エルフルト	33	39	41	53	41	33	32	34
ロシュトック	16	16	12	12	15	19	31	55
ライプツヒ	386	399	376	368	366	394	423	371

ケルンは大都市であったが、ウィーン会議後、ライン地域を獲得したプロイセンは、カトリックの伝統の長いケルン大学を再建しなかった。ボン大学は、カトリックとプロテスタントの2 神学部制の大学として再建されたのである。ベルリン大学と同様に、ルター派のプロイセンの国是に従った大学であった¹¹¹⁾。

Sächsischen Gesellschaft der Wissenschaften No II, mit einer Karte und 8 Graphischen Darstellungen)

- 111) Keussen, S.375ff. ボン大学の設立については、Renger, Die Gründung und Einrichtung der Universität Bonn und die Berufungspolitik des Kultusministers Altenstein, 1982 (Academica Bonnensia ; Bd. 7); Braubach, Kleine Geschichte der Universität Bonn, 1818-1968, 1968; Braubach, Die erste Bonner Hochschule, Maxische Akademie und Kurfürstliche Universität 1774/77 bis 1798 (Academica Bonnensia Bd.1), 1966; Hübinger, Das Historische Seminar der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn, 1963; Bezold, Fr.von, Geschichte der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität, Bd.1,2, 1920.1933; Wenig, Otto (hrsg.), Verzeichnis der Professoren und Dozenten der Rheinischen Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn 1818-1968, 1968.また、Braubach, M., Die erste Bonner Universität und ihre Professoren, Ein Beitrag zur rheinischen Geistesgeschichte im Zeitalter der Aufklärung, 1947; Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, The

(2) ボン大学は、1730年のギムナジウム（イエズス会）を基礎とし（1773年のイエズス会の禁止は転機となった）、1777年に大学相当のアカデミーとなった。自分の大学をもちたいというケルン選帝侯の長年の悲願は、ここに達成さ

University of Bonn, 1987. 大学に関する一般史でも扱われている。Lexis, Die Universitäten im Deutschen Reich (前注4)), S.336ff.; Moulin Eckart, Geschichte der deutschen Universitäten (前注4)), S.399ff.

また、学部ごとの歴史的検討は多いが（カトリック神学部、プロテスタント神学部、哲学部、歴史学、農学、語学、自然科学）、省略し、法学部については、Schmoeckel, M. (hrsg.), Die Juristen der Universität Bonn im Dritten Reich, 2004. 国法学については、Staatswissenschaften (=150 Jahre Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität zu Bonn 1818 - 1968, Bd. 2.3), 1968. ボン大学は、早くからナチス期に関する反省と研究が盛んである。Höpfner, Hans-Paul, Die Universität Bonn im Dritten Reich. Akademische Biographien unter nationalsozialistischer Herrschaft, 1999; Höpfner, Hans-Paul, Die vertriebenen Hochschullehrer der Universität Bonn 1933 - 1945, in Bonner Geschichtsblätter 43/44 (1993/94), S. 447ff. 上記のSchmoeckelもその一部である。Schmoeckel, Das Juridicum: Das Bekenntnis der Universität zur Bonner Demokratie, 2016もある。その後の占領期の研究もある。Fuchs, Die Bonner Universität in der Besatzungszeit : ein Abwehrkampf, 1935. 第1次世界大戦期のもものでは、Tillmann, Fritz, Verzeichnis der im Weltkriege 1914 bis 1918 gefallenen Dozenten, Assistenten und Studierenden der Universität: Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität, 1926. 特殊なものでは、図書館を扱うSchürfeld, Die Universitätsbibliothek Bonn 1921-1968 : erlebte Bibliotheksgeschichte, 1974 (Bonner Beiträge zur Bibliotheks- und Bücherkunde ; Bd. 25), 肖像画や図版による Reitmeister, Doris, Alma Mater Bonnensis: Porträts, 2009; Altes Bonn, Grafische und Malerische Darstellungen aus vier Jahrhunderten Zusammenstellung und Texte von Ilse Riemer, 1978. 大学の建物に関する Universität Bonn, Die Namenspatrone der Veranstaltungsräume und Apartment, 2010がある。ボン大学は、比較的新しい大学であるが判決団に関する研究もある。Laagland, D., Lehren, Forschen, Recht sprechen ; Die Spruchpraxis als Teil des Berufsalltags an der juristischen Fakultät zu Bonn im 19. Jahrhundert. 2016. (Rheinische Schriften zur Rechtsgeschichte, 24). ボンやベルリンのような19世紀に設立された大学でも、ドイツに特有な判決団が活動していたことがわかる。

れたのである。

歴代のケルンの選帝侯には特徴があり、アカデミーを設立したのは、ケルン選帝侯のマクシミリアン・フリードリヒ (Maximilian Friedrich von Königsegg-Rothenfels, 1761-1784) である。彼は、比較的地味であるが、前代の選帝侯のクレメンス・アウグスト (Clemens August I von Bayern, 1723-1761) は、ブリュールにアウグストゥスブルク (Augustusburg) の宮殿を建て、鷹狩りに興じた (Falkenlustは、鷹狩用の別邸で、ブリュールの建物は現在世界遺産となっている)。

また、次の(最後の)選帝侯のマクシミリアン・フランツ (Maximilian Franz von Österreich, 1784-1801) は、ベートーベンとの関係で著名である。ベートーベンの祖父は、この選帝侯の宮廷の楽長、父も歌手であり、ベートーベンがウィーンに出たのも、選帝侯がオーストリア王家の出身であり (マリア・テレジアの末息子)、ウィーンと縁が深いことを機縁とする (ハイドンとの関係など)¹¹²⁾。

しかし、こうして設立されたボン大学も短期間で、1798年に廃止され (1806年に、神聖ローマ帝国も解体し、選帝侯も廃止である)、ケルン大学と同様に、Zentralschule となった¹¹³⁾。フランス革命後は、多くの大学が廃止された。速

112) 歴代のケルン選帝侯の肖像画が、ボンの旧市庁舎に残されており、著名なものは、旧市庁舎の開帳日に展示される。この旧市庁舎は、官庁街のBad-Godesbergからは離れているが、ボンの旧市街にあり、外国の要人が来たときなどに接見のために用いられる。

また、ケルン大司教は、世俗の選帝侯位を失っても、聖界の地位は存続している。

113) Rüegg, aa.O.(前注1)), S.82, S.84. 比較までに、フルダ大学にふれると、同大学は、修道院長・侯Adolph von Dalbergによって1732/33年に設立された (クレメンス12世とカール6世の特許状をえた)。Adolphは、最高学長 (Rector Magnificientissimus) となり、副学長も聖堂主司祭であった。もとは、イエズス会のギムナジウムで、1584年に、教皇のゼミナール (Päpstliches Seminar) と統合されたのである (哲学部と神学部)。神学校的な性格は長く残り、1756/63年の七年戦争時に、諸国軍により荒廃し、十分復興しないまま、教会の世俗化により、1805年に廃止された。Vgl. Mühl, Die Aufklärung an der Universität Fulda mit besonderer Berücksichtigung

成の神学校や技術学校が流行した。その克服には、ベルリン大学にみられるフンボルト理念を待つことになったのである。こうして、ボン大学の再建は、プロイセンの手によることになる¹¹⁴⁾。

der philosophischen und juristischen Fakultät (1734-1805), S.1ff., S.53ff. (Quellen und Abhandlungen zur Geschichte der Abtei und der Diözese Fulda, XX).

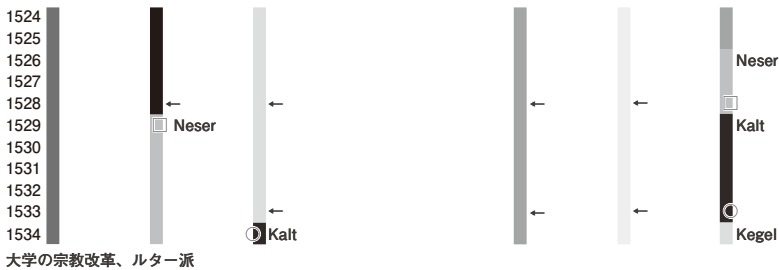
その後、司祭の養成のためには、神学部からできた神学校が設立された。設立がフルダとはほぼ同時期のゲッチェンゲン大学も、1733/37年に設立され存続しているから（プロテスタントの大学である）、設立時期だけで廃止が説明できるわけではない。Vgl. Muhl, Die Aufklärung an der Universität Fulda mit besonderer Berücksichtigung der philosophischen und juristischen Fakultät (1734-1805); Rüegg, II, S.85f. イエズ会の禁止が大きな影響を与えている。Muhl, S.53ff. 大学からその影響を除去するか、大学自体が凋落するかである。独法118号78頁参照。大学の世俗化は、カトリックの大学には大きな打撃であった。プロテスタントの大学は、宗教改革時に、すでに世俗化（カトリック財産の接収）を経験しているからである。

- 114) ボン大学の設立については、【変容】412 頁参照。その構成は、中世とはやや異なり、プロテスタント神学部とカトリック神学部の2学部の並立であった。プロイセンの国是はルター派であり、廃止前の旧大学のようなカトリックのまま再建しないことは明らかであった。北ドイツに、その後帝政下に作られた大学でも、二学部制はみられ、その先例となった（ミュンスター大学、フランクフルト（マイン）大学）。神学が力を失った時代であり、前述のように、ケルン大学（新大学）には、神学部は設置もされなかった（ハンブルク大学では、精神科学部の中に、カトリックのInstitutとプロテスタントの学問領域がある）。Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn, 1987, S.12. 現在でも同様であり、ほかに、法学、医学、哲学の学部があり、その後、農学部と数学・自然科学部が付加された。

なお、前注111)の第2のSchmoeckelは、Bonner Gelehrte. Beiträge zur Geschichte der Wissenschaften in Bonnのシリーズである（Bd. 3: Staatswissenschaften）。ほかに、神学部、哲学部、歴史、語学、農学、自然科学部などもある。

図1 1477年から1534年のチュービンゲン大学法学部の講座の担当者

年	教会法 Kirchenrecht			世俗法 Weltliches Recht =ローマ法		
	1 正教授 1 Ordinarius	2 員外教授 2 Extra-ord.	3 新法 3 Prof.f.neuen R.iura nova	1 正教授 1 Ordinarius	2 員外教授 2 Extra-ord.	3 法学提要 3 Prof. Institutionen
1477	Vergenhans	Truchseß?	Heckbach?	Marengi	?	・ ?
1478					Kreuzlinger	・
1479			Ochsenbach?			・ Bechinger?
1480				Maelius		
1481						
1482	Hartsesser?			Chabot		Blicklin?
1483						
1484	?		←	←	←	①
1485			○ ?	Kraft		・ Burckhard ?
1486					Croaria	・ Strainmayer ?
1487						・
1488						・
1489						・
1490	Prenninger					・ ?
1491			Blicklin?		Lamparter?	・
1492						・
1493						von Fürst
1494						
1495			Blicklin			
1496	Prenninger	?	Blicklin	Croaria	Lamparter?	Lupfdich
1497		(Veßler?)		←	△ ←	□
1498				△	□ Lupfdich?	・ (Volland?)
1499						・
1500	←	←	①			・
1501	○ Blicklin?		Adler ?	?		・ ?
1502		Forstmeister?				・
1503						・
1504						・
1505						・
1506				Ambr.Widmann?		・
1507						・
1508						・
1509			△ →			・
1510	Blicklin?	Forstmeister	Winkelhofer	△ Adler		?
1511						
1512						Hemminger
1513						
1514					Simler	
1515						
1516						
1517				←	△ ←	○ 宗教改革
1518				△ Simler	○ Hemminger	Kingsattler
1519	Blicklin	Forstmeister	Winkelhofer	Simler	Hemminger	Kingstattler
1520			←	←	←	△
1521			△ Kingstattler			Braun
1522						
1523						



チュービンゲン大学法学部の講座は、教会法と世俗法に大別され、それぞれにつき、正教授と員外教授が1名ずつであった。世俗法は、基本的にローマ法を意味する。さらに、教会法の第3講座として、新法担当、世俗法の第3講座として、法学提要の講座があった。第3講座から第2講座、さらには第1講座への移動・昇進がみられるが、特徴的なことに、教会法第3講座から、世俗法第1講座への移動もみられる。

Finke, Die Tübinger Juristenfakultät 1477-1534, Rechtslehrer und Rechtsunterricht von der Gründung der Universität bis zur Einführung der Reformation, 1972.

図2 ミュンヘン大学の 1830/31~1846/ 47年の執行部、学長、評議員

学長				
1830 / 31	1 神学部	Allioli	ラント議会	Dresch
1831 / 32	2 法学部	Bayer		
1832 / 33	3 国法経済	Oberndorfer		
1833 / 34	4 医学部	Ringseis	ラント議会	Dresch
1834 / 35	5 哲学部	Siber		
1835 / 36	1 神	Wiedemann		
1836 / 37	2 法	Bayer	ラント議会	Ringseis
1837 / 38	4 医	Weissbrod	国法経済が欠	
1838 / 39	5 哲	Siber		
1839 / 40	1 神	Wiedemann		
1840 / 41	2 法	Zenger	ラント議会	Bayer
1841 / 42	3 国	Oberndorfer		
1842 / 43	4 医	Buchner		
1843 / 44	5 哲	Streber		
1844 / 45	1 神	D・linger		
1845 / 46	2 法	Phillips	ラント議会	D・linger
1846 / 47	4 医	Weissbrod	国法経済が欠	

19世紀になっても、ミュンヘン大学の学長は、神学部、法学部、国法経済、医学部、哲学部の順おくりで、国法経済は、2分の1の割合で組み込まれている。医学部の Ringseis は、評議員となった1832/3年から、上級医事顧問官の肩書を有する。ラント議会の代表は、大学の有する議会席であり、人が変遷しているが、医事顧問官は、Ringseisが個人的にラントで占める地位で、固定している。Vgl. Huber, Universität und Ministerialverwaltung, 1987. (Ludovico Maximiliana, Universität Ingolstadt-Landshut-München, Forschungen und Quellen, hrsg.v.Boehm, Forschungen Bd.12), S.587.

図3 諸大学の新規登録者（初期の時期の数）

大学入学者1386年から1422年

Eulenburg, S.285ff.

(1365設立)

	Heidelberg	Köln	Erfurt	Leipzig	Rostock	Wien
1386	181					166
1387	398					153
1388	247	(設立)				127
1389	177	763				241
1390	249	79				224
1391	98	107	(設立)			137
1392	32	70	523			170
1393	59	7	上と合計			72
1394	87	96	44			153
1395	74	62	201			172
1396	92	79	187			192
1397	85	80	186			123
1398	58	86	179			157
1399	109	61	189			109
1400	211	56	242			212
1401	290	50	204			242
1402	90	55	247			190
1403	92	81	255			145
1404	160	102	232			92
1405	152	72	192			27
1406	89	92	253			135
1407	100	82	216			?
1408	117	73	278	(設立)		223
1409	100	119	370	368		231
1410	51	98	229	247		303
1411	74	97	144	222		399
1412	99	75	145	215		484
1413	50	93	262	205		186
1414	89	137	203	180		359
1415	114	127	101	126		395
1416	167	120	123	147		162
1417	230	239	218	198	Rostock	285
1418	130	105	207	219	(設立)	366
1419	126	132	251	268	{ 386 2年合計	217
1420	122	66	161	250		232
1421	151	284	144	199		100
1422	112	288	166	335	138	432